

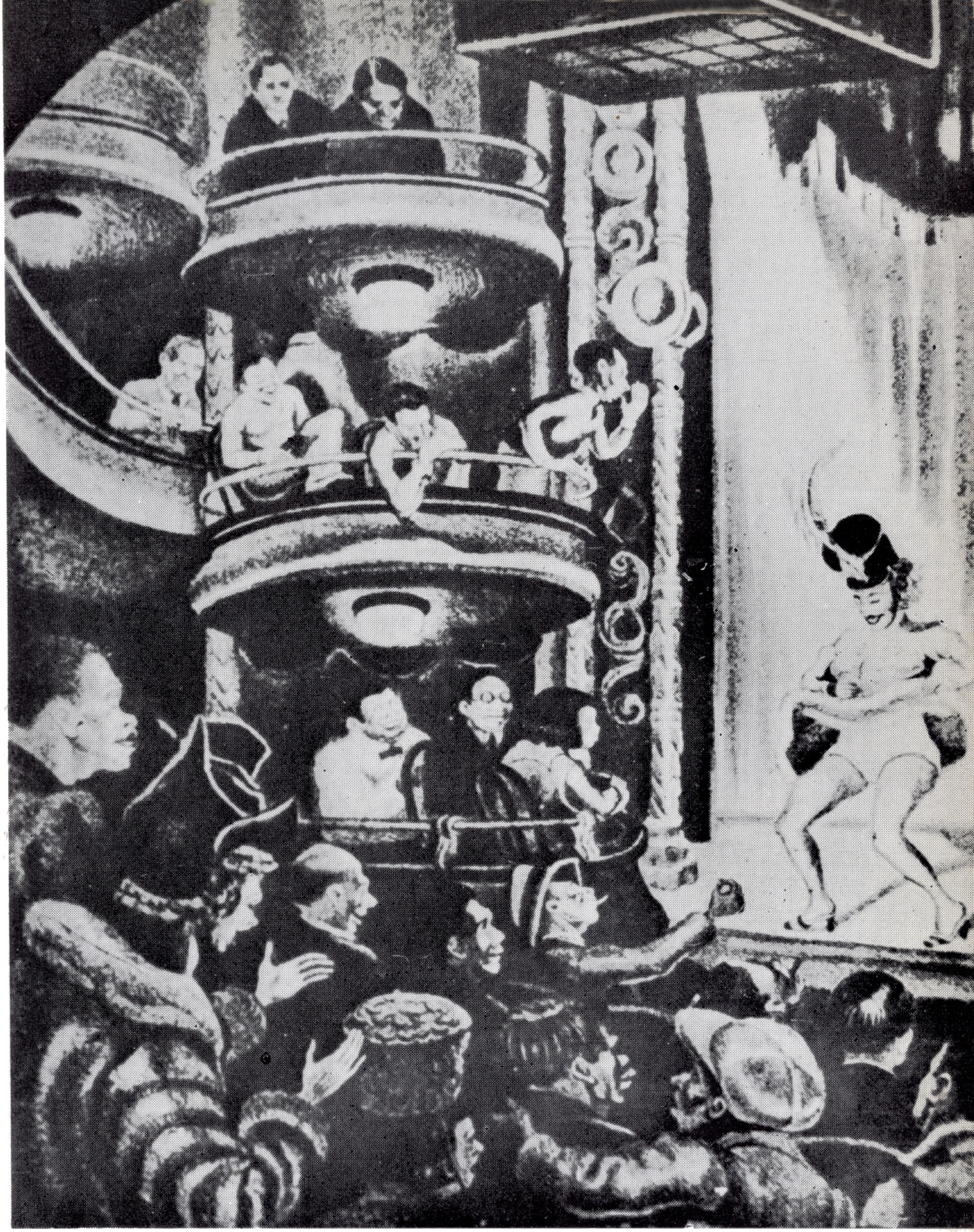
裸ばなし

女のシリ・シンフォニー

岡田恵吉著



著　者



バートラム・グッドマンの筆になる
“バアレスク”

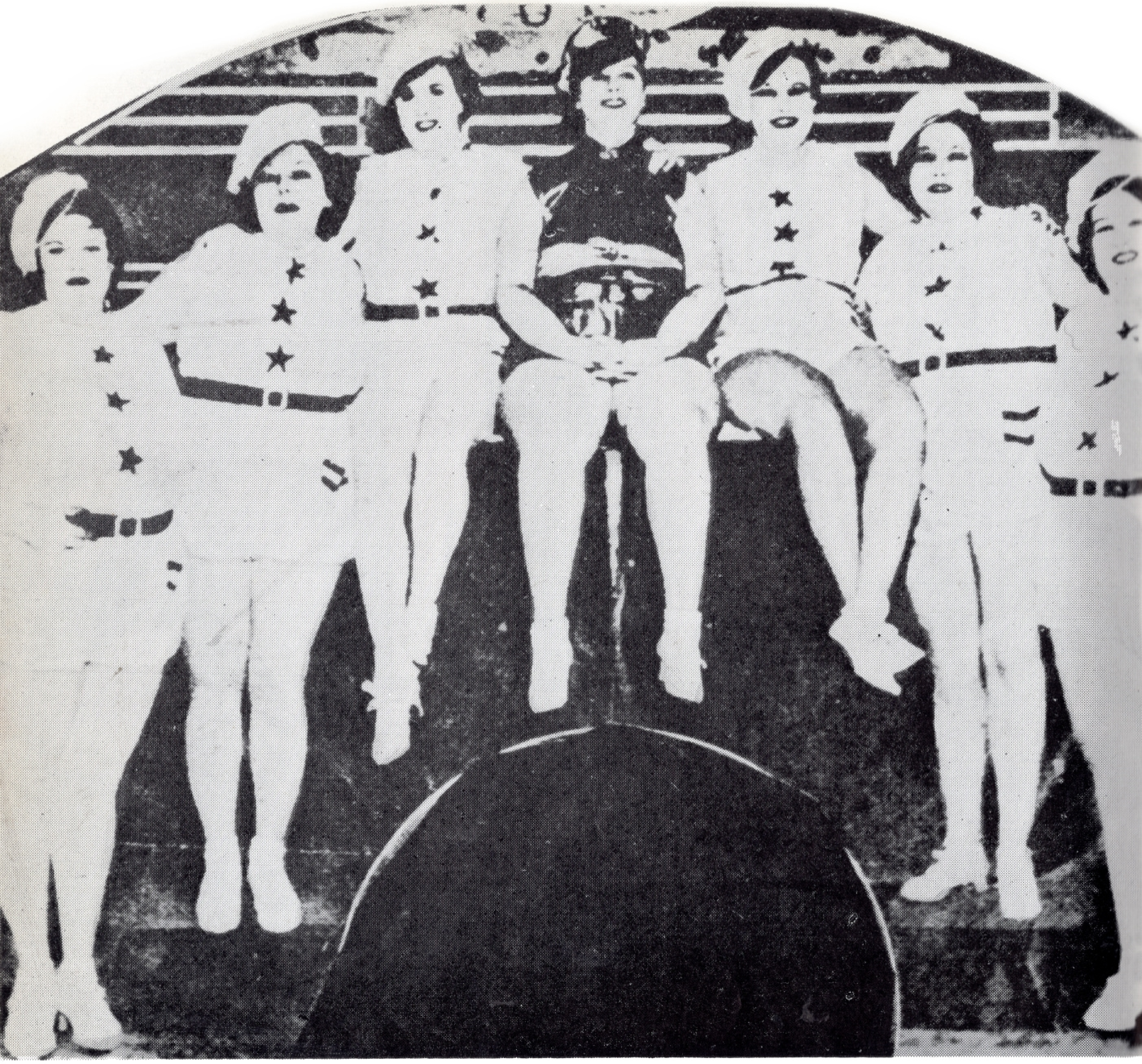


性的魅力と知性の完全融和の淑女

ジプシー・ローズ・リー



リディア・トンプソンのロビンソン・クルソー　1869年



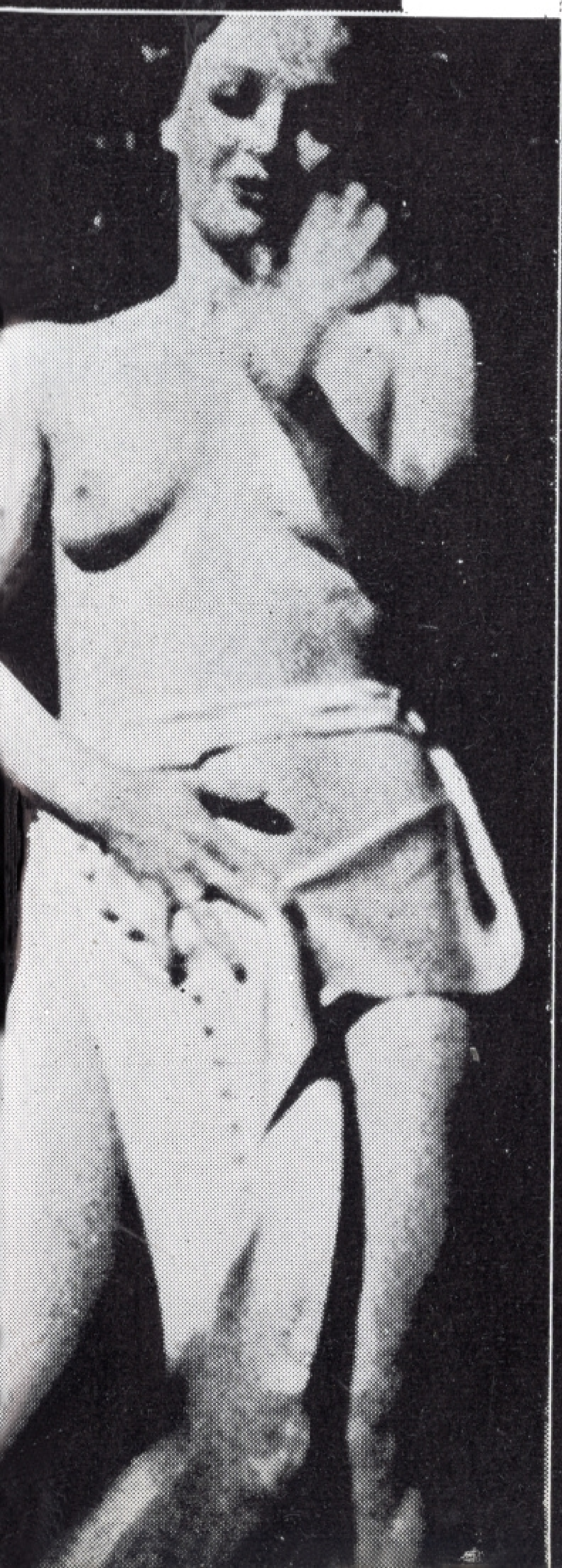
ビリー・ワットソンの“太っちょ美人”1900年初頭こんな愉快な連中が騒いで舞台に愛嬌を添えていた。

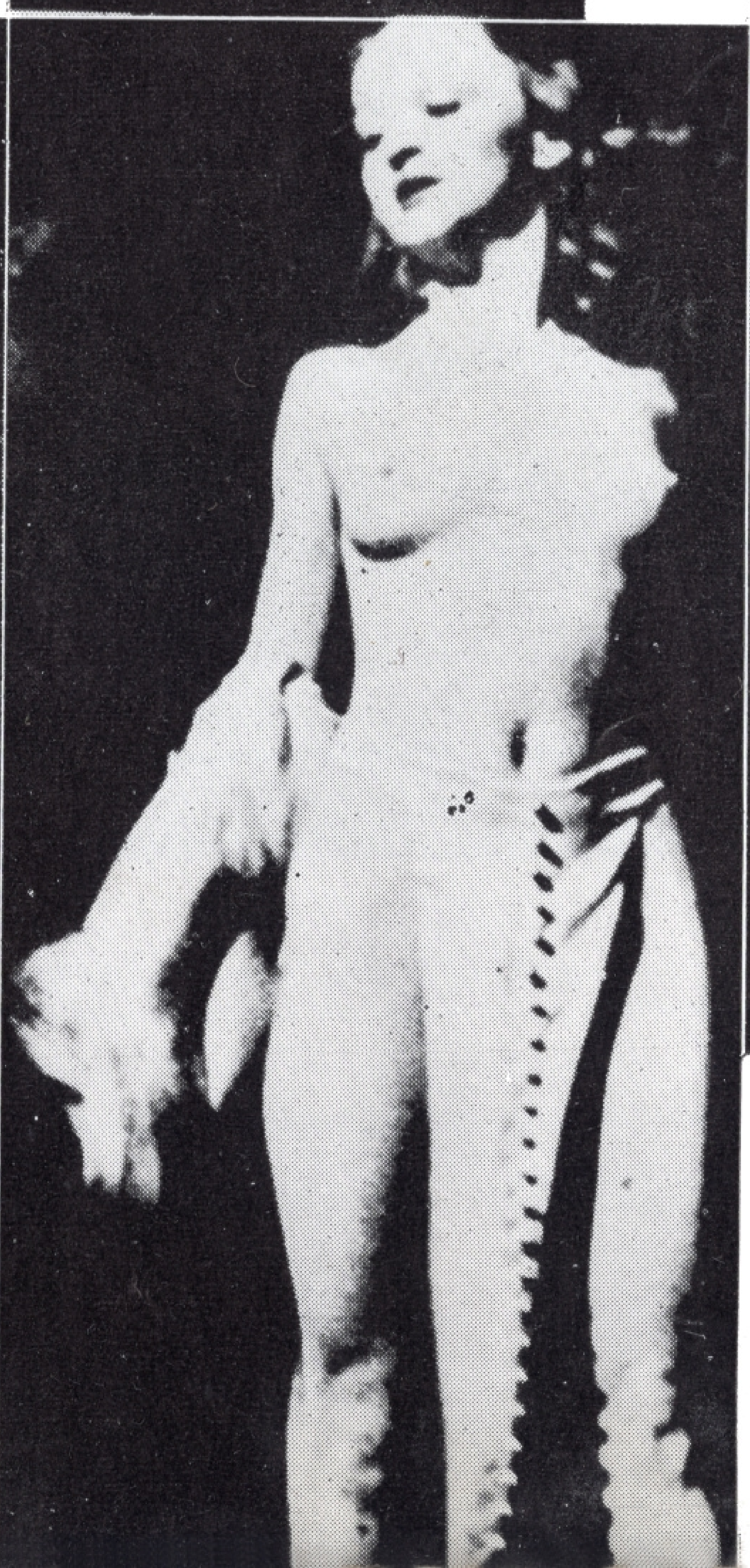


←









↑ストリップ・ティー
ズの導入部
先づ前を脱いだエレ
ガント・スタイル

これは
お色気充分の
お茶っぴいな
ストリップア
クト











典型的なバアレスク・コメディーのスナップ
手に持った小道具の瓶が曲物で、爆笑の材料になる。高さの位置など御注意。



ジプシー・ローズ・リーとボビー・クラークの
ヒット・ショウ“スターとガーター”の一場面



ヴァル・ドウ・バル

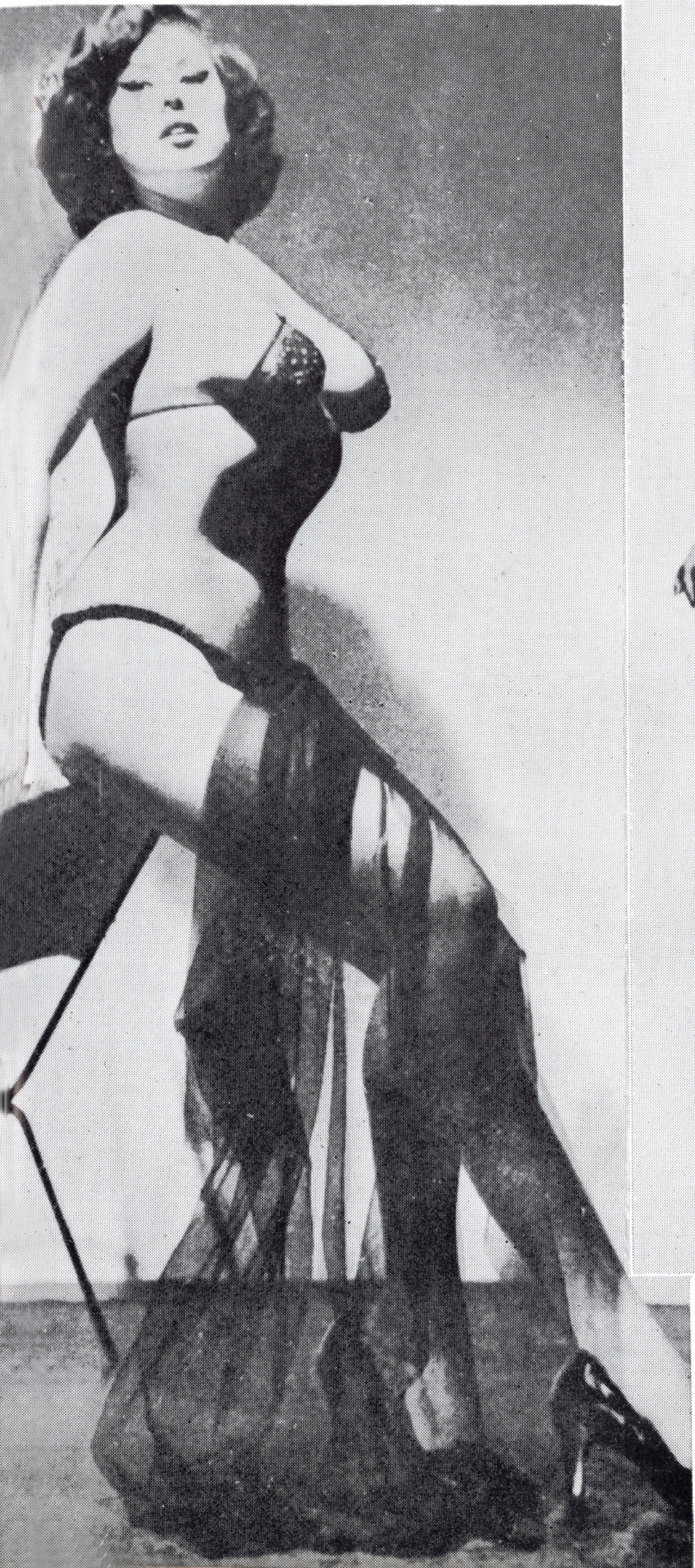


近代アメリカン・バアレスク育ての親、ハロルド・ミンスキーの夫人で、有名なストリッパー、ダーディ・オーランド



偉大なる御バスト48インチ

シンシヤの見事なシルウエット





マギー・ハートの
スピリチュアルな姿態



キャット・ガール
リリー・クリスティン



モダンタッチで有名な
リリ・サン・シイル



ストリップも女だけのものではなく、男も裸になる。これはラスベガスでやったメエウエストのショウの中のシーン。



バアレスクのストリップティーズとか、その他種々なスタイルの露出趣味は、正統なミュージカルの舞台にも、とうとうと流れ込んでいる。バス・ストップにもパルジョイにも、最も成功したのはダムン、ヤンキー中に見せた、ダエンベルドンの大胆なストリップテーズだ。



舞台に始めて完全なる美しいヌードを見せた片岡マリ（23年２月）新宿帝都座ショウ。画題はゴヤのマヤ夫人
昭和22年１月帝都座開場と同時に秦豊吉氏の計画で裸が舞台の花と咲いたわけだ。第一回の額縁ショウは、中村笑子のヴィナス、第二回が甲斐美晴、第三回から片岡マリになった。

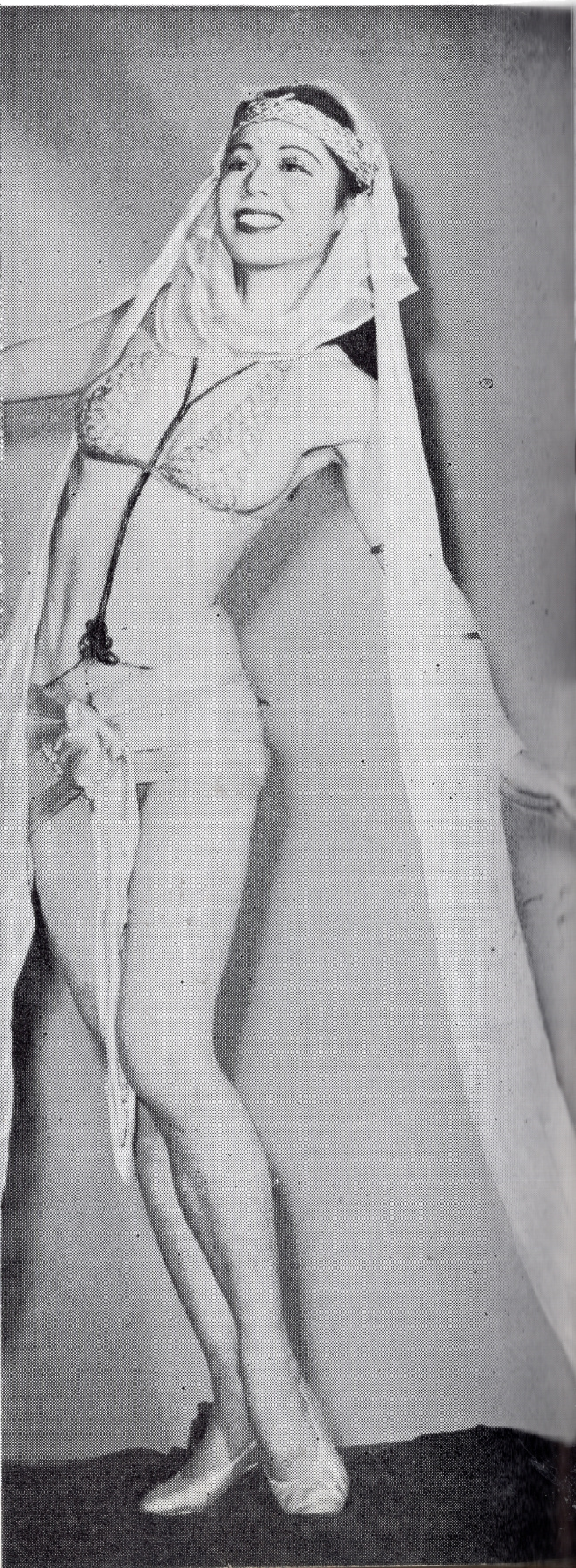


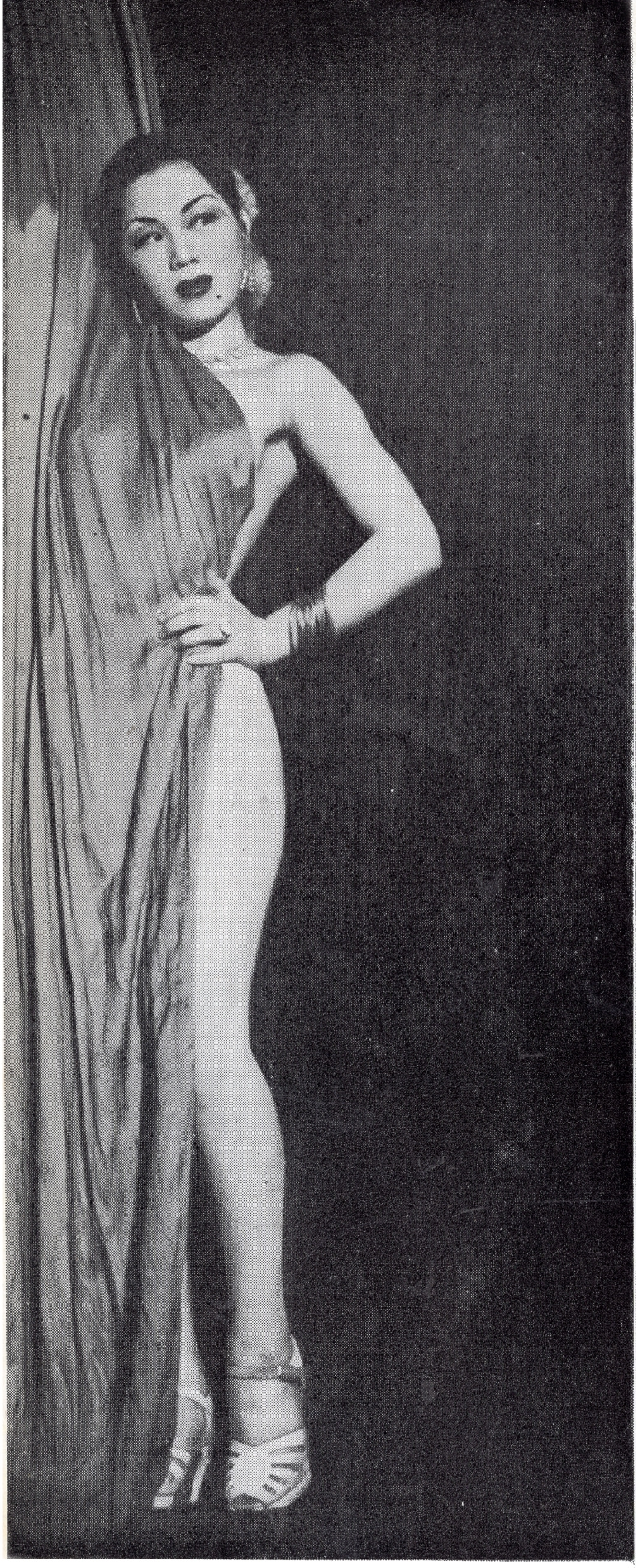


日劇小劇場では、軽演劇や、ショウの中に、ヌードを見せる企画をいろいろやって、全バアレスクへの転換を着々と用意していた。
これもその当時の一舞台面。
中心はミミー丸山、今見ても大したヴォリュームをもっている。

(24年)

メリー松原（24年）





福田はるみ（24年）

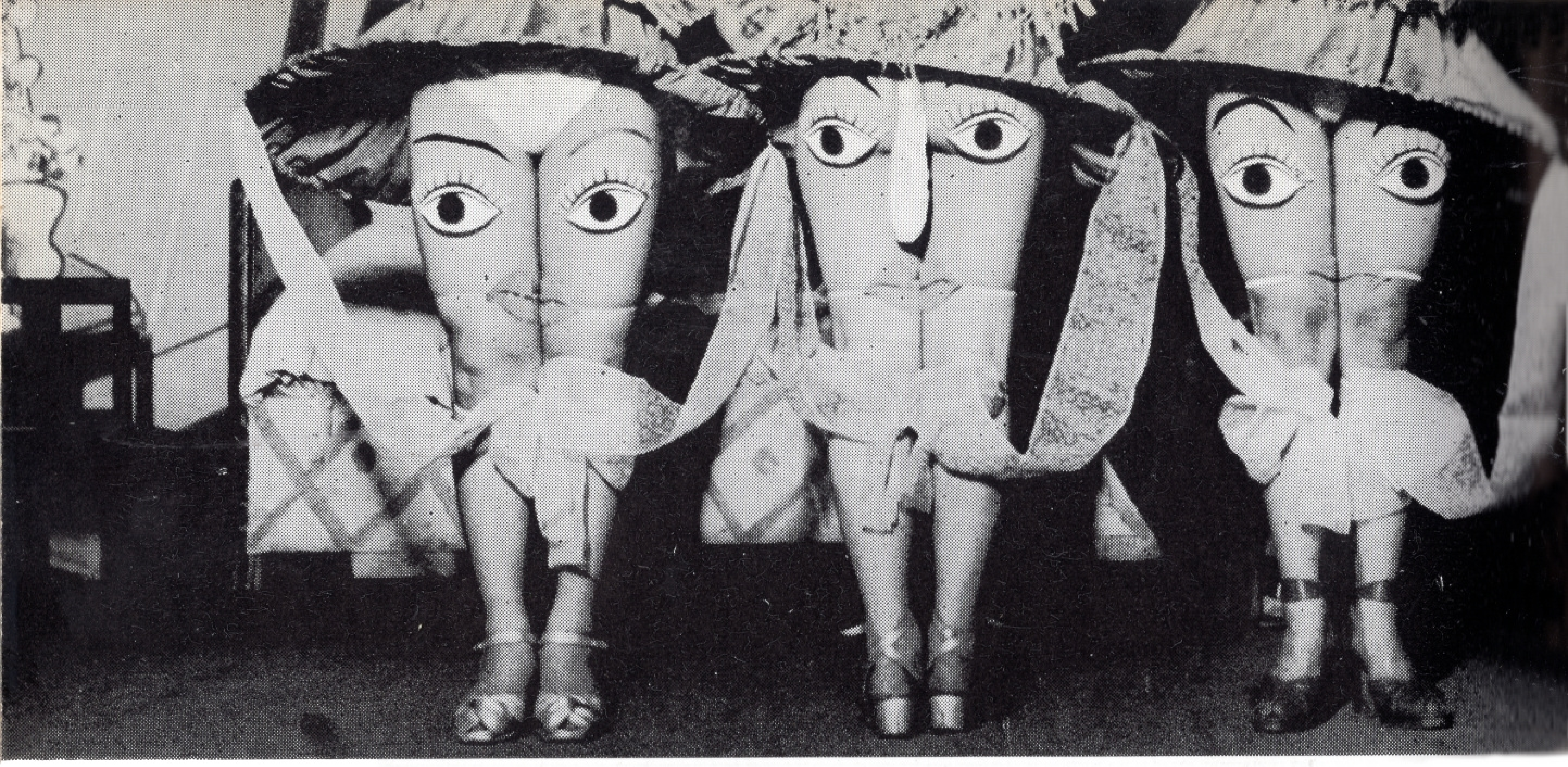


ベティー丸山（25年）

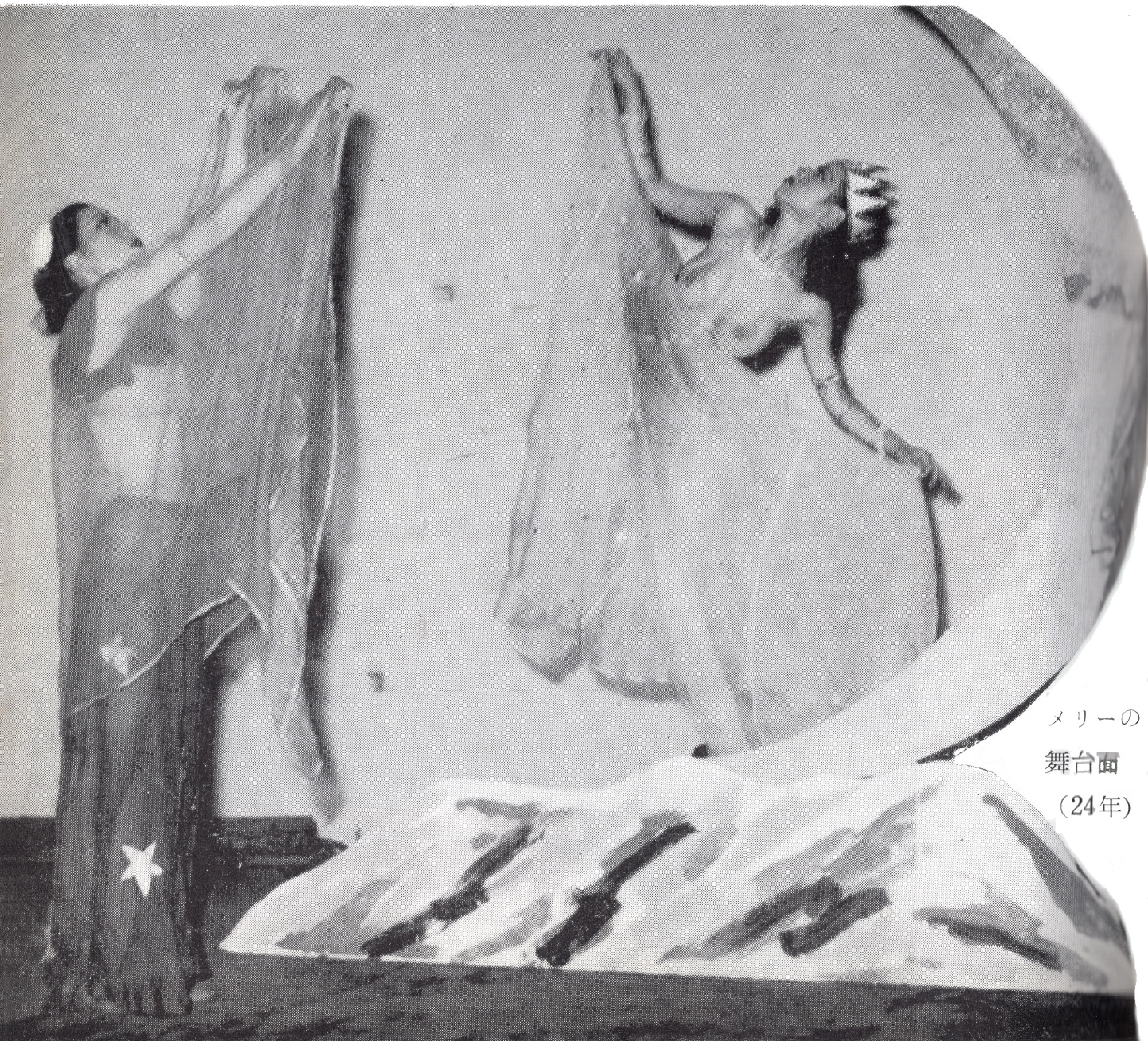
ミミー、ベティーのストリッパー姉妹、後年末妹のローズもストリッパーになった。
珍しい三人姉妹のヌードベティーが一番美しかった。

ミミー丸山（24年）





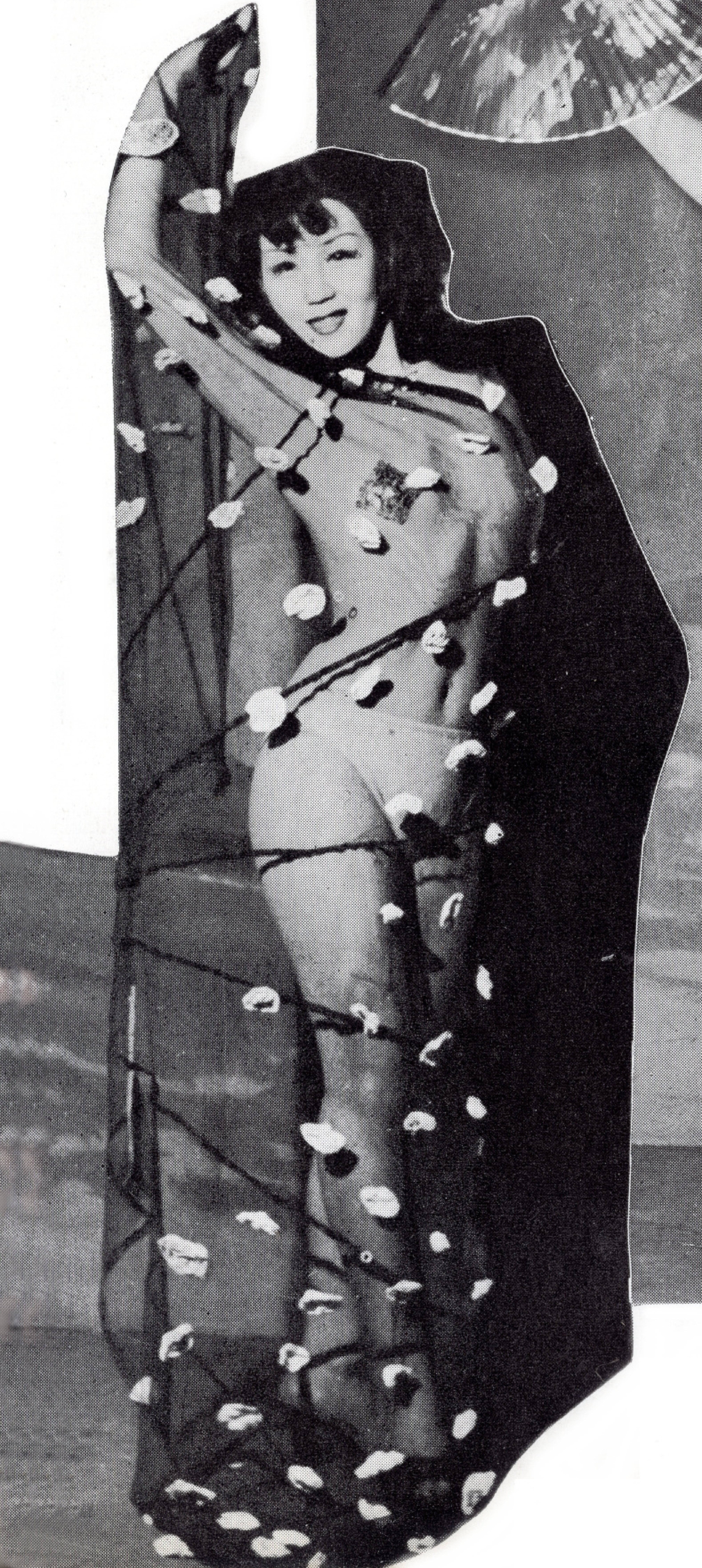
前後に顔を描いた踊子の脚（見世物のアイデア）（25年）



メリーの
舞台面
（24年）

お得意のファン
ダンス





ヒロセ元美のあの頃（25年）

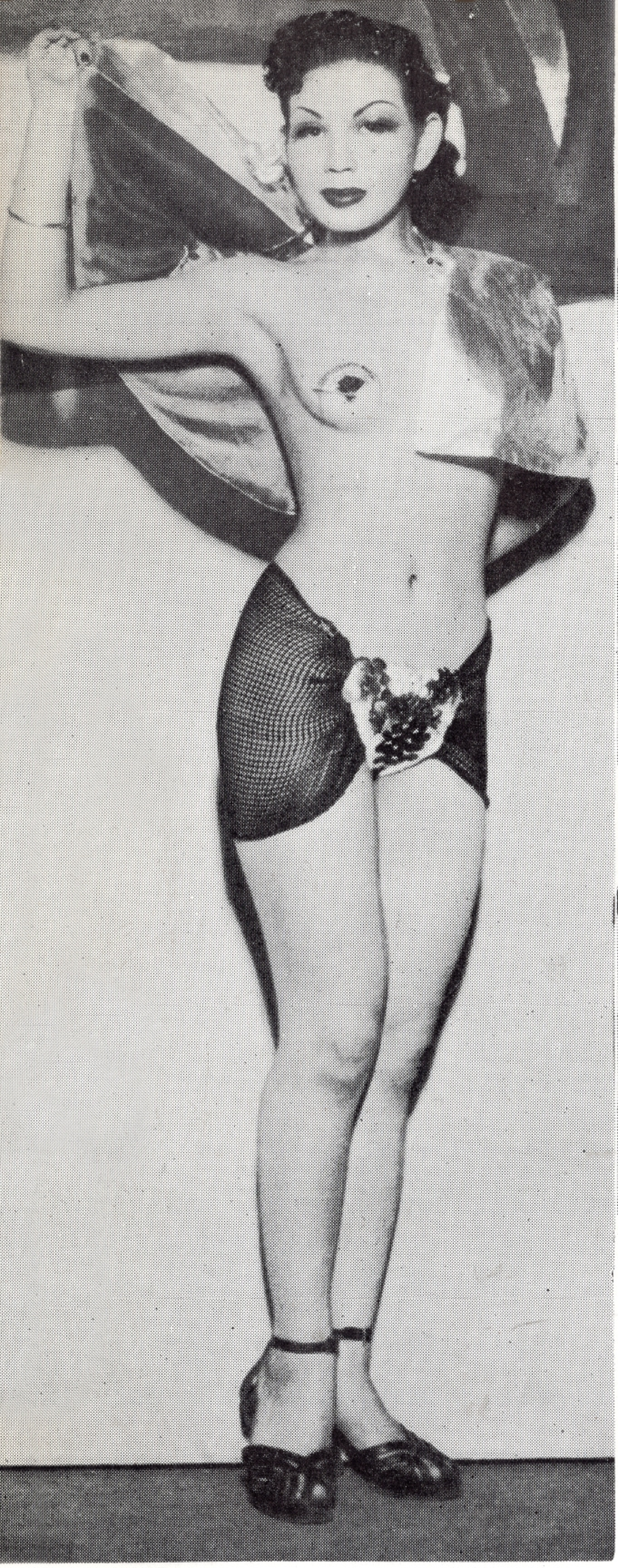


伊吹マリ（まり代とは云わなかった）30年改名した
タンジールの踊子（25年 9 月）



島崎魔子の“慾望という名の船体”　　　　(25年9月)

日小バアレスクの花



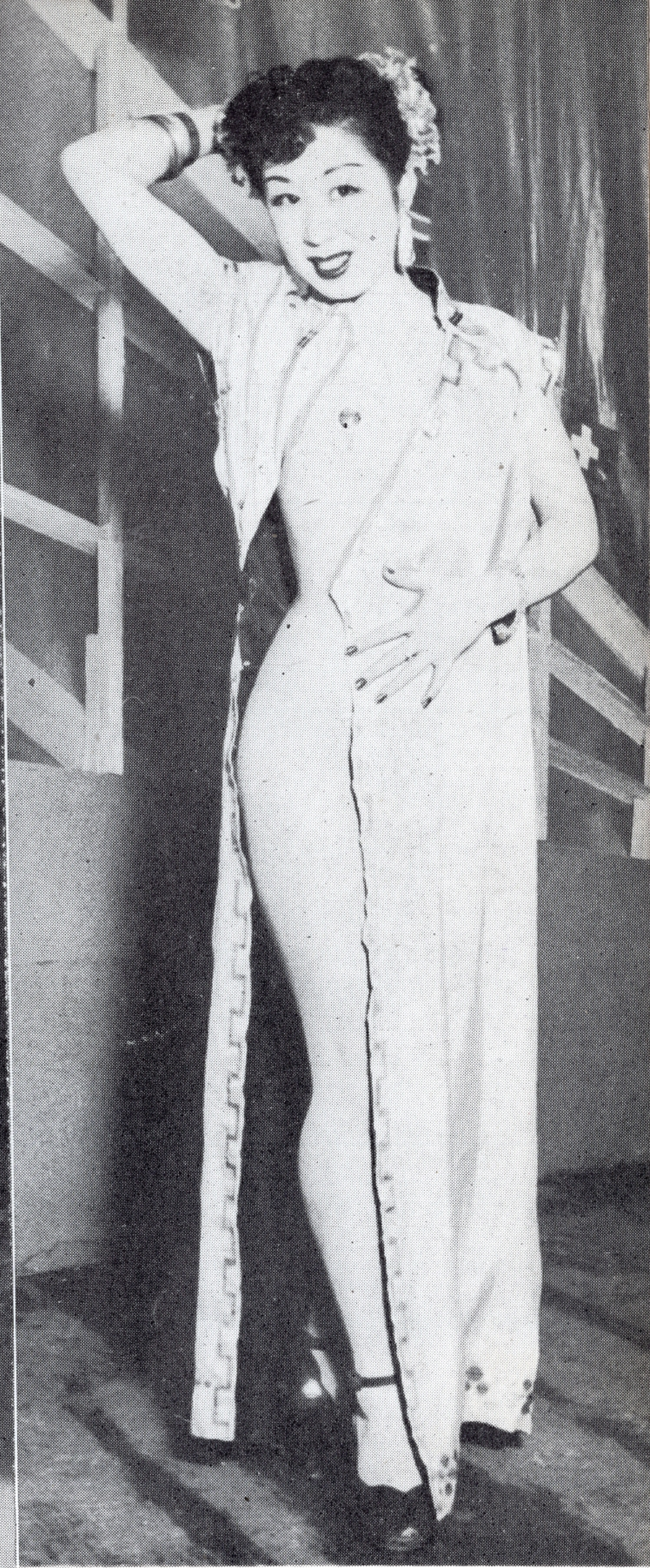
園　はるみ (25年)



サチ・カシムラ (25年)

リンダ暁（26年9月）





浪路　笑
（26年8月）



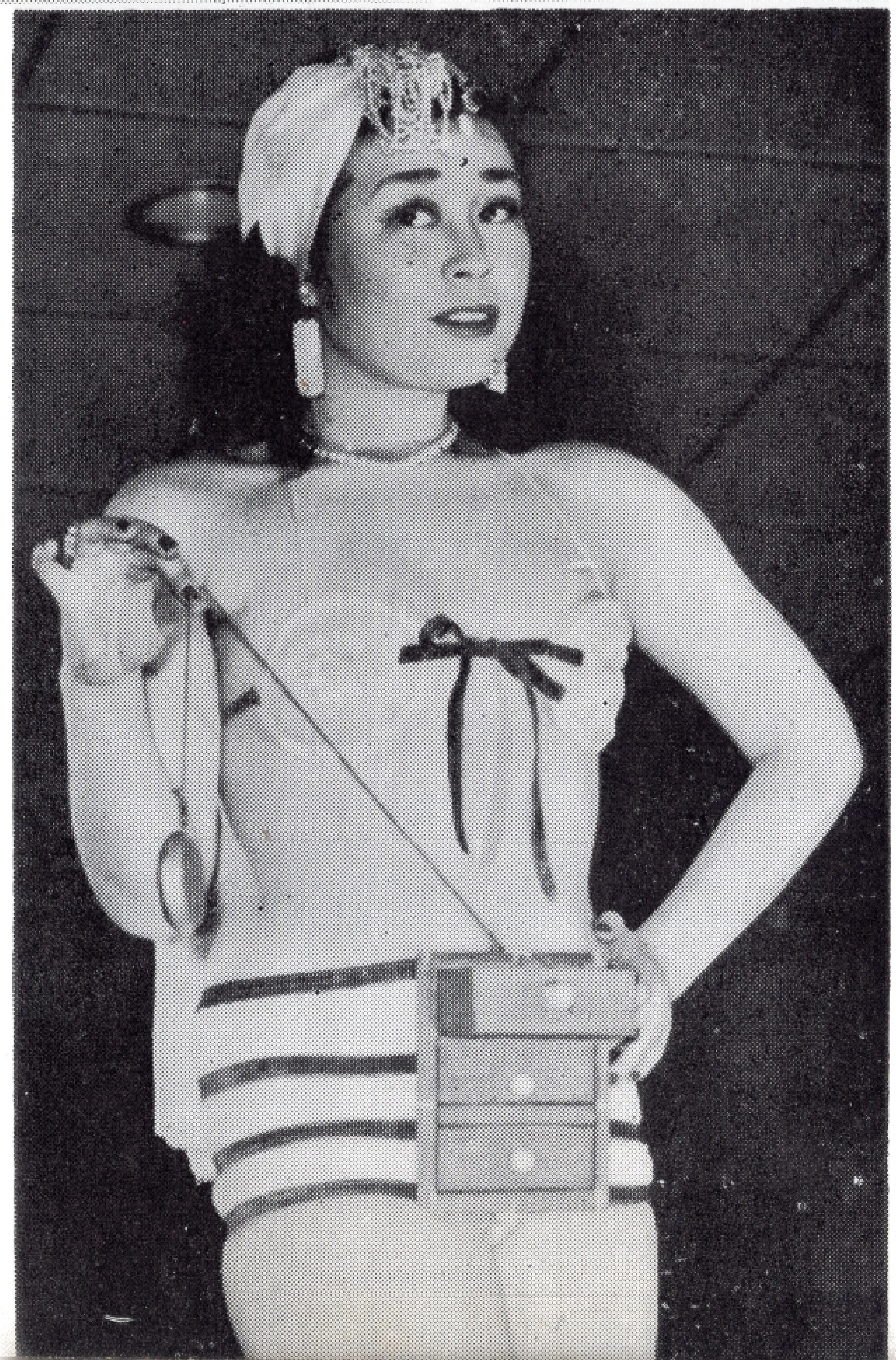
↑日小バアレスクの女のフィナーレの舞台面（二六年二月）



←ストリップド・マイシン・園はるみと森肇



吾妻京子の初々しい
あの頃（26年）



ミミー柳の
ノンシャランな味
（26年）



フリーダ松木の
お色気とは……。
(25年)

日小三人女（フリーダ松木、サチ・カシムラ、リンダ暁）(26年)



日小バアレスクのフィナーレの一場面。
舞台装置もだんだん立派になってきた。
グレース松原、ミミー柳の顔が見える。（26年12月）

ヒロセ、メリーを囲んで……。
みんな若々しい顔をしている（26年）

ガーレスクとしゃれで
女達に取囲れたコメディアン
↙









奈良あけみ

ジプシー・ローズ



序

丸尾長顕

岡田恵吉君は、日本のストリップ・ショウの歴史そのものだと云つて差問えがないだろう。ペン・ネームのジュン河戸で、幾百の脚本を書き、それを演出して、彼一人の腕で、ストリップ・ショウの本流を築き上げた。

これはまさに驚嘆に値する精力であり、また壮観だつた。ストリップ・ショウの近松巣林であり、黙阿弥というべき存在だつた。

だから、日本のストリップ・ショウは功罪ともに、岡田君の責任である。

これは当然のことだが、岡田君ほど、このけんらんたる女の世界の事情に通じている人は、日本にはいない。

その岡田君が、うんちくを傾けて、知つてることをみんな書いのが、ストリップ・ショウの記念塔ともいうべき本書である。

この世界に関する限り、この書の右に出ずるものはないだろう。

その上、岡田君は伊達男のなかの伊達男(ダンディ)である。女性に関する鑑賞眼の高さ、恋愛道の求道士、女性を語らせたら、無類の面白ろさをもつている。

本書にはその片鱗が青白い光を放つて、妖しいほどの感覚をふりこぼしている。まことに珍重すべき文献である。

粋書のなかの粋書だと、絶賛をおくりたい。

日劇ミュージック・ホールの楽屋にて

裸ばなし
女のシリ・シンフォニー

装幀　益田義信

写真　鈴木正一

目次

第二部　屁理屈放題

まえがき

まえがき
—バァレスク小史—

どの章から拾ひ読みして下さつても結構ですが、まずこのバァレスク小史だけは、目を通しておいて頂き度い。

バァレスクは、アメリカの見世物で、一八六〇年、マイケル、レービットによつて創始されたと伝へられている。

見世物の内容は、ギリシヤ神話の、オモシロ・オカシ版と、フランス伝来のカンカンダンス中心の、いわゆるレッグ・ショウだつた。

一八六九年英国のリイデア、トンプソンといふブロンド美人によつてニューヨークッ子が度ギモを抜かれた、馬鹿騒ぎの様子が今も伝へられている。

彼女は縫ひぐるみの、タイツで、太股まで露出したり、当時ヨーロッパ第一の名女優と云はれていた、サラ、ベルナールの当り狂言を戯画風に模写して見せたり、バァレスク風

の枠を身につけた大した芸人だつたらしい。

このバァレスクも、ミンストレルと呼ぶ、これもヨーロッパ渡りの歌謡ショウから出発したヴァリエテショーの一種で、ヴォードヴィルとも呼ばれていた。それがアメリカでは、フォスターといふ民族的な作曲者の出現によつて、黒人プラス、バンジョーで、独特なミンストレルショウがバァレスクになつてからも重要なプログラムの位置をしめてきた。

彼等の歌つたバラアドや、スピリチュアルが、後年のブルウス、ジャズの母体になつた訳だ。

一八八一年頃のプログラムには、すでに、八景程のコメデーに、アクロバットの曲芸と、歌と踊りを組合せた立派な番組が見られる。

フランスのミュージック・ホールが、カフエ、コンセールから出発した様に、アメリカのバァレスクもビヤホールから劇場へと移つていつた。

一九二〇年代に入つてストリップ・ティーズが登場して、バァレスクは全盛期に入り、浮き沈みし乍らも一向に衰退の兆しは見えず、第二次大戦後は、立派なミュージカルの舞台にまでストリップ的露出趣味は侵入してきて今日に至つている。

まえがき

日本のバァレスクは、昭和廿二年十月日劇小劇場で、新風ショウの為に上演した、秋の抱擁といふ僕のバァレスク、ショウが、第一号だ。それ以前に日本の舞台にバァレスク、ショウといふ言葉を使つた歴史は見られない。このショウで、僕が名をつけた当時の少女歌手美空ひばりが、藤尾純・伴淳三郎と共に初舞台を踏んでいる。唯の裸が舞台に立つた歴史は、終戦直後浅草の軽演劇の舞台へ、画家とモデルとしてヌードが登場、次に廿二年一月帝都座の額縁ショウといつて、秦豊吉氏に依りタブローショウが上演されている。第一回が中村笑子（但し胸は出さなかつた）続いて甲斐美晴、片岡マリ。当時真木小太郎君と一緒に、麴町にあつたエスクワイヤの、フロアーで僕も度々裸の見世物を見せてきた。併しそれはいづれもバレスク・ショウといふ程のものではなかつた。昭和廿四年十月廿七日、これも日劇小劇場で僕がジューン河戸の名前で上演した女の宮殿を第一作に、昭和廿七年一月の女の門松を最後に日劇小劇場の閉鎖までの約五年程が日本バァレスクの最盛期だつた。

勿論現在も全国にバァレスク小屋は無数にあるが、唯ストリップらしきものと、あやしげな、性劇があるだけで、本当の意味のバァレスクの雰囲気は見られない。

それと優秀なストリップ・ティザーが居なくなつて了つた事が今日のバァレスクの衰退

の原因だ。しかしどんな時代になってもここまで発達してきた裸の見世物は、かつての、一億総結起の時代でも再現しない限り、いろいろのスタイルで存続するだろう。

第一部　女の世界痴図

あの頃の彼女たち

あの頃とは昭和廿五・六年。当時日本のバァレスクは最全盛期で、ストリッパーと称するハダカ商売の女の子が東京だけで約百二、三十人といはれていた。

その中の廿人位ひが、僕のやっていた、日小バァレスクのスター達で、若い肉体を、全国のお上りさんや、世界中から集っていた兵隊さん達に、日本娘の肌を、誇りやかに見せていたわけだ。

僕も若さに気負つて、彼女達を育てあげ、おだてあげ、ビールの泡の様なショウを、おくめんもなく次から次へと作つて、朝から夜中までラク町暮しをしていた。梅割り焼酎を、巴里風にカルバドスなんぞといつて、夜毎痛飲し、女の子達とよく遊んだ。庫さんとかクラ坊と呼んで一緒に飲んでいた仲間の浜口庫之助を無理矢理に舞台へ出して歌はせ、テレルと面白がつて女の子達はよけいい色つぽい仕草をしたりして彼を困らせたりもした。張本人は、いつも島崎魔子と園はるみだつた。フリーダ松木、リンダ暁、ミミー柳は、よく飲んだ。仕事の帰り毎晩の様に集つた。安つぽい醤油の匂ひのする、おでん屋だつた

り、ホルモン焼き屋だつたり、有楽町のマーケット街を、皆んなで愉快に騒ぎ廻つた。

一応ヤミの時代だつたが、彼女達の顔で註文すれば何一つ不自由のない世の中でもあつた。仕事をすまして後からやつてきた女の子が僕達の目の前でスカートをめくりあげ、Gストリングをはずし、それを僕の皿の中へ放り込んで面くらはせたりしたが、そうした無作法も当時はアプレの一言で全てが解決して了う有難い時代だつた。

有楽町界隈では年中パンパン狩りが行はれ、女の子達がその網に懸らない様にまとめて送つたり、連れて行かれた女の子をもらひ下げに行つたりした事もあつた。その子達は、今どうしているだろう、時々思ひ出す。今だに銀座裏で衣裳を下げてキャバレーの裏口へ入つて行く子を見る事もあるがそれはごく僅かだ。

最近聞いた話に、あの頃の彼女たちの一人が浅草で、おかしな商売屋の、おかみさんにおさまつていて、僕の友人がポン引に誘はれて行つて、「あらッ」といふ再会の場面もあつたとか。彼女達は敗戦のドサクサから生れた新しい女の一つのタイプで、戦前まで日本に無かつた職業婦人の新しい一群なのだ。生れつきの豊かなオッパイと、勇気を必要とした新しい職業ではあつたが、十年の日本の歴史で、見る方も、なる方も、今日、裸の感覚はすつかり変つて了つた。どう変つたかと云ふとストリッパー的体臭が淡くなり、ヌード

写真のモデルの様な、或ひはオブジェ的存在が濃厚になり、美しくはなかつたが女体臭は弱くなつた。つまらなくなつたとも云へるが、それだけ一般的ポピュラーになつたとも云へる。芸よりも美しさ、若さが貴重になつたとも云へる。よろめき時代だ、アブストレだと云つてもあの頃にくらべれば格段の落着きを取り戻した社会生活が必然的に裸の女の子達の感覚さへも変へて了つたのだ。

ヒロポンだ、全ストだと云つて居たあの頃と僅か十年の歳月がこれ程に彼女達を変へて了はうとは誰も思はなかつたに違ひない。

当時バァレスクの女達で、ヒロポンを常用しない者など一人前でないと、彼女等自身考えていた。化粧鞄の中に注射用のポンプ一本は必ず持つていて、ヒロポンを精力剤の如く心得、暇さへあれば消毒用のアルコールも無しでプスプス腕へ打つて、楽しそうな顔つきであとを手で、もんでいたものだ。麻薬とはよく云つたもので、やかましく云ふと、今度は便所へ隠れてやつていた。取締りが厳重になつて、大つぴらに買へなくなつた昭和廿六年頃には、楽屋でヒンピンと、ヒロポンの紛失事件が起つた。盗られた方でも、訴へるわけにもゆかず、いろんな悲喜劇があつた。ヒロポン一箱で可愛い女の子を抱いた男の役者も知つている。僕達は全員舞台へ出て行つたフヰナーレの楽屋内を手分けしては、一本二

本と没収して廻り、知らん顔をしていた。みんな彼女達を悪習から絶縁させようとしてそんな苦労もしていた。日小バァレスク閉鎖の時たまりたまつた、ヒロポンが、何と、セメント袋に一ぱいあつた。それを屋上へ出して踏み割つて処分していた事務所のガンちやんの、ホッとした顔を今も忘れられない。全ストもひどかつた。舞台がハネてから熱海辺りまで遠出をしたり、郊外の御座敷へ呼ばれたりして、裸踊りをやるのだが、彼女達が一流のスターになる迄は誰もがやり、又ストリッパー達の荒かせぎの場は、この全スト以外になかつた。あの頃の彼女たちで、全ストの経験のないのは数へる程しかいない。その一度も経験のない女の子の中には、自分はしたくとも無毛の為イカン乍ら踊る事の出来ない残念組の女もあつた。なりたての新米が先輩のお供で、アメちやんの酒席へ呼ばれ、全ストと聞いて、靴も置きつぱなしで素足で逃げ帰つた子が一月もすれば、内緒内緒で結構かせいでいるというわさもあつた。いくらやかましくいつても、ヒロポンと同じで効目はなかつた。

戦争の深手は、こうした若い子供の様な女の子達にもひどい傷を負はせたものだ。

あの頃の彼女たちで、今も比較的身近にいる女たちのあの頃を少し思ひ出してみやう。

伊吹まり代



伊吹まり代

昭和廿二、三年頃、ヤミずくめの豪華な、クラブ・エスクワイヤのホールへ、一夜出演した頃の彼女は、あの豊満な胸をはつきり見せるのを恥しがつて、踊り乍らも、扇で隠してばかりいて、お客に「見せろッ」などとどなられたりしていた。その後、日小へ最初に現れた時も、ある群像のフヰナーレでも、自慢の長い髪の毛で胸を隠したがつて、幾度も僕に注意されたが、エヘラエヘラ笑つてごまかし続けていた。そんな彼女も新宿

のセントラルや日小へ、ストリッパーとして華々しく盛名を飾り出した頃は、堂々と、あのむつちり太つたモチ肌の裸身をおしげもなく誇りやかにさらしていたが、前身が、吉本や浅草の踊子育ちだつたから、裸になるにも素人の様に簡単には割切れなかつたに異ひない。それにどつちかと云ふと、彼女は露出症の方ではないのかも知れない。ストリッパーや、ヌードの女達にも二種類あつて、やたらに裸になりたがる子もいるし、楽屋にいても仲々裸姿を見せない女もいる。それにあの頃は裸になるなどと云ふ事は大問題で、唯、裸の女を見るだけで、劇場が一ぱいになる程の時代だつたから、裸の先駆者としての彼女達にしても大変な勇気を必要としたのだろう。浜本浩氏も長く彼女を可愛がつてきた。彼女もミユージック・ホールへ迎へられ五年間舞台で姐御的位置に君臨して今日にきたが、独りぼつちの彼女も将来を思つてか、最近銀座のバーのマダムにおさまつて、舞台一本でなく、商売の方にも、エラク熱心になつている。大変いい事だ。誰にもシホ時といふものがある、特にヌードの生命は短い、彼女は自分の限度をよく心得ている非常に常識的な女の一人だといえよう。

ヒロセ元美

現在、一番気毒なのは、ヒロセ元美だ。彼女は上海生れで、ストリッパーとしても本格的な腕をもつていて日本では最高のストリップ・テイザーだつた。五尺四寸近い大女で、若い頃の彼女の胸から腰、脚へかけての線とボリューム、そのチラッカセの巧さは、けだし絶品だつた。僕に楽屋で見せた、フアン・ダンスの技術は大変な習練をへた、精進の結果到達出来た種類のもので、毛深い彼女がその股の黒点をチラリとも見せず廻転し、尻の割目をのぞかせず、その扇の位置の正確さと、愛嬌はけだしストリップ・ティーズそのものの魅力だつたと云える。非常に内気で酒も煙草も飲まず、一途に男で苦労しつづけ



ヒロセ元美

ていた。惚つぽくて、自分の肉体に絶対の自信をもち、性戯に関しても大変なうぬぼれ屋だつた。彼女がストリッパーの女王として全国に謳はれたのは僅か五年位ひで、伊吹達と共に、M・Hに迎へたが、それも僅か一年足らずで東京を去つて了つた。病後ひどく肥えて、それが彼女の致命症になつた。九州へ流れて一旗上げる話があつて、度々相談の手紙をもらひその話で三年程前一度上京したがその仕事も巧くゆかず、最近の便りでは、児童劇にこつているとか、どうした風の吹き廻しで、天下のストリッパーと、子供の芝居とゆう組合わせになつたか判らないが、全盛時の彼女をよく知り、彼女の技術をおしむ僕にとつて、彼女の近況には哀れ深いものがある。楽屋でいつもGストリングを細工していた、あの頃の彼女の面影や、何か相談があると、云つて来てもロクに口もきかず座つていた姿は忘れられない。

メリー松原

ヌード・ダンサーとして草分け的存在だつた彼女の名は、何処かの秘密パーティで踊つた時、お手入れにあつたニュースが新聞で報道され、その頃から何となく記憶に残つていた。浅草のロック座で新風ショウの舞台へ出ていたのを、ソデから見たのが彼女をみた最初

だつた。昭和二十三年の秋だと思ふ。非常に個性的な、ダンサーだつたが、肉体の衰へが早く、彼女の晩年もあんまり香ばしいものではなかつた。物事に熱中しやすく歌も芝居もやつてみたが、永続的な努力が不足して実を結ばなかつた。ひどくヒステリックで、それが



メリー松原

舞台に、いい効果を示すこともあつたが、舞台のお務めの方がキチンと出来ず係りの者を悩ましていた。舞台の女は如何に貴重な個性といつてもその魅力がいつの場合でも平均さ

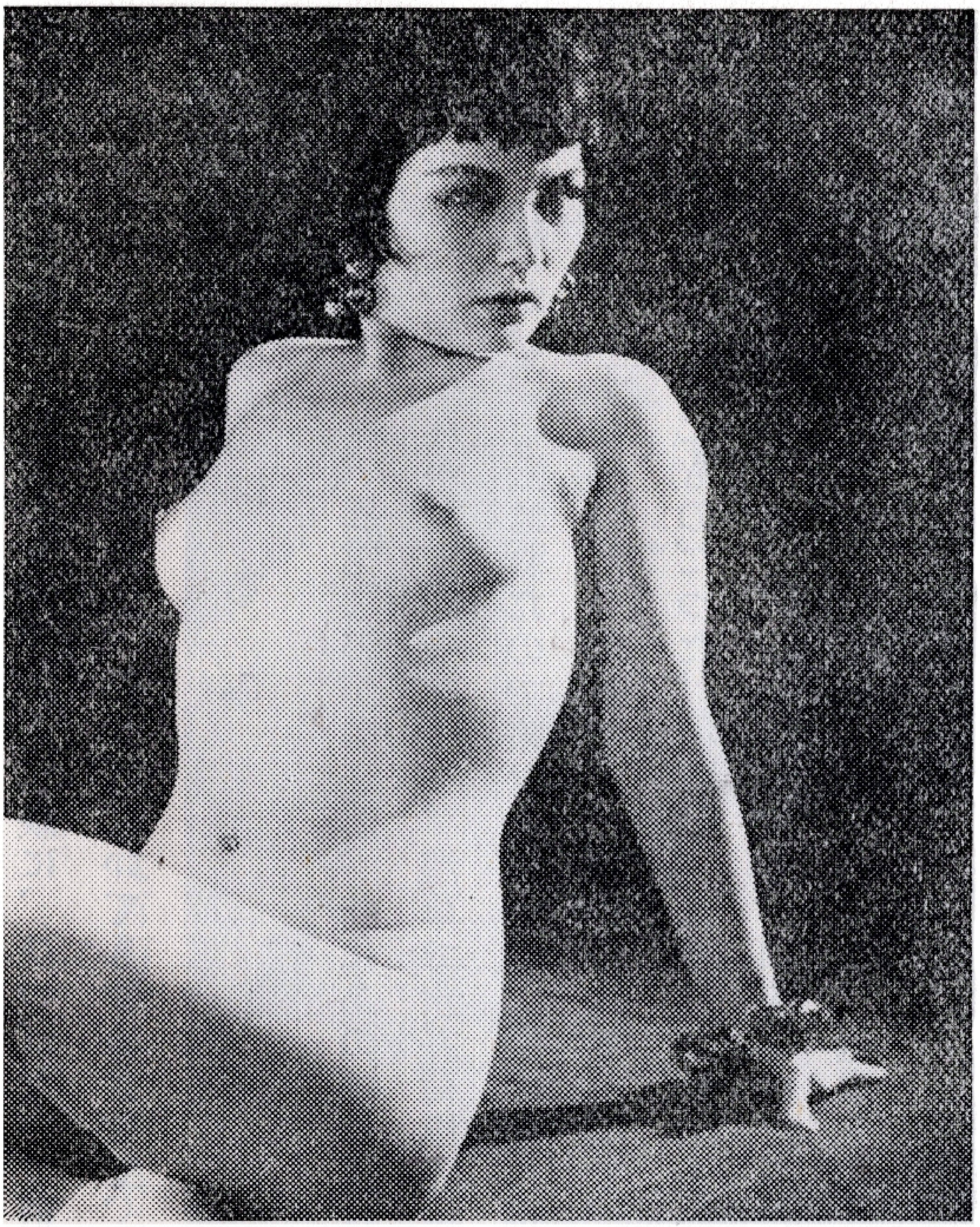
れて発散させる生き方を心得た女でないと寿命は短い。彼女の場合身体が弱いといふよりも、神経が弱過ぎたんだと思ふ。かつてのYといふ彼女の亭主は、よく面倒をみていた。朝起して劇場へ連れてきて、注射をしてやつて、衣裳を着せてやり舞台へ出して、引込んでくれば、又あれこれと注意を与へてやつていた。その男と別れてから、仕事の方もうまくゆかなかつた。一人立ちの出来ない女なんだろう。僕が彼女の為に、モームの雨をやらせた頃が彼女の一番いい頃だつたし、一番美しい時代だつた。

ジプシー・ローズ

あの顔はユニークだつた。新宿セントラルで、映画の情婦マノンの一景をやつた時の舞台は実に堂々としたものだつた。その後日小で、僕が彼女に、カルメンをやらせた稽古の時もひどい高熱だつたがあのブキッチョでよくがん張り通したものだと今でも彼女と笑ひ話をすることがある。

恐しく意地の強い女で、日本のストリッパーにない誇りと自信をもち続けていた。それに裸の子が多少にかかわらずもつている裸といふ職業のコンプレックスを彼女はもつていなかつた。立派な生き方だつた。棟方志功氏は彼女の大ファンだ。何か相通ずるものがあ

るらしい。彼女のヴァンプと、グラインドは今でも語草になつている程、偉力があつた。ひどい酒飲みで、酒が彼女の舞台を蝕ばんでいるとも云へる。僕が愛した女の一人で、勿論愛したと云つても、彼女の個性と雰囲気だけの話だが、一緒に飲んでも面白かつた。酔ふと誰にでも、妾の為にどれ位ひの犠牲を払ふ？といつては男達を驚かせたものだ。強がつているクセに泣き虫で、ちよいとしたところを突かれるとすぐ泣いた。人が思ふ程ではないにしても舞台の女には、いろいろと男出入りのあるものだが、彼女の場合、いぢらし



ジプシー・ローズ

い程の貞女だ。酒をやめる事はむつかしいが、一度身体中からアルコール気を干して了はないと、肉体は衰へるばかりだ。よく冗談に、ひつぱたいて頂戴と云つたものだが、ひつぱたいて、やめられるものなら、ひつぱたいてもやめさせて、やり度いと思つている。

園はるみ

裸商売の女の子には、異常なのが多いが、特にあの頃の園はるみなんか珍品中の珍品だつた。少女期の事なんか誰も知らないし、浅草で永井荷風先生から、お前は日小バァレスクへ行つた方がいいと云はれたので来たと云つて、僕の前へ現れた頃は大人の様な顔はしていたが、十六か十七位いだつたと思ふ。黒い身体で不潔で、おかしなメーク、アップをして僕を手古ずらせたものだつた。彼女位、ふざけた話の多い女も珍らしいが、いい方の話では舞台がはねても一人で尻を突出したり、口をあけてみたりして踊り廻つていて帰ろうともしない。もう帰れよと云ふと、ハイハイと、返事をするが、一向に帰ろうともせず、楽屋番を困らせたりしていた。

そうして半年程の中に、日小バァレスクのスターにのし上つて了つた。怖いもの知らずと、野放図な、とぼけた味といかれた様な、エクスタシーを売物にして歌も浜口庫之助と

幾つか書いて彼女の為に歌はせた。チリメン声で、巧くはなかつたが、すぐ覚えて恥し気もなく歌いまくつた。とにかくあの頃の園はるみは面白い奴だつた。借金取りをマクのも



園　はるみ

巧くて、出入口を全部固めても逃げられて了ひ商人達を口借がらせていた。タキシーに乗つて、卅円の焼いもを買ひに行つたり、一文無しでタキシーに乗り、一時間毎に取りに来させて、その度びに百円増してやると約束し、度々のつまり千円を僕のところへ借りに来たりする女だつた。

事務所へ借金に 来る時も 会社の 重役が 居ようが、 平ちやらで「ねて借して」と云つて

は、自分のはいているスカートを相手の顔にかぶせて引き廻す、飛んでもないオソノのあの頃の魅力は、今、何処を探しても見当らない。僕はあのイカれた様な彼女の魅力を今も得難いものに思つている。あゝした女が、まともになつたのでは、三文の値うちも無くなつて了う。


吾妻京子

あの頃以前のお古いところでは、先ず飲んべの、ヘレン滝を思出す。捨身な面白い女だつた。福田はるみも古く、今ではすつかりおさまつて幸福そうな姿を時々見懸ける。池上は、廿三年一月僕の舞台で、裸でブランコへ乗れと云つたら、それだけぢやイヤだと云つて、二三日で舞台を捨



R・テンプル

てて了つたと思ふが当時はまだ、ストリッパー、ミス池上ではなかつた。

丸山姉妹も異色だつた。真中のベテイが一番よかつたし、舞台の生命も永かつた。

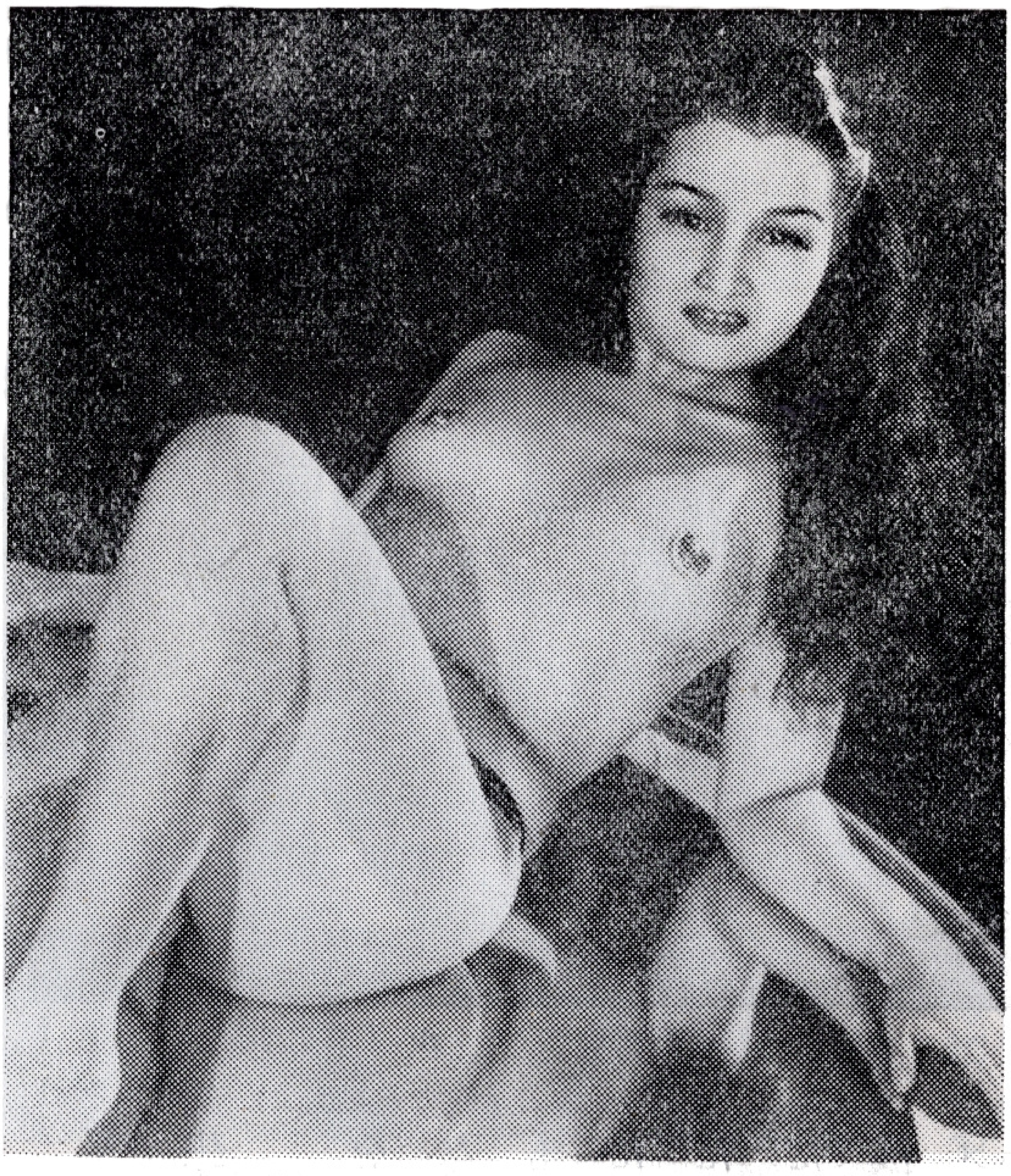
黒ン坊の子供を抱いて楽屋入りをしていた、グレース松原も愉快な女だつた。浪路笑も古く、生活も古風、日本的な達者な踊子だつた。池みどりも、いい胸をしていた、当時珍しい日本舞踊のヌードだつた。後で春日みどりと云つて浅草に出ていたのを憶えている。

メリ・ズロースと呼ばれていた、メリ・ローズも、顔はまずいし胸も貧弱で、どうにもならない子供

だつたが、これが後年の春川ますみだつた。

吾妻京子はストリッパーとして最後まで新鮮な匂ひをもち続けていた。この頃は豪華におさまつているやうだ。パール浜田は、ストリッパーらしくない感覚のヌード美人だつた。R・テンプルも日本では珍しい裸のアクロバットで、舞台は明るく可愛かつた。

今だつたら、差当りジエーン・マンスフィールドと、どうだ、こうだと云ふ程立派な大き過ぎる程大きな、おバストをしていたのは、ハニーローイと、オッパイ小僧の川口初子だつた。



桜　洋子

空ひばりといふ可愛い子も新宿セントラルにいたし、宝塚出身の、桜洋子も珍しがられていた。何んでも出来たし、それだけに損もしていた。併し立派な身体だつた。胸は良くても、脚のきたない子の多い中で群を抜いていた。



マリヤ・ローザ

マリヤ、ローザも不快な程大きな声で歌つていた。彼女も今はアメリカ夫人だ。奈良あけみは後期に登場したが、踊りの巧さは、一寸他に見当らなかつた。

マヤ鮎川は大阪から来た一人だが、東京の女達とは、ちよつと異ふ体臭をもつていた。

後期には東劇に、月城ユリが光つていた。目をクリクリさせて恥しそうに踊つていたものだ。まことに、ステージ、マナーのよかつた神田ユミなど、後から後からと思出してきりがない。


月城ユリ

しよせん彼女達は、裸の歴史のフイルムにパッと写し出された一カットの数コマであつたわけで、一本の主役スターにはなれなかつたが、裸一貫で、唯一つの個性だけを頼りに若い日を勝負してきた、立派な勇気をもつた女たちの一群であつたのだ。

（卅二・十二）

舞台の『女』

舞台の上に活躍する男と女の主人公で、そのいづれの性が強力であるかという事を考へてみるのも一寸面白い問題だ。

美しい男女が自由で、平等である事が、常に社会の理想であるのは勿論であるが、実はそうでない処に、悲劇喜劇が生れ、絶えざる魅力と活気を舞台に与えている所以である。

男が極端に強過ぎても、又その反対でも充分にポンチになり得る。男の下に屈従しようといふ女の性向がある程度ノーマルな現象である事は、誰も疑ふ者はない。だがそれは男の方が強い部分だけに於てそうであつて全部ではない。強い部分といふのは男の智的に優れた部分、そうでない部分が即ち性慾の問題なのである。それあるが故に、古代より現代に到る迄、絶えざる恋愛の悲喜劇が演じられて来たのだ。種々なかたちと動機によつて、諸々な姿態に変えられてはいても結局帰する処は一つ、性慾の問題と精神の問題と、どちらを取るかに依つて結末を与えてきたのだ。今僕が考えている事は、むづかしいそれ等の

学問的考察ではなく、ヒョッと頭に浮んだ舞台で男と女と、どちらが強い場合の方が多くて、面白いだろうかと云ふ様なことなのである。じやじや馬馴らしの様に、女が強く、なおその上男が強いと云ふのは益々面白い。シェクスピアは偉大なりだ。

動物界を考えて見ると常に女の方が優勢だ。ファブルの昆虫世界には、その様な「結婚式」の報告が沢山みられる。蜘蛛の雄は交接が終るや、一目散に逃げて了ふ。逃げ出さないと雌に喰はれて了ふからだ。蜜蜂の世界でも御承知の様に、男は生殖事業に擁つたと思ふと忽ち死んで了ふ。保存だけの問題から見ると男の生命等、取るに足らないものの様である。山の神にいためつけられるのは人間だけの事かと思ふとそうでもない。椋鳥の世界にもあるといふことだ。

人は特に舞台の上では不自然なおかしさの方に、深い興味と拍手を送り度がる性向をもつている故か、昔から恋愛喜劇と云えばコキュの問題（妻を寝取られた夫の話）やサディズムやマソヒズム的恋態性に興味の重点があり、お目出度い姦夫や、姦婦のしくぢりに笑ひの焦点があつた様だ。シチュエーションが、異常である程面白がつた。ロココは女の時代であり、女の絶対支配下にあつた時代だ。

マダム・ジュバリーは天下のサディストでもあつた。その故か、女を主体とするレヴュ

ウヤショーの舞台では、いつもロココは美の殿堂であり、その視覚的な快楽趣味と浮気っぽさが絶えず魅力を与えてきた。将軍も美しい婦人の脚の為には靴の紐を結び、針の穴の為に苦心し、美しき女性の為には憐れな家来にしか過ぎなかつた。女の権力といふものは前にも云つた様に、智力でも体力からきたものでもなく、男の弱点が性慾にあることを意識した女に、はじめてみるものなのである。本来の受動的立場から求め寄つてくる男達に、何等の力を浪費することなく、ラジュムの様な魅力を発散し、男達を引きつける。だがいつも女は、その魅力が何処から発散するものか、自分では判らず、恋する男の口説から聞かされる。恋人達は皆な同じ様なことか、全然違つた美を発見して、女に囁く。そして徐々に支配的女は出来上つてゆく。男が熱烈になればなる程、笑ひ、冷静になり天晴れなサディストに出来上つてゆく、と云ふのが順序だ。

いがめられた性慾の問題を取扱つた風俗喜劇的小芝居やスケッチは世界の何処の国にもあつた。特にフランスには多かつた。

一切の批評的態度をすてて、唯、恋愛に楽天的世想喜劇の馬鹿げたお笑ひを、えがいたお芝居では、いつも女が強いか、男がズルイかのいづれかであつた。その男女の相手によつて弄する術策の巧妙さに、人は腹をかかえたり、溜飲を下げたりするのである。

一昔前のレヴュウには特にそうした台詞や歌詞の多いものが多かつたが、前大戦後レヴュウも巴里を中心に視覚に訴へる、エロティックな大スペクタルとなつて、一時世界を風靡したが、官能に訴えるスペクタクルには限度があり、十数年にして、すつかりあきられて了ひ、ジーグフェルドに依つて、アメリカに移され、より大仕掛けにメカニックになり、その資本と共に、その美も頂点に達したが、彼の死と共に舞台からは姿を消し、よりモダンになつて、そうしたレヴュウの精神と技術は、ハリウッドの映画の中にのみ生きているる現状だ。戦後の日本の小劇場が廿年前の豪華な巴里のレヴュウの真似を貧弱に趣味悪くやつても問題にならない。

衣裳や背景に贅を尽せない日本の小劇場のミユージカルや、レヴュウでは過去の形式のヴォードヴィルとかバァレスクの中に新しい生命を見つけるのが一番いいといふ事に帰着する。そこでも又、女が万能であることに変りはない。お客様は男が大部分なのだからたとへ場面は少く簡素でも、見たいと思ふ様な場面や美しい女が絶対量必要だ。数が少なければ、余計美しい舞台、美しい女が必要なことは勿論だ。

美しい毛皮を着たヴィナスよ集れ！僕は自信を持つて、新しいバァレスクの女王を誕生させるであろう。

舞台では女の方が美しく、より強い方が、男のファンダジイを刺戟し、お気に召すということに、結論が出そうだ。（二四・十二）

女の「美」に就て

普通一般に女の美といへば、それぞれの好みに依つて多少の相異はあつても、美人とか美しい肉体とかを指すのが普通だ。

どんな女であつても男に取つては美しい存在であると云ふフエミニストがあるかと思えばショペン・ハウエルの如く、「なで肩の腰の巾の広い、足の短いものを美と呼ぶなど、唯、性慾の為に曇らせた男の智能だけに出来ることだ。」と云ふ様な極端な論もあり、昔から女の美の標準に就いては議論に果てしがないのが常だ。併し、女の美といふものの考え方に、二通りある事を忘れて、論議すると果てしがないが、美的観念と性的観念とに分けて研究すれば案外結論は早く得られそうだ。美学的に「美とは何ぞや」から始めて定義を得る事は、こと女に関しては、容易なわざではない。各人種により時代に依り、流行の変遷により美の標準、考え方が異つてくる。例へば人体の美の標準は古代ギリシャの美を最高のものとした時代もあつた。現代でも彫刻家、画家、舞踊家の肉体、全て形の美に関してはギリシャ美が至高唯一のものと思つている人々がある。

成程、彫刻を見ても美しい。併しあれは当時のギリシャ人のあこがれと理想の表現であつた事を忘れてはならない。あの美しく長い脚は流行の理想であつて案外、長い脚が少なかつたのかも知れない。話が横道にそれるが、ある白い大理石の彫刻を見て、ある男が、僕に尋ねた事があつた。「ねえ彫刻にはどれを見てもあそこには毛がないが、どうしてなんだい。髪の毛や眉毛はちやんとあるのに………」「それはねえ、古代ギリシャの女達はあの毛を剃るのが習慣だつた、他の民族には見られない珍しい習慣なんだが、ギリシャの彫刻家達は毛というものが惹き起す不潔な感をきらつて無毛というものが与えるある性的な刺戟を喜んで、ああいう表現をしたんだ。それを後世の芸術家達が、道徳的な理由であの様な不自然な扱ひをしたのだと考え、絵画の場合にも、毛を描く事を不謹慎な事の様に反対したりしたんだ。何となくギリシャ精神に従つている事がミューズにつかえる最高の道と心得ていたんだよ」と説明した事がある。バレエやダンスの学校でも必ず脇の下の毛を剃らせる、その時教師はいつでも「ギリシャの彫刻を御覧なさい、そんな不潔なものを生やしておりません。」と云ふ。まア事実あのモサモサした毛は唯見ると美しいものではない。だが見方を変えて性的な考え方をすると、あの脇の下の毛は、はなはだ興味のある存在だ。さて話を本筋に戻して、肥つた女、やせた女、大きな女、小柄な女、こまかく

目鼻立ちまで云えば際限がないが、現在流行の美的観念からすれば、嘗ての美術に肥つた下腹を好んで描いた画家達の趣味を理解することは困難だが、当時にあつては衣裳の影響か、妊娠のシンボルか知らないが全世界から愛好され美と認められたことは確かなのだ。

美の標準にも流行がある。流行といふものが非常に移り変りの早いものだと云ふ事は誰でも知つている。中でも変化の激しいのは衣裳の流行だ。あの時代はああであつたと云ふ事は出来るが、何故そうであつたか、全然解らない。人間の身体の形も除々にではあるが変化しつつある。人間の身体に何百年間何一つ流行の変化の影響もなかつたとすれば美の標準的規範といふものも成立つが、事実はそうでない。結局ある時代の芸術は、その時代の流行の姿だと云ふことになる。ルーベンスのあの豊満な女は現代の細い美の理想から云えばあまりに栄養過多すぎるし、ミロのヴィナスに流行の衣裳を着せようと思えば、あの出張つた下腹はどうにも始末がつかないだろう。

この様に美的観念一方から女の美を考えれば流行と同じく移り変つてゆくけれども、性的な美の観念から云えば、その根本は常住不変である。

だから美的標準を一方から眺めると日本の踊子等、凡そ美から遠いものであるが、性的観念の標準から云えば、どうして、立派なヌードがちよいちよい見付かる。失望すること

はない。豊満で健康で力の張つた女、多少脚が短く曲つていたとしてもそれさへ我慢すればーー。性慾上の美の観念と美学上のそれとは反対なものであるらしい。男の性的憧憬から正直に云えば、女は細つそりとして均勢のとれたことではなく、豊満と健康に向けられる。

若し街で男の（本当の大人の）大多数が、どんな女により多くうやうやしく立止り、ふり返るかと云えば乳房と腰のあたりの豊かに発達した女にマグネットの様な魅力を感ずる。併し現代の様に流行の美の観念が性的魅力のそれと相へだつて了つた時代は稀れであり、そのことが男共をして同時に二人の女に興味をもたしめて了つた原因である。一方で細つそりとした外見の美しい女に流行の衣裳を着せて劇場や街に腕を組み楽しみ、もう一人の豊満な女をハーレムに……と云ふことになつて了つたのだ。この二つの美を融合させた美術家の一群もいた。彼等の多くは生活慾に満ちた享楽的時代に生き、それ等の絵は観賞家と好事家の両方から讃嘆の的となつた事実もある。（チチャン等）かかる二種類の美の融合は芸術家の幻としてのみ存在するばかりで現実の世には無いものだろうかと云えば、ごく稀ではあるがいる事はいる。そう云ふ女を捕えた男といふものはこの世の幸福を両腕に抱いたに等しいものだ。諸君の中にその様な自信のたまを抱かれる方があるとすれ

ば、正に天に感謝の涙を捧げる可き幸運児だ。男が二つの観念に於ける美の区別が出来て、女を観賞する様になれば、やや一人前と云へる訳だ。大体昔の女は肥つていたらしい、男達が狩や戦ひの間中、穴の中で運動不足と過度の食事の為に脂肪が堆積したのだろうと人類学者は云ふ。当時は肥つた女が性的に美しくあつたと同時に、権力と富のシンボルでもあつた様だ。現代でも未開の土地にそうした風習が残つている処もある、第一の妻を歩けない程ミルクで肥らせ宝物の様にしている処もあるそうだ。

併し困つた事には天成の美女はいざ知らず洋服のマネキンの様な女にならうと思つて、スポーツやバレエの練習をすれば皮下脂肪を奪はれて冷い身体つきになり、男を喜ばせる女の美を永続させようとすれば自然のままで置く事以外にない様だ。それも豊かな世界におければこの上もない方法なのだが。（二五・一）

女の焦点

皆さんは舞台の女の何処に一番魅力を感じるでしようか。

勿論、最初の瞬間、好みの片寄つた人は別として、誰れでも出て居る女をチロット一通り眺めて、先づ一番気に入つたタイプの美しさを具えた女を、素早く探し当てる事は間違ひない。

その女は百人十色とは云つても、美の標準にそう大差はない。その中、全体を眺めたり踊の手振りや足取りを眺めているが、どうしても最初の女が最後まで、視線の中から消えて行かない。これは不思議な現象で、ウソだと思ふ人は自分がどうであるか思ひ返してみて慾しい。つまり人は、自分に気に入つたものの中にひそむ、あらゆる美を発見しようと務める。それが一通りすむと、顔を見比べたり、身体つきや脚の長さ美しさ、乳房の丸さ腰の肉づきと遠慮のない批判がそれぞれの心の中で繰返され、そして自分の美意識の選択あやまりなかつた事に満足する。

音楽や衣裳や照明は、順序よく観賞させる愛の道具仕懸けの様なものだ。

先づ好きな型の顔。それがＯＫなら身体とか姿全体、それから胸腰脚と、下つてゆくのが普通だが、人により気になる個処が必ず一個処や二個処あるものだ。それは一番最初に気になるそうで、それに落第したら先づ興味は半減して了ふ。人により顔さえ美しく気に入れば他はどうでもいいと云ふ人もあり、顔なんかどうでも胸と腰だけ気に入ればと云ふ人もある。顔を気にする人は、その中でも特に眼とか鼻とか口に特徴ある空想的な好みを固執する人が多い。男は慾張りの様だが、案外女よりひかえめで結構鼻一つ位で、後はどうでも我慢しようと云う騎士的な殿様も御座る。だから気に入つた女の出て来ない舞台程無味乾燥なものはなく、その上歌や踊りがマズかつたんぢや、どうにも辛棒ならんものだ。それ故に〝女の見世物〟たるバァレスクでは、あらゆるタイプの魅力を具えた女を、各場に用意する様配慮しなくてはならぬ。併しここに忘れてならないのは、そうした先天的な肉体の美しさだけを舞台へころがし出しても、魅力にはならないということだ。生命のゆらぎというか、心のかげらひにも敏感な感情の生々とした流れを何等かの形で示さなくては、死物同様で生きた人間の美とは申せない。それが、歌なり踊りなりの芸のカタチをもつて人にせまり、女達にとつては自分達の美を、完全にブチマケル、チャンスともなる。

まずい顔や肉体の条件を忘れさせて、魅力や快楽を発散する事も可能だ。そこに舞台の女の不思議な美しさと慇明さがあり道がある。では女の何処が美の焦点と云えるだろうか、案外人は気づかずに簡単なところで魅了されている。その秘密は先ず「まなざし」にあると云つても過言ではない。眼は口程に物を云いとか、眼は心の窓、或は鏡とも云はれる様に、何と云つても顔の中の一番豊かな表情を受持つ大スターだ。実際この小さな二つの黒い瞳は人を殺しもするし活かしもする。運命を決定して了ふことすら出来る。ロメオもジュリエットの〝目ざし〟に生涯を賭けた。

舞台の上から話し懸けてくる言葉も先ず、眼から始つて眼に終ると云えるだろう。だからその最初の視線といふものが如何に大切か、瞬間のまなざしの巧さが、舞台の女の活々とした最初の美しさだとさえ云える訳だ。どんなに美しい外見を具えていても、オシやツンボでは話にならない。慇明な情感をもつて、活々と豊かな言葉を話し懸けてくれる女でなくては、三文の価値もない。眼が無言の中に囁く豊かな言葉と云ふものは、単なる技術だけのものではなく、芸術にまで高められた感情の表現体である。日本の踊子にはこれが特に不足している。むつつりと何処を見て居るのか判らなかつたり、馬鹿みたいに口ばかりあけ、あらぬ方をきよろきよろと眺めているかの二つが一番多い。いい方の部類でも音

楽の強弱位に、やつと動じる位の純感と云ふか不感症と云ふか、まことに頼りない眼の表情しかもつていない。だからマイム等がおかしくて見てはいられない。何を云つているのか舌足らずで、アクションと来たら常識的で性格の描写等は思ひもよらない。まことに眼は表情の泉であり、どんな素晴しい人でも眼にモノを云はせる術を心得た人でなければ、感情の半分も示す事が出来ない。「眼は恋の第一の使者なり」と誰かが云つたが、確かに眼に豊かな表現力をもつている人は、いいかげんの欠点等を忘れさせて了ふ。眼のハタラキ程スサマジイものはない。舞台の女の何処を観客は一番多く見つめていると云えば……異常者は別として……　顔の中心点、眼に焦点をあわせている事は疑ひない。眼を離さないと云ふ言葉も注意を怠らないと云ふ譬えだ。だから踊子の側から云えば、観客を自分の眼から離さなかつたら、先づ第一の目的は達しられ、次から次えと言葉を放射する事が可能な訳だ。ソッポを向いている人を自分の方へ向かせる事は尋常では出来ない。眼の表情の一つの話として、あのウインクを考えてみよう。あれは昔からあつたものとは思はれず、女の魅力を恥らいにおいた時代の産物ではなく、近代の武器に相違ない。

あのウインクと云ふものはまことに露骨な求愛のデモンストレーションで、どう考えてみてもあれは愛情の取引きのイエスかノウか、諒解の有無のあまりに簡単なシグナルとし

か思えない。その代り又何処の国へ行つても、一応は通用する程、便利なサインはない。併し世の男達は決してあの様な滑稽なウィンクだけで捕えられるものではなく、むしろ恥らいをふくんだ伏目にある。伏目は恥らいだけのものではなく、悦びに溢れた女の自然の表情でもある。それはどぎつい媚態の武器の様なウィンクには味はえない美しさと優しさに溢れ、男の愛を唆らずにはおかない種類のものだ。僕達がハットするのは、そうした瞬間を巧みにとらえた女の表情の時にある。女の羞恥感は快楽に対する恐怖心の現れでもあつて、男をよけい刺戟する。そうしたものを奥に隠し持つた女程恐しい存在はない。結論すれば、その様な魅惑の美を巧みに表現出来る女が常に舞台の勝利者で観客は常にそうした女の出現をまつているのだ。

(二五・四)

女の眼をば讃えしめよ
そは人を殺せば――
ルミ・ド・グウルモン

〝羞恥の姿態〟

女がマタを開いた図を想像して戴き度い。これはどうみても美しい姿態と申せない。たとへどんな美しい美人であろうとも、まともな絵にはならない。滑稽と醜悪以外の何物でもない。これは今問題にしようとしている羞恥感の現れている姿態と凡そ反対な無ザマな図の代表的なポーズだ。

女の羞恥の姿態として西欧の代表的なポーズとみられている、あのメヂチアン・ヴィナスは、はなはだ古典的姿態乍ら、たしかに一つの代表的な姿態をしている。

右手で乳房を覆ひ、お尻を一寸後ろへ引き気味にし、左手で女の羞恥部を隠そうとしている。このお尻を引き気味にしているところが曲者で、全体の中でも最も魅力的恥らいの感情の美しい表現である。この表現の本質的意味は云ふまでもなく男性の攻撃に対して、性的中枢部を防護しようとする女の本能的姿態であるが、これこそ正に男性にとっては原子爆弾的女の媚態である。

女が裸体を見られた瞬間、本能的に示す、肉体のアラベスクは、民族により多少の相違

はあつても、先ず両手を性的に最も魅力的な部分である乳房の上に交叉し、同時に両の腿をキッチリと強く内側に引きしめて、左右どちらかの足を前へ置き、肩を上げ気味に背をやや曲げる様にするのが普通のポーズだ。

男性に見られた瞬間その様な姿態を示し、その上その姿をぢつと見詰められたら、どの様な変化を示すものだろうか。先づ常識的には、その頭を脇へそらして恥らいを隠すか、頭はぢつとそのままにしておいて眼をつぶるかの何れかだ。時には顔を隠したりすることもある。羞恥の姿態も芸術の表現限度としてはこの辺が究極の一線であろう。

局部を覆ふと云ふ事を全く知らない原始民族の女でも、男子にあまりしげしげとその部分を見詰められると、俄かに警戒の情と共に羞恥の感情を現して、自然と両手がその辺りを隠す様な格好をするものだ。

平気で乳房をゆすつて歩いているバリー島の女達も男女二人の位置では、胸天をそつと隠す様な姿態をする。これも警戒と恥らいの二つからだろうが、これがかえつて男の盗み見の気持を刺戟するものだ。この様に女の局部隠蔽は最初は男性の性的暴力に対する防護の心理的現れとして出発した。

併しこの女の習慣的姿態と本能的姿態が、男性の側にとつてはすこぶる刺戟的な魅力と

なることを、はやくも聡明な女達は意識しはじめた。原始的な状態だが、弱者が恐れ戦き乍ら身を護ろうとする可憐さは、強者の攻撃的精神を、よけいにあおり立てる気持を起させるものだ。それが後年恋愛の手練手管も進歩と洗練を経てくると、女が意識的に、ほの見せる羞恥的姿態は、いやが上にも複雑に、デリケートになつてきた。それは男性をより巧妙に誘惑しようとする怖る可きたくらみの牙城であり、その辺のところを心理的に巧く組立てるのが、ストリップアクトの真随でもある。

羞恥の姿態と、その発展経過の構想が、女体芸術のエスプリでもあろう。極言すれば、セックスを度外視して舞踊の芸術は成立しない。特に、バァレスク・アクトの全般に渡つて云える事は、女の羞恥の姿態を如何に美しく、暗示的に効果的に示すかがその第一歩である。近頃極端に露出が多すぎる。その露出を出来るだけ恥らいのヴェールで覆ふ術を忘れている。美しい肉体は大胆に現しても、羞恥のヴェールを忘れては、女の魅力はゼロになる。この羞恥的姿態は、女の強力な男性攻撃の武器といはれ、この武器をもつてこそ、男性に戦ひを挑む事も出来、恐らく彼女達はその武器をもつてしてだけ勝利者たり得るだろう。他の武器では絶体負けない男性も、これにかかつては他愛なく負けて了ふ事疑ひない。（二五・四）

"女の芸術"

バァレスクこそ女の芸術の殿堂でなければならない。僕の云ふ女の芸術とは、女だけのもつ、性的な魅力をあらゆる角度から、殿方様の観賞に答へられるものにする事にある。その観賞をより効果的にする為にのみ、色も音も存在の価値があるのだ。非常に極端なモノの云ひ方の様だが、そこ迄徹底してこそ立派な見世物になる資格があるが、中途半端なものでは、あらゆる人生の生活経験をもつ男性の娯楽の対照にはなり得ない。甘っちょろい娘っ子のもの慾しげな半裸の姿を見た位ひでは金は払えない。食ひ足りないのだ。

女の魅力がどこにあるかは、見る人感ずる人によっていろいろではあるが、併し例へば、艶めかしさといふ様な感覚的なイットも発散する人に依って、表し方のイロアヒも変化し巧拙もあり、その格調の美しさのみ、人は拍手を惜まないのだ。

もう既にアキが来た様な女や、どこにもコロがっている様なタイプの女では魅力どころか、ハナも引懸けたくないのが世の男心だ。

表面的なルックスだけのものではなく、何処となく男心をそそる様な女といふものには

それ相応の心意気に燃えたナイス・ハートと、身についたしつくりした教養の深さが漂つてるものだ。

そうした女は顔は例へ不別嬪であろうとも女の魅力をそなへた、まことの女と云へる。現在の舞台の女は、あまりにもチンピラ過ぎる。踊りの巧さや、歌の巧さといつても高が知れている。それよりも女として先ず一人前に磨く事だ。

そうしたマテリアルの上にのみ、女の芸術の殿堂は建てられる。

僕はいつも口に出すが、あのノエル・カワードの芝居に出るガートルード・ローレンスと云ふ女優を御覧なさい。顔は日本で云ふチンクシャに等しい。併し彼女が一度、舞台に立つて話し踊り歌つたなら、これ程ソフィスティケートな女は世界中にあるまいと迄思ひ込んで了ふ。趣味性の高さや美しさだけのものではない。心憎いまでにモノに徹した人間の生きとし生けるものの世界を繰開げてみせてくれるのだ。見る方にも、見せる方にもテラヒがない。素朴な人間性の純粋さが輝くのだ。芸も技術もその上にあつてこそ光るもので、そこまで到達出来ないもの等問題にならない。早く一日も早く、そこまで覚悟をきめた徹底的な女達が現れてくれてこそ女の舞台も立派なものになれる。

皆さん！　考へてもみて下さい。そんな女達が集まれば、よきセンスのシチュエイショ

ンさえ与えれば、ほつといても娯しい雰囲気は作つてくれる。色気は漂ふだろうし、する事、なす事憎い程気が利いていたら誰がおこるでせう。そんな舞台こそ女の芸術、女の殿堂と云える。女達が男を甘く見すぎている事も、彼女等の芸を進歩させない原因の一つだ。

お女郎やパンパンなら女が誰れでも持つているものだけで商売は成立つ。自分達は異ふんだと云ふ誇りは、そんな行為をしないといふだけではみとめられない。

これで私を買つて下さい、と大きな声で云えるものを身につけた踊子や女優、ストリップ・ティザァが日本に何人居るだろう。思へば淋しき限りだ。併し僕は悲観して了つて澄して居られる立場にはない。何とかしてもそんな女を一人でも多く育て見つけなければならない。道遠しの感はあれど何としてもやり通さなければならない。それにもう一つ皆んなが、スペシャリストになろうとする気持がなければいけない。誰も持たないモノといふのは一応の魅力だ。ウインク一つでも、衣裳の着こなし一つにもそれぞれ巧さは必要だ。人の中で目立たうとする女の本能が、もつともつと刺烈に働かないと、素晴しい舞台の女にはなれない。

男と云ふものは珍らしいものには瞬間の美を感じるものだ。それを永続性のものあらし

めるのが即ち女のかしこさ総明さと云ふものだ。

どんな隅っこにもそんな一くせも、二くせもありそうな女が居る舞台を想像してみて下さい。如何に愉快なものかを。

女の芸術とはシカツメらしい美学の修辞法ではない。（二五・十一）

〝女の体臭〟

日小バァレスクとして売込んだ私達のショウも一年を数え、新しい出発を……と云ふよりも新しいミュージカルの胎動を感じ、あはよくばここから新しい日本のショウを生み出す機運を掴み得るかも知れない様な喜びを感じている。

二、三の人達から前々作の〝女のカアペット〟を案じ乍らも上演してみて、その批評もらひ大体好評であり、興行成績も良く僕も一つの確信を得、再びここに大きなレヴュウ形式に依る〝女のショウ・ボート〟をおくることになつた。

これはより高い効果と統一を要する完全なミュージカルの、ある一つの見本だ。

歌ふ事に於ても、踊る事に於ても、除々にではあるが一つの美を必要とし、それが無くてはどうにもならない、見世物にならない限界にまで来ているショウの実体だ。

ジーグフェルドが階段一つをより高くする事はショウの美しさを一段高くする事だと云つて、積み重ねて行つたのと同じ様に、僕も一つづつ上へ上へと登つて行こうと試みる。

これは僕の試みだけではどうにもなるものでなく、あらゆるスタッフが挙げて協力して

こそ成る実績だ。
ガールスが美しくなること。
衣裳やデコールが見事になること。
一つより二つ、二つより四つと段々に高く多くへ、飛躍してゆくショウのゴージャスさ、アムビッションの豊かさ等、いろいろな要素が土台となつて成長していく。
僕は今迄の日小バァレスクの過程を最良のものとは思つていない。不満と不備と申し訳け無さで恥しい程だ。
併し乍らビジネスの発展には、その国の文化の高低、趣味性のいろいろ、技術の貧困、数へ上げればいくらでも云い訳は成立つ。だが僕はせめるよりむしろ僅かの日数と経験の浅さから、よくもまアこれだけこられたものだと思ふ事の方が強い。
作品の善悪より、一つの型式のショウを作る方が困難な事は云ふ迄もない。
僕にしてからが、下品なものより上品なもの、モッサリしたものより洒落れたもの、気の利いたものの方が、作つてみても楽しく面白い事は云ふ迄もない。批評といふものは高い方にいつでも軍配を上げる。併し好評や、思ひ上りだけではビジネスは成立ない。不評でも街の空気によくマッチした肩を下ろした作品の方が高品価値をもつ場合がある。名声

はそれからだ。僕はいつもそう考える。一段一段の上昇以外、飛躍の方法は先ず無い。そんな訳でこの頃の作品を見て下されば、ほぼ見当はつくものと思ふ。

だがここに一つ危険な事は、一つの劇場がたつた一つの色に染つて了ふ事は日本の様な観客層のせまい国では危い。一つの或る流れを掴んだらそれを巧く発展させ、変化させ、成長させなくては支持しては呉れない。観客と共に歩む事だ。

一足だけ前の方を。

そんな積りで誠実をもつてやれば必ず実は結ぶ。

次の一年は技術の練習と、より美しいガールスを結集する事だ。皆さんはどう御考へになるでしよう。例へば着物を脱いで裸になる女達の容姿だけに喝采をおくるでしようか。

僕はそう思はない。

強烈な個性の女としての優れたパースナリティが生みだす雰囲気以外に喝采はあり得ない。現在は、まだまだ女達のそのもつ個性が甚だ弱い。個性といふものは一つのクセだ。クセといふものは良くても悪くてもその人だけのものだ。如何なる場合にも他人の真似の出来ない境地にまでゆけば、人は納得してくれる。

つまり体臭といふものだ。

好き嫌いはあつても、体臭の強烈な人には、優れた個性の片鱗はうかがえるものだ。僕は女達にいつもそう云つて聞かせる。何は無くても美しき個性。メーキャプでも構はない。一つの個性を創造出来たらその人の勝利だ。真似事でないモノを、皆んなで創りあげようではないか。僕の楽屋裏で云ふ言葉はいつもその一つだ。

シンセリテイは人を感動させる。

裸の女は、裸で人を感動させなければいけない。

裸で感動させるには、ゴマカシがきかない。

ゴマカシでない徹底した美しい優れた個性をつくりあげよう。

色気も健康な明るいものへ。

詩情のあふれるものを。

エネルギッシュな明るい雰囲気を。

恋人や奥さん達も楽しめるショウを。

日小バァレスクも次の階段へ来ている。

新しい年に僕も女達と共にそなへよう。　（二五・十二）

〝夏の女〟

お暑いことで色ばなしや女ばなしも、いささか御免と云い度いところだ。（うそつけ）

夏の女と云えば、どうしてもキモノの女の方が涼しげだ。

裸の女を見ても、海水浴の女をみても、暑苦しいだけで、涼味は感じられない。

視覚的な季節感は、何と云つてもキモノの女に分がありそうだ。いくら近代化された日本でも、まだまだ情景が洋服には揃つていない。永い間の風習と民族の血が美意識の中にも強く働いて、実際には涼しくて楽でも、アッパッパより、浴衣の方が見ても気持がよく涼しげだ。夕立ちだの青すだれ、風鈴、行水、団扇、蚊帳、螢等言葉としても、感覚的にもまだまだ僕達の肉体の一部として生きている。

ホノルルやカルフォルニヤの亜熱帯的風物の背景の中では大胆な色彩やスタイルの洋服も夏らしさを感じるが、涼しさはない。むしろ暑さにいどむ強さを感じる。「涼しげ」と云う様な感覚的なものは、どうでもよく大して問題ではなく、着る本人が涼しければいいのだ。

そうした実際的な生活と、日本人の過去の生活との間には、ずいぶん大きなひらきがある。そうした根本的な生活や文化の相違は、一朝一夕にして憂るものではなく、二重生活だの無駄な暮しだのと云はれても、銀座のモダニズムと日本芸者の夏姿の両方に心ひかれる世代のわれわれだ。と云つても僕は国粋主義者でも何でもなく、考え様によつては日本人程世界の良さを何でもかんでも、あれこれと漁りつくす国民は先づそう他にはない。

食い物から飲み物、家から庭を見廻して御覧なさい。ウィスキーからシエリィ、老酒、ウオッカにビール、日本酒。松に芝、蘭に菊、ベットに畳、抹茶にコーヒー、焼酎にオルドヴル何でも御座れの日常だ。併しその中にはこうした複雑さも、せばまつてゆくに異いない。

劇場のお客様をみても若い人と中年以後の人との間には、はつきりした好みの一線がある。

ストリップ・ティーズだと云う観念から裸をみていても興味の中心と云うか見るポイントが大分異う。勿論これはグラフをとつた訳けのものではないが、若い人は大体乳房の型とか健康そうな大きな踊子とかを問題にするが、中年の人は肉付きとか肌とか腰、顔つきにしても崩れる様なものにひかれている。これは決して性的な経験とか好色からばかりで

はない。乳房の大きくあまりに美しい女には色気を感じないと云う大人も居る。
ヨーロッパ的な教養を身につけた人と、そうでない人。フロイド的分析をもってすればいろいろな面白い答えも出るだろう。実際には吾々の祖先がどれ程乳房を愛玩したか知らないがあまり関心をもたなかった事はたしかだ。末摘花の二千数百句の中にも、オッパイに関しては、
「乳つ首ひねるが坐頭始めなり」位いのものだ。併し僕は異う。大いにオッパイの美を讃える。
（触り度くもなります）　（二六・六）

〝女の両半球〟

うだる様なこの頃の暑さではストリップもたまらない。見て頂くお客様には劇場の不備が何より申訳ない。何とかして来年は涼しい小屋にしてもらい度いものだ。

肥つた大きな女の子はどうも夏向きでない。僕だけの好みではなく大体の通念になつている。裸でやつて呉れるはまだしも、あれで、こつてり着物を着て居られたんぢや、暑苦しくて目も当てられない。今度こそ涼しい景物を是非お目にかけ度いものだ。

水に濡れた白い肌、これは好色からだけでなくても抱いてみたい。さぞ冷たくていい気持だろう。丁度瀬戸物かなんぞの様に……。勿論こつちも裸でなくつちや様にならない。お乳がこつちの胸にコツンコツン当る等は健康的だ。

さて皆様、後ろの方はどう御考えになつてるでしよう。毎々前ばかりで今度は一つ後ろも亦よき哉と叫んで頂き度いと思つて〝シリ・シンホニー〟をお目に懸けます。女の肉体の美の頂点は何と云つても乳房とお尻にある。

ホラチウスはお尻が完全でない女は鼻が曲つているのに等しい、と云つて憚らなかつた

そうだし、乳房が前の優しい小山であるなら臀部は両腿を柱とする宮殿の大山である。女の美は決して唯眺め、目を楽しませるだけのものではなく、快よい触感を楽しむ場所でもある。乳房よりもエロティクで乳房程、口にしないのはあんまり騒ぐと了い込んで了やしないかと恐れた男の智恵にある。お蔭で充分堪能出来る次第だ。前の球体と後ろの球体、前よりもはるかに重量と力を感じさせる半球体。

ある席上で一人が全世界の女性、両半球の女性の為に乾盃すると云ったら、別の男は僕はそれより女の両半球の為に乾盃したい、と云ったそうだ。

昔ギリシャに臀部の美しさを争った姉妹の為に神殿が建てられた事も伝っている。カリピギヤのヴィナスとは、「美しいお尻」のこと。お尻で思出すのは、尻打ちの変態性慾ぶりだ。これは沢山絵にも文にもなっていろいろとある。併し日本ではあんまり聞かないサディズムの一種だ。たしかにあの白く丸い肉塊を丸出しにさせて鞭打つのは打つ方も打たれる方も不思議な興奮に身をしびらされるであろう。鞭打ちと云う程ではなくも、つねつたり軽くたたいたりしても他の部分程つねられた女も腹を立てないものだ。尻軽る女とか、尻を追うとか云う言葉からも尻とは女のアソコの事と同じだ。それ程近い点がエロティシズムをくすぐる原因だろう。

ともあれ見事な前と後ろの丘は僕の愛する最高の、目出度い眺めである。

（二六・八）

〃毛〃

ボードレールの髪をうたつた一節に

ちぢれたる毛筋のはての
和毛なす生えぎはに
われ狂ほしく酔い痴るる
椰子油の、麝香の
さては瀝青の交じるかほりに

（堀口大学訳）

と云うのがある。毛髪や体毛は愛する女の美を忘れ難いものにする力をもつている。
古来より詩人は誦い、画家は描き、痴人は酔つて来た。
肉体の一部としての髪や体毛は他の部分即ち目とか手とか云うところより、はるかに肉感的な生々しさを思わせる個所だ。それが如何に神秘に輝こうと、その美しさの讃嘆は肉感につらなつている。

男達は目前の女性の毛髪を眺めて秘かなる楽しみに耽る。想像の翼は見えざる個所にまで羽ばたき、目前の存在は、唯、想像を助ける真実性の根拠とさえ思い始める。それが毛深いとか、淡いとか云う連想になり、いやが上にも空想を逞しくする。そしてこの毛深い女と云うものが、多情だと思われていることは西洋でも同じだ。淫婦の権化の様に思われている高橋お伝も濃い髪で、処刑された時、えりあしにまつわつた毛の為、かの有名な名人首斬り浅右衛門も一刀で打落せなかつたという。

毛髪や陰毛の俗説は調べたらきりがなく、濃い淡いで智能を計つたり、かたい柔かいで性質を云々したり、フランスでも毛深い人は富者か多淫のどちらかだと云う習慣があつたり、どこかの国で淫売婦何千人かの陰毛を調べたところ半数以上が多毛の女だつたと伝えている。

ある信心深い尼僧が発狂した原因を調べてみたら、異常な多毛症で激しい性慾に悩まされ乍らも抑圧し続けた為の発狂と判つたが、何故その様な激しい慾望に悩んだかの原因にはその異常な多毛をあげている。やたらにそこらをくすぐり刺戟するわけでもあるまいが。

とにかく体毛の生長が分泌腺の活動と不可分のものであるとすれば、病的に異常なもの

は別として、多毛の体は智的にも肉体的にも旺盛な精力に恵まれた人だと云う事が出来る様だ。まず、健康な人に属す事は間違いない。東洋人の毛は黒一色の為、専ら濃い淡いだけに限られているが、いろんな色の髪をもつ西欧人になると又大変だ。赤色はクサイとか、ブロンドはジュイシイだとか云われるが、こうした事は、各人がそれぞれ自分の経験を思い返して成程と納得する人はすればいいし、出鱈目だと信用出来ない人はそう思い込むより他ない。併し何事にも異常と例外があるのはいなめない事実だ。舞台の女を眺めるにしても、ここ迄、露出して了っては残るところは幾許もない。やたらに無毛の女を喜ぶのは病的だし、ケガがない等もふざけた迷信だ。僕は統計家でも何でもないが、露れた部分だけによる俗説や迷信から見ればその「異常や例外」が世間には案外多いと云うことを、舞台裏だけの狭い世界からも発見している。何か定見の様になっている俗説に「この様な異例があるじゃないか」と云う新発見は又楽しいものである。

お客様に舞台から、その実例をお目にかけられないのが残念だ。併し又それぞれの世界で「新発見」をお楽しみになつていられる事は、お忘れないだろうと、と、ひそかに思つている次第だ。　（二六・九）

第二部　屁理屈放題

〃バァレスクと云ふ代物に就いて〃

ここらで一つバァレスク的演技とかシチユエーションとは一体如何なる形式を云ふのか、一応の解説が必要になつてくる。一口に云へば、バァレスクもボートヴィルも、つまり日本の寄席。試みに辞書を引けば………「異種、変種、諸芸大よせ」とあり、「踊り、歌、吟誦、笑劇、スケッチ等を包含する見世物」又「時の話題を歌調をもつて調示する踊りや歌を入れた喜劇」とある。要するに民衆的な音楽的見世物といふ事に帰結する。その見世物のシチュエーションを構成する重要な歌の形式は、中世紀（十二〜十四世紀）の吟遊詩人に源を発し、それがフランスのカフエ・コンセールに入つて民衆の寵児となつた古いシャンソンの形式であり、喜劇的な演技はイタリヤのコメディヤ・デル・アルテの道化の運動やアクションから発生し、ダンス、バレエ、マイムとなつて劇場やサーカスに育くまれ今日に至ったものだ。それ等の番組を面白く組合せた見世物が即ちバアリエテであり、英国を中心に特種な風格と芸の洗練を売物に栄えてきた。その頃（前世紀の中頃）フランスの奇術師ウーダン、英のトーマス・トービン等が人の膽を潰す様な奇術を発表し益々ピ

カデリイの人気をあふり寄席は当時民衆の唯一の娯楽の対照となつた。それが一八九〇年頃アメリカのセントルイスに越したといはれるラグ・タイムから前大戦後ジャズと呼ばれ世界の隅々を風靡しだした頃からこの種の見世物が、寄席的空気から離れて、除々に大劇場的演出に移行してゆき、遂ひにパリで大懸りなレヴュウとなつて「裸女の花」と咲いた訳けだ。ロンドンではコクラン、アメリカではジーグフエールド、ジョージ・ホワイト等の大興行資本と豪華な企画に依つていやが上にも豪華なスペクタクルとなつて行き、映画企業にも取上げられ、今日世界中にレヴュウといふ多彩な交響楽が奏でられている。

レヴュウとは寄席といふ小さな苗床に近代的大資本を投入して人智を越えたメカニズムと科学のトリックを巧みに利用し、流行美のパレードに仕立上げたものと思へばよい。勿論当事者は永年寄席の中に育くまれてきた良きものを、レヴュウの中へ取入れる事を忘れはしなかつた。特にレヴュウの中に不足勝ちな「笑ひ」の部分に、これを充分に利用した。

映画「美人劇場」の中で皆さんも御記憶の「ミスター・ギヤラガアとミスター・シーン」の場面は最もアメリカ的なボードヴィルの愛す可きセンスの一編だ。以上がこの種の見世物の簡単な変遷の歴史だが、今僕がやろうとするショウは、勿論そんな豪華なレヴュウへ

の夢想ではなく、それ以前のつまり機械化されない人間的な暖い親しみやすいアンチームなショウなのだ。懐古趣味でも復古からでもなく小劇場といふ条件と社会情勢の二つが生み出した必然性なのだ。今のところ、これ以外に小劇場のショウはあり得ないとさえ考へられる。

大劇場のレヴュウやオペレッタにはそれとしての………映画のアトラクションには（映画を見にくる観客を対照とする）企画がある如く、バァレスクには又バァレスク独自の面白さと世界がある。選択は観客の自由に任せて、当事者はそれぞれの繁栄の為に鎬を削ればよい。彼等にこそ、正しく世の流行の王様であるといふ誇りを持つて貰ひ度い。ショウビジネスは「伴奏付きの大博奕也」とは海の彼方の或るプロデュウサーが、いみじくも喝破したところだ。

結論的にもう一度バァレスク・ショウを構成する要素を分析してみれば、特に日本では芸の貧困をカバアする為に構成に頑丈な骨組を必要とし、舞台のカンを心得た音楽者と良き音楽、一応汗と苦痛を通過した芸域の人々。女の美しい秘密を巧妙に見せるある種のスペクタクル・ニュアンス。貧しくとも良きアイデアの衣裳と舞台をバランスよく揃え時流をつかんだ製作をすれば、どうにか見応えのするショウが出来上る筈だ。

そしてもう一つ製作者として慾を云えば、お客様にも充分堪能して戴く為に常打ちの小屋と担当な興業資本の注入がなくては繁栄は期し難い。そこで始めて完成へ一歩踏み出せる訳だ。（二三・一）

〝バァレスクの王様〟

今年のお正月「凸凹宝島騒動」といふ、コステロとアボットの映画を見て、僕はゆくりなくも、往年バァレスクの舞台にたつていた彼等の面影を愉しくも想出した。ニューヨークのとあるバァレスク小屋。

僕は時々思ひ出した様に夜更けの小屋を一時間ばかりのぞいて、ゲラゲラ笑つてホテルへ帰つて行つたものだつた。勿論コステロもアボットも、その道の通人達は当時すでにバァレスクの王様であることを承知していた。

女の間に入つて彼等のカモシダス、ユーモアとエロティシズムには独自のものがあり、単なる女の裸だけにエロティシズムを求めやうとする観客に、痛快な皮肉と暖い人間味のあるユーモアをもつて、バァレスクの空気を正しいものにしていた彼等二人の舞台は、実に楽しい立派なものであつた。アボットの間の抜けた顔とコステロの話術は、バァレスク独自の品の悪るさと、コクのある……言葉をかえて言えばエゲツナイ迄に突込んだ、油気の多い演技は、嫌いな人もあるが、僕は大いに嬉しがつたものだ。



アボットとコステロ

どうも人は好みを一箇処に固定させて、それぞれの世界の面白さとかその道の粋さを自分の好みにあはないものは全部否定して了ふけいこうがある。特に日本人に強い性へきである。そのクセ何でもノゾイテ見度がる。

ある冬の夜、大勢のハゲちやんや女達に交つて僕も客の一人になつた。街燈の下で二人の巡査と一人の女が立話をしている。コステロとアボットだ。女が一人に道を聞いている。二人の巡査は寒いので警棒も外套の前ボタンに引懸けてブラブラさせている。女がその警棒を握つてナ

デたり、立ててみたりしながら誘ひをかけてくる。二人も遂ひに負けて、オーケイと云ふ条りになるが敵は一人だ。銀貨を投げて順番をきめる。コステロが先きときまつて二人は部屋へ消えてゆく。間抜けのアボットが、立番をしながら自分の番を待つ事になる。ブツブツ云ひ乍らも彼等は二人共自分の義務を忘れはしなかつた。

いそいそと部屋へ消えたコステロが、ズボンを脱ぎかける。とそれを窓越しに見乍ら、アボットが大声を張上げて突然レッドライトと叫ぶ。（交通信号の意）コステロは大あはてにあはてて脱ぎかけたズボンを引張り上げる。ノンビリとグリーンライトと叫ぶ。ホッとして又ズボンから片足を脱ぐ。

レッドライト、グリーンライトと実に巧みな間をもつて叫ぶ。その度びにコステロは、ズボンから足を出したり、はいたりする。

女はそれをベットに横たはり片方の靴を投げたり、上衣を脱いだりしながら面白がつてからかふ。三人のピッタリ会つた呼吸は、そんなテーマでさえ奇智とユーモアをもつて、色気とあぶな気を交互にハラハラさせ乍らもつてゆく。

バァレスクの醍醐味だ。スリルともいふ。ストリップ・テイズにしろ、美しい肉体とベールを如何に巧妙に見せかくすかにある。そのシークエンスとシチュエーションには人の

虚を突く奇智と明朗なセンスがなくては、そのストリップ・テイズは生きてこない。不潔なものになつて了ふ。

見世物の場合、女の裸のみに色気や魅力があるのではなく、男が如何にカラミつくかに興味とスリルを感ずるのだ。それが巧妙に演出された時、始めてエロスの神の微笑もみられるといふものだ。二十人程の大きく立派な裸女に取り廻かれてテレル、アボットの顔と嬉々としてデレつくコステロの妙味は男といふ人間の本性を如何なく示して痛快この上もない代物だ。

日本にも一つ位、楽しめるバァレスクが早く出来て慾しい。バァレスクは決して不潔なものではない、昭和の初年頃、ダンスホールを不潔な場所の如く云つたのと同じ種類のものだ。

民衆の支持がなくては生まれもしないし、楽しい独特の演技も育ちはしない。民衆は、理窟張らないユーモアと、フザけた奇智と、美しいエロティシズムを渇望している。

顔を赤らめないで、微笑出来る代物と美しい色気を、舞台の上に眺めたいものだ。感覚的な娯楽の王様は何んと云つてもレヴュウとバァレスクだ。（二三・三）

"デルタ・ヴィナスの顔"

好奇、軽蔑、あらゆる意味を含めて、ストリップといふ活字が、今日ほど多く我々の目に入る時代は、かつて日本になかつた。それは良かれ悪しかれ社会的関心事の一つであるからに他ならない。

では何がそのような関心の的になるか考えてみよう。決して唯のモノ珍らしさだけの原因ではないようだ。

先ず挙げられるのは、女を素材としている点と、それが裸に繋がりをもつことが一つ、はつきりいえば、女の裸体の見世物なるがゆえに、世の男性の好奇心と魅力を満足させる対照になり得るからだ。

それがジャアナリズムの上でも活字になつて遠慮もなく野放図に踊り廻り裸にされているのだろうと思う。日々の新聞紙上、或は文芸雑誌の片隅にまで取上げられ、何のかのと話題になり、一流の雑誌にすら近頃裸の写真が何頁かうまつている現状も、つまるところ社会的現象を物語るカリカチュアに過ぎない。

日本人が裸といふものを公然と見る機会をもたなかつた時代、展覧会の絵や彫刻まで、やかましい取締り法規の中にあつて、小便小僧の前にまでキレを被せ、いやが上にも裸体といふものを秘かなヴェールの向うへ押しやり本能に逆い、見まい見せまいとしてきた。それが終戦を境として自由の讃歌と共に舞台の上にも女の裸がサッソウと登場してきた。醜悪な一モデル女の肉塊が劇場を取巻くほどの観衆を集めたりしたのもついこの間のことだつた。

それが今日兎にも角にも、醜悪さに、目を覆うというほどのこともなく、二時間近くの間を女の裸体を構成の土台として一つの見世物が出来るようになつた。ここにも日本人の折衷の巧さというか、アレンヂメントの器用さが見られるような気がする。

アメリカでさえ過去にバァレスクの歴史は安泰ではあり得なかつた。特にバァレスク劇場の主要な見世物の要素であるストリップ・ティーズは創始されて僅かに廿二、三年にしかならない。風教関係の上でもいろいろ問題になり、物議を醸したりしたこともある。

勿論ストリッピングといつて、半裸の女のダンスはヴォドビルやバリエテの歴史の中にも見られる。しかし今日いうところのストリップ・ティーズとは、全然別格のショウ・ダンスの一種で、バァレスクの中でもインチキ・ボクシングやスケッチの間にはさまれてい

たサンドウキッチ・ショウの一種だつた。

それが現在なおストリップ・ティザアの大姐御として自他共に許すジプシイ・ローズ・リイの母親ハヴィック夫人によつて創案されストリップ・ティーズといふ呼称まで与えられて、彼女がニューヨークの舞台へ現れたのが一九二七年と記憶する。いいおくれたがストリップ・ティーズは生粋のアメリカ産のアメリカ的センスに溢れた見世物だ。このジプシイ・ローズ・リイの本名はローズ・ルキズ・ハヴィックといい完全な性的魅力と女の知性を兼ねそなえた女として何かと有名だ。



ジプシーローズ・リー

ジッピイの愛称をもち、ハリウッドの映画にも出演し、去年はガーリイ・ショウといふ大一座を組織して米本土を巡業したり、十年前ベストセラーアの一つになつた「Gストリング殺人事件」の探偵小説を書いたり、その後もマザア・ファインド・ア・ボディの出版があり、バァレスクのスケッチは無数に書くし、衣裳のアイデアから、ストリップ・アクトのコンテにいたるまで実に多方面の才を発揮し、彼女が廿数年前バァレスクに現れストリップ・ティーズを見せてから劇場は素晴しい上昇線をたどりその後ずつとストリップ・ティーズはバァレスクの最重要な演しものになつてしまつた。僕は今でも彼女の水々しいイットを思い浮べることが出来る。

ストリップ・ティーズとは読んで字の如く観客をティーズ（ぢらし乍ら）衣裳を脱ぐアクト（演技）であつて裸ダンスのことではない。日本では裸のことをストリップといい、裸になつて行く過程を重要視するアクトとは知らなかつたのだ。

ここで順序として、この過程のABCを御披露しなければなるまい。

先ずストリップ・ティーザアが音楽とともに舞台へ登場する。踊りながら登場する時も歌いながら登場することも、科白を話しながら登場する場合もある。それはそれぞれ曲目のコンテの立て方によつて異る。

最初の$\frac{1}{3}$はトレーラアといつて、舞台をノシ歩く。（映画のメイ・ウエストの歩行を御存知の方は思ひ出して下さい。）

演じようとする女の性格と状景によつて音楽もちがう。その間、ただ黙つて歩いているのではなく盛んにウインクしたり、誘うような科白を話したり歌つたりするのだ。

お客様がそろそろぢれてくる。照明が変る。腰をグルグルと臼のように廻し始める。それをグラインドという。

ストリップ・ハーリイ、脱げ！　脱げ！　と叫び出す。日本人は心の中では思つていてもお上品だから口には出さない。しかし顔色で解つてくる。時を見計つて上着を脱ぐ。この脱ぎ方に千差万別あり、技術の巧拙あり、この辺が見処でありサワリに相当する。

再び照明がほの暗く暗示的な色彩になる。つまり明る過ぎるということは、日光の直射の下で見る女のように、性的な興味を半減させるものだ。もう少し明るければ、もうチョイ見えそうなのに、といふ気持や、うす暗いことが観客の幻想を豊かにする。

ストリップの舞台では照明は非常に重大な演出の補助をする。これで身につけているものは段々に少くなつてくる。下着を脱ぎ、ブラジヤアを取り、パンティだけの姿になる。観客の焦点は女の胸へ集中する。乳房の美しさと、胸の呼吸が交叉する。

今度はヴァンプといつて大砲のように腰を前後にダイナミックにアクセントをつけて、いろいろなリズムで発射させる。いよいよ最後のフラッシュ（最後の露出の演技）に近ずく。パンツを脱いで最後のGストリング一つの姿になつたかと思ふと暗闇の中に消えてしまう。

以上が類型的なストリップ・ティーズ演出のＡＢＣであるが、この順序の組合せにいろいろなアイデアが生れ、ストリッパアの技術と演出で変つた雰囲気をつくつて行く。

だからストリップの見方といふものは前記のようにその状景と性格、暗示された環境で如何に脱ぎ、最後の瞬間までもつてゆくかに興味の中心はあるわけだ。彼女等の最後の一線、即ち前を隠す小さな三角形のプロテクターのことをGストリングと云ふ。これが代表的な名称で、バタフライとか、デルタ・ヴィナスの顔ともいう。この最後の一線を死守するプロテクタアは、精巧な人造ダイヤとか、美しい光沢のある石や真珠をあしらつて作る。色や形も着る衣裳や場所に依つて工夫される。これだけは衣裳屋の作るものではなく靴とGストリングだけは、彼女等の自前なのだ。それだけに彼女等も競つて趣味性と感覚をあげて針を持つ。

いろいろと教えてやつて、やつと近頃どうにか、それらしいものを作るようになつたが

まだまだ品格のない安物の感が強い。それにはチェッコ辺りのいい材料が安く入手出来るようにならないとコッタ道楽も出来難い。

こんなところにもまだまだ一年生だ。

このGストリングは前だけを隠すもので、後の割目から一本の糸でつり上げ、T字型に腰で支える様に造つてあるが、原則的に後を向くことは禁ぜられている。後部を見せる時には必ずその割目を覆うだけの房とかキレをたらすことになつている。

さて話は身近いところへ飛んで、現在東京だけにも百二、三十人の裸を売り物にする踊子がいるだろう。その中でストリップ・ティザアと呼べるのは、ヒロセ・元美を筆頭に園はるみ、島崎魔子、フリーダ・松木くらいのもので後はメリー・松原、吾妻京子等をトップにヌード・ダンサアが大半だ。

ひどいのになると裸も裸、劇場へは上りもせず、専らお座敷やカフエの女給の真似をして暮す踊子が半分くらいはいるだろう。

それも彼女等だけの罪ではなく、金のため生活のためと、つけこんで裸を酒席の見世物にする悪徳ブローカーが害を流している現状だ。

いくら図々しい女でも全ストをやりたいと申し出る女はいまい。甘言につられ、つられ

たような顔をしても、兎に角、進められてなる場合が多い。結局、彼女等の位置が向上すればそんなことは消滅するだろうが、今のところ当り前かも知れない。自覚を待ち、周囲で遠ざけるようにする以外、方法はなさそうだ。

現代日本の生活から割出して、彼女等の収入は決してそう貧しいものではない。会社員や労務者の率からみたら、はるかに高い賃金を得ている。例えば一番安いコーラスで一日八時間の中、舞台は四回、一回のプログラムの中で六曲踊って十七、八分、一日の舞台出演が約一時間十分位―それで五百円から七百円を最低に千円か千二、三百円が普通、最高が三千五百円位、舞台が終つてから夜の仕事（キャバレー等）が週に少くて五回、多い時は一晩に二、三箇所、これは二曲位で五、六百円から千五百円位まで、最高が三千円だ。少く見積つても夜の仕事から一ケ月一万五千円から四、五万円迄、劇場から二万円から十万円くらいまで、彼女等はそのいずれかに入るわけだ。勿論夜の仕事にも買つてもらえない問題外の踊子もいるが、現在彼女等のもつ技術と芸で以上のインカムは法外なものともいえる。

それで年中ピイピイしている。楽屋でもセコハン洋服屋や化粧品や食物やに借金の催足ばかりされている。勿論例外の踊子や、美談めいた世話場の女の子もいる。

彼女等の性道徳もさして驚く程のことはなく他のシロウト顔の娘と大差はない。それどころか一人の男をまもりかしずかせ、飯をたかせ、パンツの洗濯までさせ、内職の衣裳のカバンまで持たせて歩く立派なお固いアマゾン姫もずいぶんいる。知らない人が楽屋で話す彼女等の話だけを聞いたらキモを冷すだろうが、どうして口ほどにもない気の小さな小ヴァンプばかりだ。

この間もショウの仕事だといわれて出かけて行つたら飛んでもないショウだつたので、靴を持つて逃げ帰つた話をしていた。昼から夜中まで働いて、朝楽屋入り前にダンスのレッスンをとつて来る感心な踊子もいる。珍らしい存在だけども、何時の場合、何処でも同じようにそんな子は恵れたスターダムへ登場して行く。大体舞台人としては年令が若く、二十才から廿三才くらいまでが圧倒的に多く、それ以上の踊子は戦前からいくらか舞台的経験もあり楽屋内の礼儀も心得ている部に属する。十七、八才のイタイケなのもいる。

僕は出来るだけ早く彼女等がユニオンを作り、生活と舞台を向上させるため、アメリカのB・A・Aバァレスク芸人連盟のような組織を急ぐことを進めたい。

コーラスからショウガールへ、ショウガールからストリップ・ティーザアへ、と進む道も組織的な訓練と指導をしてやらねばならない。野放しで立派な作品や面白いバァレスク

が誕生する筈がない。

劇場のビジネスにしても、プロジュースにしても、舞台、美術、衣裳、照明にしても、まだまだ幼稚なものなのだ。良き栄養と指導の方向さえ間違っていなかったら必ず短日月に相当なモノにするのが日本人の特性だ。日本には大人の娯しめる見世物が少な過ぎる。例えば、日本映画は若い男女、洋画は青年層が大部分。では、中年の男達は何を見る。慰安と云ってカフエやバア、待合やお茶屋で遊ぶより方法がない。金がなければそんな道楽は思ひもよらない。

家の中でクスブルより道がない。安くて大人が娯しめる見世物が是非慾しい。そういう慾求に応じて出来たものが日本のバァレスクだが、まだまだ低くて大人の観賞には応えられない。しかし女を主体として色気のある、気の利いた粋な見世物が出来たら都会の大人の娯楽は一変するだろう。

健康なエロテイシズムとユウモア。

エネルギッシュな雰囲気、音楽、美術、女の美等あらゆるものを綜合した親しみやすい肩の張らない人間味のあるもの――。そんな見世物が出現したら必ず拍手喝采疑いない。ストリップの女たちも個性を磨き、優れた体臭を発散する美しい一個の女性になるならば

魅力たりうるが、甘っちよろい娘っ子のもの慾しげな半裸の姿をさらしてくれる位いでは満足出来ない。

現在の舞台の女の一番いけないのは、ほとんどがチンピラであり過ぎる。芸といつても高が知れている。先ず一人前の男心をそそるような女であることだ。しかしその女であるといふことは舞台では困難なことで、特に裸になると日本の女の子は子供々々して顔立ちもそうだが大人らしくない。

それは結局、心に大人だけの輝きと、モノに徹した純粋さが足りないからだ。僕の云ふ大人と云ふのは年令や生活の労苦からだけ来るものではなく舞台の女は、舞台の女としてバァレスクであろうと何処であろうと、ツキツメタ人間がテラウことなく、何物かに精進してゆく貴さが滲み出ている人間をさして云ふのだ。舞台で人目に立とうと心から刺烈に考えている女は驚くほど巧い媚体を示したりウィンクをしたりする。こんな女が案外バァレスク等では人気者になることがある。

それ等が土台になつて一つずつ芸を積み重ねてゆき、年月の苦労の影が滲み出ない女はよくなるが、自分のしていることを、ほんとうは裸になんかなりたくないんだが生活のためには仕方なくなつているんだと思つているような女は駄目だ。前の目立とうというのと

反対に消極的に隠れようという気持が現れてしまう。

要するに、バァレスクのストリップ・ティザアといつても普通の女で、舞台を一つの職業と心得、割合に率のいい遠慮のいらない仕事だ位いに思いすましているのがほとんどだ。十パーセント位いの女が、新しいジャンルの上で女王たらんと野心を燃やし、熱心に芸を磨き肉体の衰えを警戒し、注意深く生活している。同じ舞台の女でも他の世界にないのは、例えば洋服や衣裳を注文する時、電話で一インチの狂いもなく自分の丈から胸、腰、腹、股下のサイズまで一口に淀みなくいえるのはけだしストリップの女の子だけだろう。

太つた瘠せたを彼女等程毎日気にし口に出す女は先ずいないだろう。だんだんプロポーションのいい女も現れて来るし、このうえ美人が揃えば申し分なしになる。男は楽しみだ。

(二六・一)

"バアレスクのおかしさとあほらしさ"

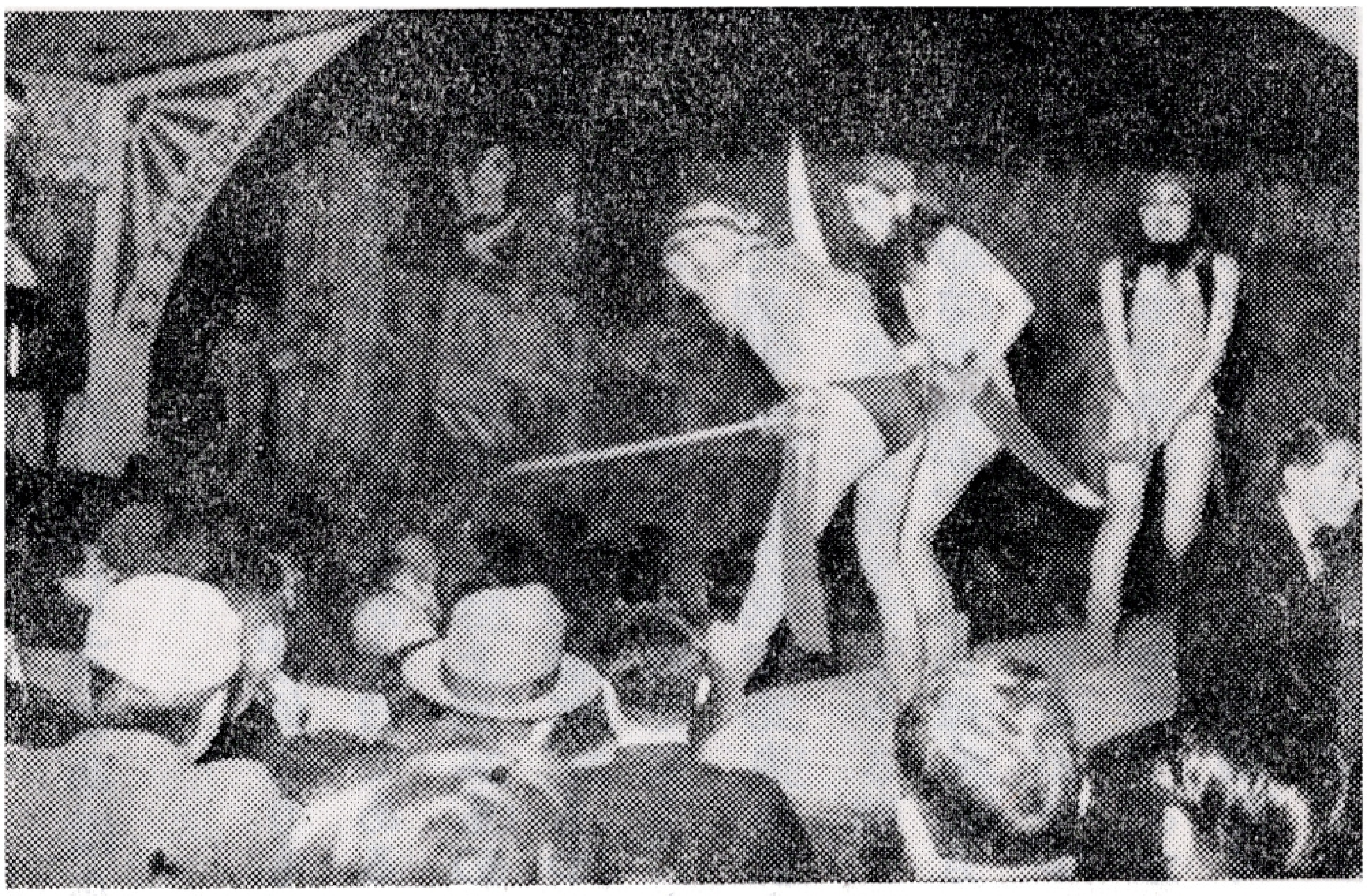
バァレスクと云ふ処は、先ず何よりも、おかしくて、あほらしい処でなければつまりませんね。そりや勿論お色気が土台であることは申し上げる迄もありませんが……。

ではバァレスクのおかしさと云ふものは、どんな種類のおかしさか考へてみませう。

正統な社会劇やファースの様に、もつたい振つた、大げさな人間社会の諷刺や、カリカチュアライズした刺のある皮肉でなく、もつともつと暖いヒョンな、そして下素つぽい、併も本能的で猥雑な、野方図でありきたりのものがバァレスクのおかしさの本来のものです。

その間抜けさ加減が、即ちあほらしさに通じるものです。よくもこんなに人を食つたものが……と云える態のものが、バァレスクの魅力の根元でなければいけません。

つまり大変にゲテモノなのです。ですからお客様もむつつりと深刻な顔をして御覧にならず、おかしければゲラゲラお行儀悪く笑つて戴きたい。どうも客席の空気といふものが寄席の雰囲気になつて居ない様です。



客と遊ぶ女たち

裸の女が現れるとカタズをのみ、呼吸をコロしてぢーっと眺めている様ですが、あれぢやつまりません。お尻へ一つバナナの皮でも投げつけてやつて下さい。そうすれば皆んなの気持もグッとくだけて、ユーモアが漂ひ、気持が明るく、舞台の人にも自然、愛嬌が生れ、無理なく舞台とオウディアンスが一つに結びつき、バァレスクらしい雰囲気が生れ、大変楽しい処になる様に思ひます。

第一、日本のバァレスクの舞台に出る役者や踊子達が、もつともつと御客様を意識し、親しむ様にやり、見世物も、プロセニアム・アーチと云ふ舞台と観客席の境を取り除く様に努めなければいけません。

そうすると和気靄々と云ふ様な愉快な空気

の立ちこめる場所になるのです。
バァレスクのストリップショウは、エロショウになつては困ります。微笑や苦笑、爆笑を催す様なアイディアのあるストリップが理想的なものです。
一番必要なセンスは、ユーモアです。クソ真面目な芸術みたいな踊りを、ストリップショウで時々見懸けますが、あれは一番つまりません。突飛でアンチームなもの程よろしい。公衆のものですからイヤシクならず、裸体に対しても、人間のノゾキ心理に訴えるにしても、どこ迄も公衆の為の見世物である事を一時も忘れてはなりません。ノンセンスの表現であれば、強い刺激的なものにならず、気楽に、ウワッハッハ………と笑つて見る事が出来ます。
例へば、アボットとコステロの如き、見るからにおかしく、あほらしい人間が、色事の世界で繰返すしくじりのおかし味、そうしたものが、バァレスクの醍醐味と云へるでせう。二人はブロウドエイのバァレスクで十何年と云ふ間、王様の如き存在だつたのです。
フランスやイギリスの寄席の芸の中には、ノンシャランで粋であつても、どこやら漂ふ智的な鋭い眼がチラチラと見えている。
政治向きや、世相、特に上流社会に対する批判、諷刺が、陽気さの仮面の下でいつも眼

を光らせている。ですからお客様も、溜飲を下げるといふ態のものであります。
勿論それでないと物足らないからです。そりやずいぶんエゲツナイ種類の色物もありますが、そう云ふ種類のものでも、何処か、シリヤスで私はあまり好みません。
併し、アメリカのバァレスクの好もしさは、何事も軽々とひようきんで後味がよろしい事です。
都会の人達は気が利いていても品の悪い色遊びの事を、バァレスクの趣味だと云つてよく笑ひますが、一寸見当がつく言葉だと思ひます。又、彼等は独特の芸風をもち、その練磨と精進に於ても、他の舞台人と同じ苦労を重ねています。非常に狭い領域の特種な芸風だからよけいに苦労をしている様です。
イヤ味に落ちず、程良きエロティズムと軽妙さを生命とし、軽口と肉体的表情によつてハッとする処迄見せるが決して汗のあとは見せない。だから見た後でイヤなものを見た様なオリが残らず、まことにさつぱりして気持がよろしい。表へ出ても思ひ出すと、クスッとやりたくなるが、いつの間にか忘れて了ひ、又のぞき度くなると云ふ様な代物が、バァレスクと云ふ不思議な宮殿なのです。
若く美しい女に配するに、アボットとコステロ、考えても見て下さい。決してシカツメ

らしく批評をしたりする種類のものでない事がお解りでせう。

G・Iさんの楽しみ振りを御覧なさい。一つチューインガムでもオッパイめがけて、ほおつてやりませう。

（二四・十）

“舞踊のエロティシズムに就いて”

芸術的なバレエやダンスの事は、しばらくおき、大体舞踊には儀式的神秘的なものと、好戦的なものと求愛を目的とするエロティックなものと三種類に分ける事が出来る。とは云つてもそう厳密に区別する事はむづかしい。何故なら勇気と死と苦痛に対する英雄的な表現としての好戦的な踊りは、同時に男が女に対する強烈な自己表現の求愛の踊りにも通ずるから。又種々神秘的なものが如何に性慾に根底をもつているか、このことは云ふまでもない。

併し舞踊の唯一の疑ふ可からざる第一のものが常に性慾的なものである事だけは間違いない。

現在各民族の間に残つている舞踊を見ても儀式化されていて、その原始的なものの姿はかくされてはいるが根本的な要素は、いつも求愛の目的にあつたのである。例へば僕の見た南方パプアの踊りに就いても非常に様式化されてはいるが、男が女の周囲を飛んだり跳ねたりして踊ると云ふより極端に場所を変えると、女は一所に立止つて身体の中心のある

一箇所を動かす。腰を振るといふ事は女が愉悦の感情を起すと同時に、無意識的に起す運動であるが、女がエクスタシーの頂上にあるかと思える時、男は益々激しく跳ね廻る。僕達が見ているとおかしいが真剣なものだ。

文明社会では金さえ持つていれば結婚する事が出来、未開の土地では男がうまく踊れば女は男のものになると云はれている。

とにかく律動的な運動感、跳躍、等と云ふものは愉悦への導入の本格的な第一歩である。

一夜、マライの踊りを、ある部落で見た事がある。たき火とたい松を赤々と燃やし、女達が火の廻りにしやがみ太鼓を叩いている。〝夜匂ふ花〟といふ高い香りの白い花を頭にさし、女達は踊りの始まるのをぢつと待つている。

男達は何かそれぞれ曰くのありそうな戦ひの記念の様なものを一杯付けて森の間から現れる。そして火のまわりを手をつないで輪をつくり歌を歌ひ乍ら鎖の様に動き出す。小さなノロノロしたステップで蛇が丁度ノタクル様にうねうねと動き始める。後へ下つたり横へ開いたり、閉じたりする。歌と太鼓のリズムが段々高まり踊りが高潮に達すると、女達が輪の中へ出て来て目を閉じて、それぞれ自分の選んだ男の帯を掴える。すると男は相手

の女の頸と腰を抱き、歩調が重くなり、二人づつ暗闇の森の中へ消えて行つて了つた。後には唯たき火の残りと落ちた花と夜鳥の様なクックッ云ふ囁きが時々きかれるばかりだつた。バリーにもスンダにもジャワにも似たものがある。女のテクニックは如何に巧妙に腰を強く、ゆるく、振つたり、ケイレンを起したかの様なフルエの動作を微妙にやるかにある。横に縦に、8の字に〇形に。

男は自分の強さを誇示する為に、いろんな動作をする、見ているものも非常に興奮してくるらしい。

現代の我々の社交ダンスも、或る人に云はせると去勢されたエロティズムの密輸入だと云ふ。それはともあれ、舞踊の第一義的なものがエロティシズムであるといふ事はほぼ御解りの事と思ふ。

非常に高雅な様式をもつ、クラシック・バレエの二重踊の中にも接吻に相当するいくつかの美しい愛情のポーズがある。

〃現代の男達には遊戯的本能が欠けていて遊戯も真剣もはなはだ手際悪く〃——と誰れかが云つている事は、微妙な恋愛の技巧が昔の騎士道華かなりし頃の如き優雅さがなくなつた事をさすのであろうが踊りの中には、はつきりその心が残つている。

女は立上つて甘い陶酔に憧憬れている騎士的男性の熱烈な口説きを緊張して待っているその心理的祕密を知つていて巧妙な振付師や踊手は必ず踊りを構成するだろう。

女は精神も肉体も男より、はるかに複雑なものだ。無数の機械をもつた設備だ。全体をあげて、一つの運動をさせる為には充分な動力と刺戟の繰返しが必要だ。間の抜けた男には、女といふものが常によく油を注がれいつでも動き出す様に出来ているものだと云ふ事に気がつかない。女がほんぜんと一つのエクスタシーに向つて動き出して行くには行く様な課程がある。熟練した技術屋が機械に手を触れると忽ち楽しげな音を立てて廻転し始める。

女が楽しく生きる為に必要とするものは、精神的に高められた興奮の状態である。舞踊のエロテイシズムとは、女体を見せる事でも露出して見せる事でもなく、女が高められたエクスタシーへ到達する迄の課程を、その肉体運動を通して、男性にいどむ瞬間のその争闘の中にみられる一種の女体から発散する色気なのである。愛の戯れとも云ふ。魚に水が必要の如く女には男の口説きが必要だ。舞踊のエロティシズムは、それ故男と女の二重舞踊によつてのみ生れるのが本来のもので、女一人のものは男を待ちもうける期待と寂寥の交つたものだ。舞踊が見世物となつて、種々様式や見世方が変つたとしても舞踊本来の姿

はどこまでもエロティシズムにある。

ストリップダンサーの動きはエロティシズムを本来のものとせず、美しいヌードをより刺戟的に見せる裸体の見せ方なのだ。だからよきストリップダンサーの脚はバレエの踊子の様なたくましい脚ではなく女の宮殿を支える二本の眺めて美しい優美な柱でなければならない。美しく盛上つた乳房と腰。いためつけて作り上げた踊子の動きと美しい肉体より、最も自然のままの美しいものでなければならない。だからストリップダンサーの教育は普通のダンスやバレエの教育では駄目だ。自然のままの美事さをそこなはないで、踊子として育てるには特種な訓練が必要だ。ストリップダンサーの肉体は柔らかいヴォリユームが第一条件で力や冷たさが感じられてはいけない。ストリップショウを立派なものにするには、それだけの準備と経験が必要だ。ペタンコのオッパイやタレ下つた醜悪な奴、うすよごれた衣裳、粗末なデコール、下手クソな踊子。それでは切角足のつきかかつた劇場にもやがて秋風が吹くであろう。同好の良識をもつ、ギャラントな紳士達が集つて呉れたらもつともつと美しく陽気で楽しいエロスの殿堂が出現するだろう。（二四・十二）

〝ストリップ用語

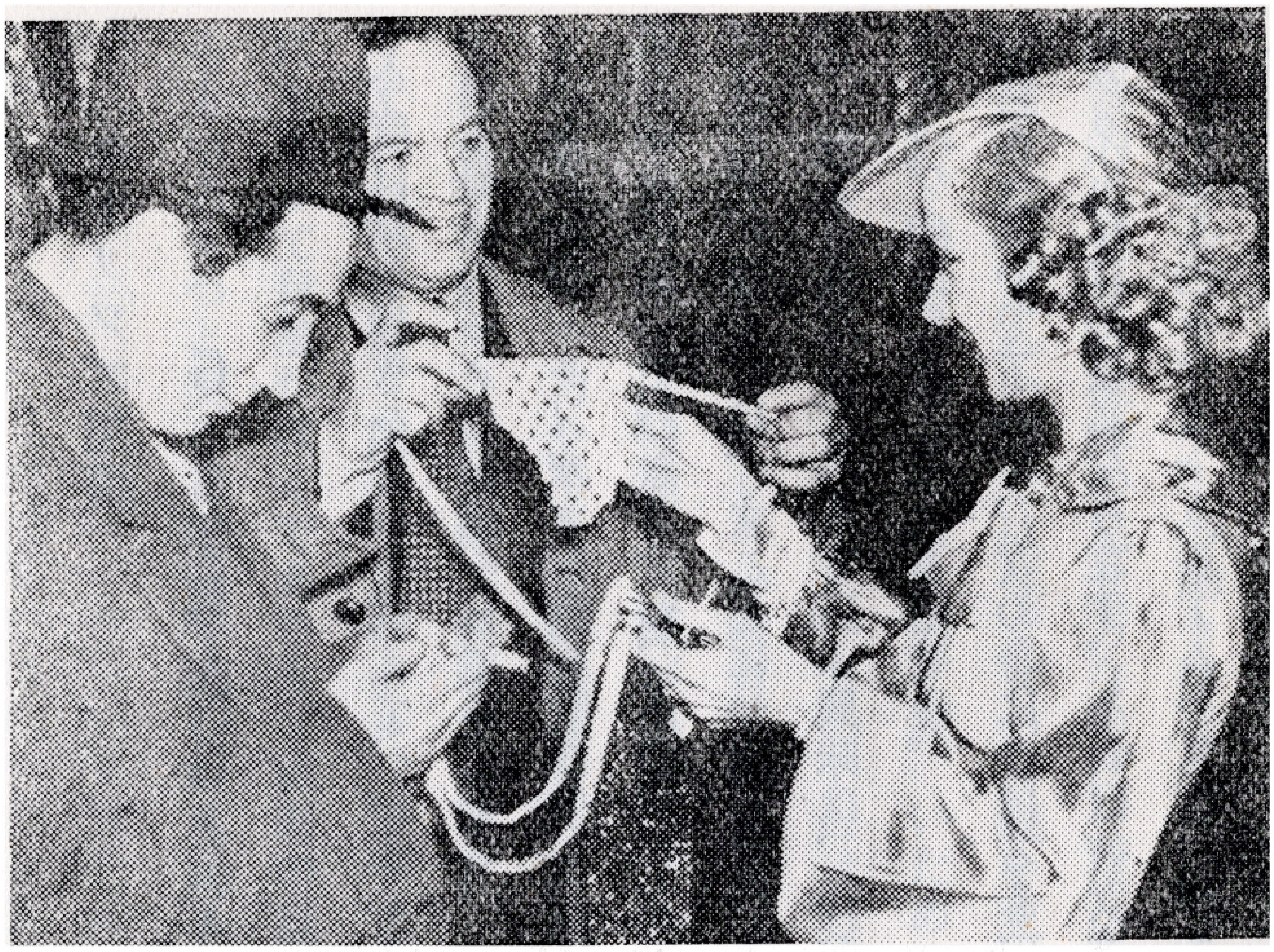
G・STRINGというもの〟

今度は話の趣きをグッと代えて、バーレスクの舞台で皆さんが度々見られる、女の身につける最後のモノのお話をしてみませう。

ストリップ・ティザアが歌を歌ひ乍ら、或は話をし乍ら、動き乍ら巧みに、着ている衣裳を除々に脱いで行きますね、あの脱ぎ方に、見事な習練の跡があり、脱ぐ衣裳に優れたアイデアが無くては、まことにつまらないものになつて了いますが、それでも未だ、脱いで了つてどうなるだろうと云ふ興味は、つないで呉れます。その辺がまァ云ふところのストリップの面白さと云えるでせう。

さて、脱いで了つて、女の身につけるものと云えば、又の処に美しく光る三角形のプロテクターだけの姿になります。それは彼女達の最後の一線なのです。

これにも色々なニックネームや名称、があつて、丁度日本でもレビュウの舞台の幕内の人達が踊子のはくパンツの事を逆にツンパと云つたり、銀色のパンツを銀ツンと云つたり



G・ストリングに就いて語りあう楽屋裏

するのと同じですが、こんなところにも国民性の相違からか、全然感じの異つたスラングが生れています。

先づ、デルタと云ひます。これは三角の型から来た呼び名です。

バタフライ、これは前から見ると蝶々が、あすこに止つた様に見えるからと、又バタフライが浮気にも通じるシャレです。

ヴィナスのマスク、女性のあすこのことをヴィナスと云ひますから、あすこのマスクといふ訳です。

変つたところで、パンティ・ブルウといふのがあります。これは肉眼で見えない様な、精巧な織物で出来たパンツをは

いていて、何もはいていない様に見せかけるトリックです。意味は、観客が、畜生！はいてやがる、面白くもない。憂うつだの意。

ゲイ・スリリング　これが僕は一番立派で美しい言葉だと思ふ。華麗なる戦慄とでもいふか、まことに適切な美しい感情をもった、スラングです。

G・ストリングこれが一番普通の通り名です。ガッゲットを糸で吊ってあるからです。Gはガツゲットのですが、ヴァイオリンのG線で吊ってあるんだと笑って話したことがあります。後ろの方のお尻の割れ目の当りにつる糸の見えない様に、いろいろ工夫をこらします。まだ一寸書き難い様な言葉も沢山ありますが、これ位にして、この彼女等の美しいプロデクターは大体三角形の布に、ツテルといふピカピカ光る雲母の様なものを縫ひつけ、後ろや横のつり糸を出来るだけ見えない様に工夫するのが普通です。色も色々あって、金、銀、黒、赤等で型も大体三角が自然で、オサマリヤスイ訳ですが、ヒドイのになると、その三角形の両側にショウキ様のヒゲの様に毛がピンと生えているのや、果物の型、花の型等もあります。わざと光るクサリを使用したり、プラプラと房の様に下ってゆれるものをつけたり、とにかくこのG・ストリングといふものは、彼女等の一番工夫をこらしコリにコルところの衣裳なのです。

僕も二、三コレクションを始めた事もありますが、他のものと異つて、どうもあんまりお美しいところへ当てるものではないのでやめて了ひました。それに、いつかベットのところへブラ下げて置いたら、何も知らぬ友人が来て、夜会用のハンド・バッグと間違え、「おい女を何処へかくした」と、とんだ茶番もありましたつけ。それ程、精巧華麗なるものがあるのです。イヴニングのハンド・バッグと間違える程、美しいGストリングはまだ日本のお嬢さん達、持つていない様です。

いつかヒロセ元美が、玉虫色の地味ではあつたが割合ひに美しいのをしていた事があつたと思ひます。おかしなものでこんなものを作るにも、衣裳家とか小道具屋とかの中に不思議な好事家があつて、狂的な熱心さをもつて工夫をこらしている職人がいるものです。僕も説明を聞いてアキレた事がありました。色ガラスや真珠等の宝石をあしらつた、豪華なものもあります。

過日、ある舞台で三分も巾のある白いゴムテープでお尻の割目を通してT字型に吊つている踊子をみて、こつちが恐縮して了つた事がありました。こう云ふ事は、専問家がドシドシ注意してやり、教える様にしてやらないと駄目です。本人の無智からそれでも結構立派だと思つているのかも知れないのだから——。

それからこの頃、誰れも彼れも乳首にフリッテルを張りつけて舞台へ出ているが、これには僕、全然反対です。あれ程乳房の美を疎害する方法はない。特種なエフエクトをねらう演出以外、やめてもらい度いと思ひます。美しく盛り上つた乳房に、朱をさした乳首は美しい一つの見せ物だと確信します。何処の国のストリップ・ティーザアに乳首へノリで物を張り、自然の美しさにフタをする踊子がいませうか。まことに馬鹿げた事です。いろいろな事情はあると思ひますが、これだけは是非、自然のままの美しさを見せる様にしてもらい度いと思ふ。そうなれば又見るからに美しい乳房の人でないとミニククナッテ困りますから、いやでもおうでも美に自信のある人だけに登場のシテュエーションといふ事になりますが、そうなれば、あんまりヒドイ、目をそむける様なのは、自然僕達の目の前から消えて失くなるでせう。

何と云つてもストリップ・ティーザァは美しい魅力あるヌードをコケティシュな衣裳と表情で包み、人々を楽しませてくれるものなのですから。

それと、もつと大きな人が慾しい、肉体のダイナミックな圧力をもつ人が沢山出て慾しい。ヌードに力の美が不足して、まことに貧弱です、今日の話題のG・ストリングも大きな体でこそ、輝しいシロモノになるのです。（二五・二）

“日小バアレスクの編成”

日本でも僕が三年程前に始めて、バァレスクと云ふ言葉を使つて、日小バァレスク・スタイルのショウを計画したが、優秀なストリップ・テイザァが無くて思ふ様に行かなかつたが、最近どうにか、いわゆるエロ・ショウとは異うものであり、ストリップ・テイズと云ふものの演出も、皆さんに解つてもらへる様になり、ややバァレスクらしいスタイルの見世物に、近づいて来た事は愉快な事です。

アメリカでもストリップ・テイズといふジャンルの見世物の歴史は日が浅くてやつと十六、七年にしかならず、日本でストリップ・テイズを云々する事は無理な事ですが、それでも物真似の上手な日本人は、どうにか、このままうまくゆけば、いい芸人さえ出てくれれば結構楽しい見世物にしてゆかれると思える様になりました。

ストリップ・テイズと云ふスタイルの見世物はアメリカ以外の国にはなかつたもので、アメリカで創始されアメリカで発達した独得のショウで、これは有名なストリップ・ティザァのジプシイ・ローズ・リイと云ふストリッパアのママであるところのハヴィック夫人

と云ふのが創案者で娘のローズ・リイの為に、衣裳から何からあらゆる面倒をかけて仕上げた本当の育ての親です。

彼女はバァレスクの中へストリップをもち込むのにも非常な自信と見識をもつていて、衣裳にも大きな改革をもたらした人です。当時ジッパーと云ふものが発明され、これは便利で面白いと云ふ事を、いち早くストリップの衣裳に応用したりして、あざやかなところを見せ、当時新聞を賑はしたものです。

ストリップ・テイズといふ言葉は、これもハヴィックの創案になる言葉ですが、まことにうまい言葉を考えたもので、お客様を「ヂラシ乍ら脱ぐ」とは如何にも人を食つたバァレスクらしい言葉だと思ふ。観客がストリップ、ストリップ、ハアリイ！と騒ぐ中で、ユウユウとヂラシ乍ら一枚一枚脱いで行くのですから如何にも考えたものです。まことにアメリカらしいセンスの見世物だと僕も感心したものです。

ストリップティザァは、ほとんどアメリカ人ばかりで外国のストリッパーは一人も居なかつたのですが、カナダのジャクリン・ジョイスと云ふフランス系の踊子がニューヨークに現れ、忽ちにして、ジプシイ・ローズ・リイの牙城にせまり、センセイションを起した事があります。彼女の得意とする番組は、彼女の持つ衣裳に特異性があつたのです。つま

り女の皮膚に、野性味のあふれる毛皮を対照にもつてきた事です。背の高いジョイスが素晴しいミンクのケープを全裸の上に羽織つて、舞台から愛嬌を振りまく様は、大したものでした。その当時彼女の持つていた手皮のコートは、全部で十万ドルと宣伝されて居て、毛皮以外の衣裳は全部使用しませんでした。

とにかく彼女達が、Gストリング一つになる迄に着ている衣裳と、その脱ぐ順序、脱ぎ方、衣裳の割り方の部分々々に意を用うる事と云つたら言語に絶するものがあつて、その創意に美しさと、ウキットがあつて、ストリップ・テイズは成功するのです。唯、日本の様に裸になる事だけでは問題にも何にもなりません。

一例をあげれば、先日、ヒロセ元美にやらせた〝私は貞女〟の鍵を下げたのや、メリー松原に踊らせた〝スト決行〟の如きもので、あれをもつと素晴しい豪華な衣裳でやらせれば益々面白い、美しい番組になるのです。

今度の公演からショウガールを登場させますが、これは踊子ともストリッパァとも異つて、バァレスクの美しいアクセサリーなのです。段々に、皮膚がきれいで背が高く立派なショウガールを日小の名物に仕立て上げたいと思つています。彼女等も自分達の領域を充分承知して、それぞれの役目を立派に果してもらい度いものと思う。歌は是非勉強しても

らい度い。

立派な大げさな衣裳を着て歌を歌い乍ら、いわゆるトレーラアといふ（日本のバスの様ですが）歩き方をして、舞台の上を練つて歩くのです。

誇りやかに、いわゆるクジャクの様に……。

そこえ愉快な仲間と云はれる。コメディアン四、五人が入れば大体バァレスクの編隊は成立するのです。

ストリップ・テイザアとヌードダンサー、グラインダアと呼ばれる腰の大砲の射手、それにショウガール・コメディアン・グループ。僕等の日小バァレスクはやつと編成が成りいよいよこれから訓練を重ね、スタッフをそろへて、皆様の御機嫌を取り結ぶ可く、除々に計画を進めて参ります。僕の一番気になる事は、女の子が、どれもこれも、着物を脱ぐと、まことにアドケなく、小児の如く変貌する事で、若々しさは第一の条件ですが、乳くさい小娘ばかりで女らしい女の少い点が一番淋しいことです。やつぱり大姐さんがずらりと並ばないとバァレスクにはなりません。舞台が美しく大人の楽しめる場所でないと、皆様の足もニブリ、不潔なウラブレタ場所をのぞく様な気持になるのは感心しません。

ガールスの美しさと立派さ、衣裳道具の豪華さが何より大切で、観客の皆様にバァレス

クの楽しみを味つてもらうには、どこまでも婦人好みでない、愉快な雰囲気のあふれる場所にならなければぱうそです。是非そうしたいものです。

美しきバァレスクのショウ・ガール



皆様にもどしどしアイデァも頂戴致し度いし、美人も発見して戴き度い。この頃、客席を時々のぞくと、まるでアチラのバァレスクの様に爆笑したり、大騒ぎをしている時も見

かけるが、ああならなければ舞台は面白くなりません。皆様をケシかける様ですが、どうか舞台の連中にピスをとばしてやつて下さい。

(ドアにノックの音)(奥様は寝室で)

「だあれ? あなたなの?」

「いいえ」

「とにかくお入んなさい」

と云ふ様なのがバァレスクの匂ひです。(二五・二)

"裸体とエロティシズム"

近頃バァレスクでも風紀問題がやかましく、当事者間でも倫理規定など設けて、いろいろとやつている様だ。

昨日の新聞に依ればノーマンメーラーの「裸者と死者」の発禁が解除になり今後は一般文化人参加による委員制を設け、作品の芸術的価値を尊重することになつたとも報じている。世論と云ふものが自由になり、一方官庁でも民衆の意見をフランクに聞き、つまらぬ面子等に拘わる事なく撤回するものは、潔く撤回すると云ふ方法は、今迄に見られなかつた気持のいい民主的なやり方で、まことに、すがすがしいそよ風の様なものを感じる。是非そうありたいものだ。この際あんまりハッキリ僕も裸体讃美をやると、助平野郎か、不道徳漢の様に思はれるオソレがあるが、女体を重要なエレメントとして、演出するバァレスクのプロジューサーとして、裸体とエロティズムに就いて如何なる意見をもつているか、ハッキリして置いた方がいいと思ふので、あえて裸体とエロティシズムの表題を掲げペンをとつた。

裸体それ自体決して不道徳なものでない事位は、誰も承知だが、美術や文学、舞踊に於けるエロティシズムも決して不愉快な不道徳なものではない。古代ギリシャ、ローマに於いては、性の問題は何等の羞恥感もなく取扱かわれていた事は、皆様もよく御存知の通り、彫刻にも絵画にも幾多の傑作を残している。例へば、レダを主題とした作品も沢山あり、それが決して不道徳也と云つて非難さるべき性質のものとは考えられない。レダとはギリシャ神話のテスティアスの娘でチンダレアスの王妃であるが、太陽神ジュピタアに見染められ、恋に目のくらんだジュピタアが白鳥に姿を変えてレダの浴室に忍び込み、レダは白鳥に魅惑され懐胎して卵を二つ生む。その一つからポラスクスとヘレナが生れ、他の一つからカストルとクリテムネストラの四人が生れる。人間と動物の交婚説として有名な物語だ。この様な話は日本の近江の白鳥伝説にもみられるが、多くの伝説は皆、白鳥が女としてだが、レダの場合のみ男性であるところに相違がある。ポンベイで発掘されたあるリリーフには全裸のレダがベットに仰向けに倒れ、その又の間から白鳥が頭を突込み、嘴をレダの唇に押しつけている、一見甚だエロがかつたものや、又レダが両脚で白鳥を羽掻締にしたり、白鳥が下から接吻を求めたり、いわゆる構図としては非常にエロティックだ。

チントレットには、浴後のレダが長椅子に横たはり、そばに首をのばし求愛する白鳥を

描いた有名な画もある。ルネッサンス以後もレダは幾度となく画題となりセザンヌさえも裸のレダと白鳥を描いている。この白鳥の細永い頸は、男の性器のシンボルである事も承知の事実だ。古代人の性器に対する考えや、畏敬の念といふものは現代人よりも、はるかに健康なものであつたと云える。中世紀の教会の建築物の中にも尼の尻や性器を露出したり猥らな身振りの彫刻が非常に多いが、それらも破戒的な行為を嫌悪する念を、表現したものとみるのが至当であろう。後年レムブラント等が快楽に対する態度の中にも、極めて大胆奔放なテーマに画題を求めている事も見のがせない。ヨーロッパが専制君主制の時代になると益々精力的に製作され、裸体の美しさより効果的にと、もつと暗示的な半裸の世界が取扱はれる様になつた。それ等の作品が如何に迫力あろうとも猥褻とは感じられない。もし人がそれ等の作品を見て猥褻と感じたなら、その人は余程アブノーマルだ。そんな人が若しバリー島へでも旅行したとしたらどんなであろう。

婆羅門の寺にみる無数の彫刻や浮刻、絵画の類、一つとして、いうところのエロティズムの表現でないものはない。人間の姿のみでなく、動物の姿までかりて……。

併し、誰があの熱国の太陽の蔭影深い石の凸凹面から情慾を感じるだろう。僕が寺の廃墟え行つて見たものは、狂熱的な信仰と苦悩の労作のみだつた。我が国でも近代芸術の開

花期と云はれる桃山時代には、人間謳歌の風潮が激しく初期浮世絵の中には、エロティズムの横溢した雄勁な庶民生活の歓喜の図で、あまりも多く描かれてきた。時代と共に歌麿等の様に隠美なものになつていつたのは一種の頽廃である。

裸の見世物の歴史には、一三一三年フランスのフキリップ王の時代、王子の祝典に裸のアダムとイヴが見世物に与され、一四六一年ルイ十一世が巴里に到着した時には、裸女が庭の噴水になつて見せた。人々は円くて固い美しい乳房を見て喜んだ、との記録も残つている。ヴァテイカンの法王庁の中に於てさえ、或る宴会で五十人の裸女の踊りがあり、食後床に栗をまき踊子達を四ツ這ひにさせて、それを拾はせたと云ふ。光り輝く燭台の間を縫つて栗を拾ふ白い大きな五十の尻を眺めて、法王やその娘ルクレチャボルジャは楽しんだ、と時の式部長官の日記にみえる。乳房に就いては、特に芸術家は憧憬の眼をもつて讃美しつづけてきた。ラファエルの「フォルナリナ」チントレットの「婦人図」チチヤンの「ヴィナス像」ルーベンスの「ヘレナの乳房」その他ワトウ・クルウベ、乳房の美を描いた美術は限りない。脚に就いても同じだ。女の宮殿を支える白くて丸い二本の柱は、長くて伸びきつている程立派で美しい。足は小さく脛はすんなりと臑が小さくて円く、股は奥行きのある厚味をもち膝の長いのが何より美しい脚とされている。古代より男達は女の脚

に無上の愛慕を捧げ通して来た。脚を崇拝するのは膝下に膝まずくと云つて服従を意味するが、脚は愛慾的な憧憬心をもつて眺める時、一番美しさを強く感じるものだ。併し脚は人の生産と力を表し、唯性的な娯しみだけのものではない。

右脚は男性、左脚は女性、第三の脚は男のアレ。要するに芸術に於ける裸体とエロティズムは、そこに猥らな目的が隠されている場合にのみ不道徳であるが、裸の女が踊ろうと裸の男女が抱合つて接吻しようと、それ自体決して猥褻行為ではない。バァレスクの裸体も早く芸術にまで登らなくてはいけない。（二五・三）

"スター誕生"

もうそろそろ本当の意味でのバァレスクのスターが現れてもいい頃だ。

僕の云ふスターとは、ストリップ・ティザアにしろダンサーにしろ、舞台に登場しただけで、一応何等かの魅力と風格をそなえ、芸の進展と共にすっかり観客の心を掴んで了い、その一番が終るのが残り惜しい様な気持を、植付ける程の人達をさして云ふのだ。

併し残念乍らそんな人にぶつかつた事がない、うつとりとさせる魅力をもつた人に出会つたことがない。これは僕の不運なのかも知れない。何処か目のとどかない世界に咲いているのかも知れない。併しそんな素晴しい人が居たら黙つている筈がないし耳にも入る筈だから、悲しい哉、居ないものと思ふより仕方がない。では何故生れないのか育たないのか、全然日本といふ国では見込みがないのか。タクアンやミソシル人種ではバァレスクの芸人として大成する事が出来ないのか。人にも質問されるし自問もしてみる。答はいつも簡単。そうした芸を生み出す社会的な条件といふか雰囲気、芸人を無から創り上げようとする機関、そしてチャンス、そうしたものさえ揃えば必ず近き将来、わが日本にもレヴュ

ウやバァレスクの舞台に、多くの観客を娯しませてくれる芸術家は生れうるものと確信をもつて答えられる。

第一の社会的条件や雰囲気は如何?。終戦後よくなり得る大切な時に無秩序な、心ない荒んだ舞台やヒドイ、ダンス等を氾濫させ、すつかりお客様の御機嫌を損じて了つた。

それから第二の大スターや芸術家を創り上げる熱意をもつ教師や、プロデュウサーの居ない事、間に合せでショウビジネスがすみ、何処かの舞台でグウゼンの様に咲いた、小さな花を宣伝等で、行々しく売つても技術や、芸術家としての魅力の不足等で、大物になれず、クサつて了ふ人達、自分の力の限界を知らせて呉れるよき指導者をもつ機関や、研究室の少ない事等あげられると思ふ。

第三のチャンスは、大体、日本の劇場機構が製作機関は持つて居ても安全第一主義で、大胆なプロデュースを実行していない故か、人のつくつたスターや、二番煎じで間に合はせ、新しいスターを創造したり堀出しモノをしてアッと云はせるといふ様な趣好をキラウものだから、どうしてもチャンスに恵まれない。併しそれでは、いつまでたつても素晴しい新星は生み出されない。古くはジーグフェルドのスター製造法等すでに伝説的に語られ、昨日までのエレヴェーター・ガールが、今日の舞台にスターとなつて登場し、立派に成長した

人もあるが、美人劇場のシーラの様に、転落して行く人々も多かつた。併し日本と云ふ国は全ての生活様式に於て外国とは全然条件が異い、男の様なズボンをはいたり、モンペをはいてベタ靴の生活をしている者に、ヒールの高い靴やイヴニングを着せたり、大胆に身体を露出させて見せるわけにはいかない。社交ダンスのステップ一つ知らないお嬢さんでは、如何に優れたプロデュウサーでも演出家でも振付家でも手が出ない。そして日本の社会や家庭といふものでは、ハイヒールをはいたりダンスでもしたら不良少女扱いをされてきたのだ。だから僕達としては何等かのカタチに於て、すでに卵のカラを割つて出たヒヨコを見つけて、大事に育て立派なものにするより方法がない。それには時間もかかるし、ずいぶんと気永に構えなければならない。でもそれすらあきらめて居たのでは全然見込がない。　（二五・五）



ズ　の　影　絵　（左から）

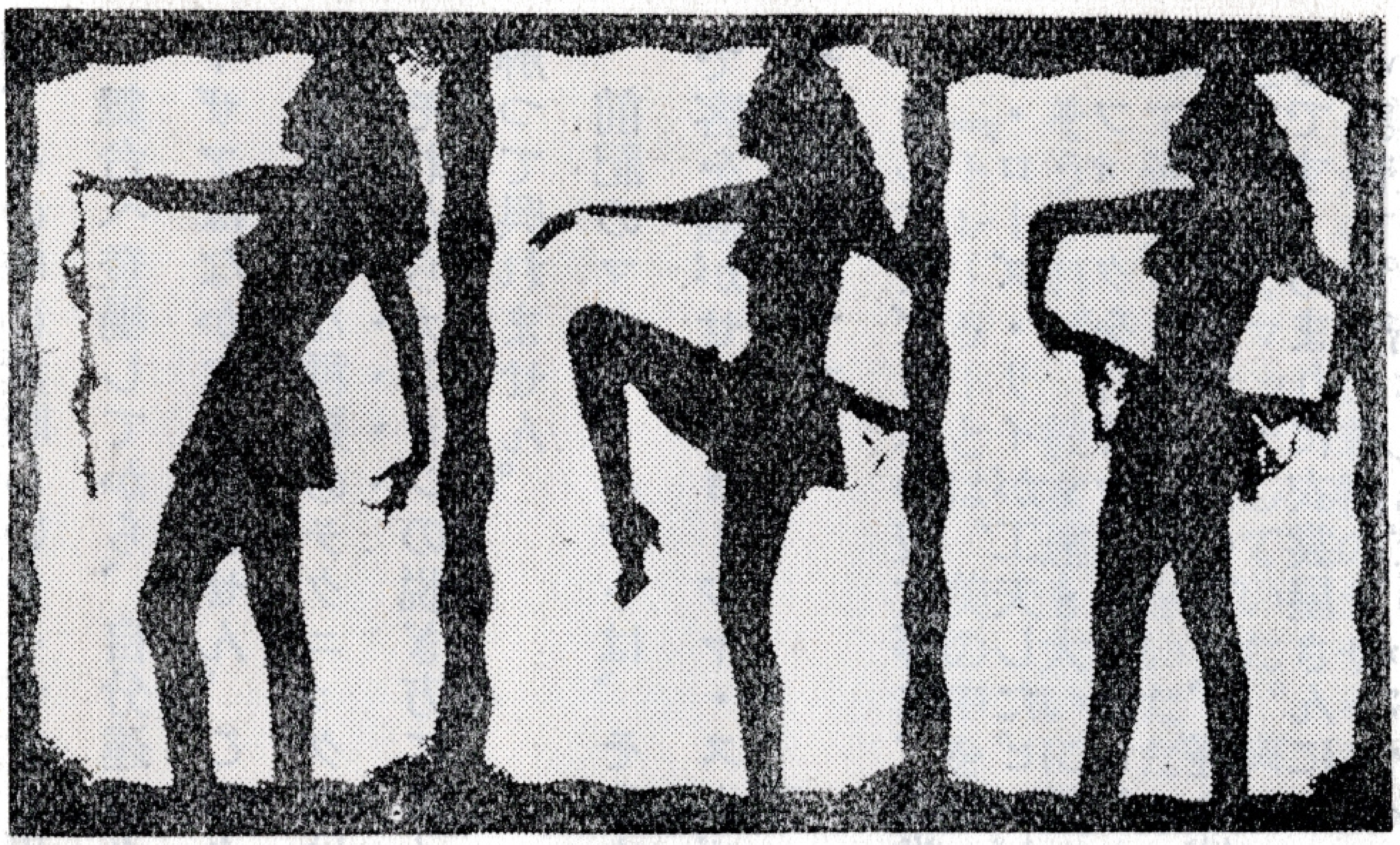
〝ストリップ・ティザア一人前〟

ストリップ・ティズも大分判りかけて来たようですが、ここらでもう一度、ストリップ・ティザアの一人前を御披露してみませう。

ストリップ・ティズは、ダンスではなく、むしろアクトであることは、お解りですね。

併も、そのアクトが極限された世界の事故、ティザアパアスナリティが一番モノを云ふアクトなのです。愛嬌と魅力、グッド・ユウモアが不足したティザア程哀れなものはありません。

スイートなのも、捕えどころのないヒョウタン・ナマズも、ワイルドなのも、熱情的なのも亦ダイナミックなのも全て捨てがたいが、その根底



ストリツプテー

をなす女のパースナリティに魅力がなくては全然いけません。いただくわけにはいきません。

歩き方。舞台の上の歩き方はティザアの性格を表す最初の併も決定的なテクニックであること、御存知の通りです。

そのトレーラアにもいろいろあり、如何にも歩いている感じのものから滑つて歩く様なステップ、廻転の巧さ等。

マギイ・ハアトといふ女はトレーラアの巧さで名を売つたティザアでした。彼女のトレーラアは、ノンシャランそのものといえましよう。

ドロテア・マインは、コケテイシユ。エヴリン・メイートヤは小さな女で、ソフィステイケートな歩きを売物にしていた。日本のティザアはまだまだほんの一年生で、なかなかそこまで参りません

が、その中に素晴しいテイザアも現れてくるでしょう。

舞台へ登場してから、自分達のタイムと云ふものの巧さを保持して、最後までゆけるテイザアはなかなか居ません。このタイミングといふものは一種のセンスで、なかなか教えても解る様な種類のテクニックではないのです。

それからカンジンの脱ぎ方にスイートとホットの二つがあるのですが、これもなかなか解つて呉れません。

前記のマギイ・ハアトは、そのカンペキを誇るトレーラアと脱ぎ方のスイートな美しさで客を騒がせ、ジョージヤ・スーザンは、むしりとる様にホットな脱ぎ方で、客の胆(きも)を冷やしたものです。

そしてまだ日本の彼女等は、衣裳に対する研究が全然なつとらん、と云えます。ジプシイ・ローズ・リイが工夫したピンだけで止めた衣裳の落ち方も美事なものでした。

フォックを甘くヤスリで落したり、指や手を使はずに、唯の呼吸の力だけで、プッと落したり、その落し方の重さ、軽さ等、音楽の力やムードで、いろいろと工夫されて然る可きです。あまりに衣裳屋さんにマカセきりで、結局自分の衣裳にならず終つて了ふ事が多い様です。皆さんもどうかバァレスクの娯しさの中に、女の裸のみに重点をおかずそうし

た幾多のバァレスク・アートの中のテクニックに喝采をおくつてやつて戴きたい。
今週の彼女の着物のデザインは良かつた。脱ぎ方が粋だつた。トレーラアがその衣裳にとてもよくマッチしていた。声のたて方が悩ましかつた。音楽が気に入つた、と細部に渡つて通人らしい御観賞をいただきたい。
そうすれば、彼女達も大いに張切つて、いろいろとこれ工夫務めるに異いありません。
『トレーラーとは、美の中を歩く、夜の様なものだ。』（二五・五）

〝バァレスク不振とその原因〟

今日、日本のストリップ・ティーズもほぼ限界え来た感じだ。それは観客が一番良く知つている筈だし、僕達当事者もいち早く感知している。その原因は幾つか数えられるが、要はつまらなくなつたからに他ならない。

女にも魅力がなくなつたし、舞台にも面白味がなくなつたのだと断言するより言葉がない。では、日本にバァレスク劇場という種類の見世物小屋は存在の可能性がなくなつたのかと言ふとそうではない。バァレスク小屋に盛る演し物の種類の変更と、面目を一新する様なアトラクテイヴなものを上演する事に依つて、充分魅力はつなげると確信している。

バァレスクなんて碌な場所ぢやないと言つたり思つたりしていても、これに等しい見世物は何時の時代にも跡を絶たなかつた。舞台が無ければ懸小屋で、小屋が無ければ野天で、街頭で或は酒場の中で、何処ででも簡単で気軽に、バァレスク的見世物は民衆の喝采を拍すことが出来得た。庶民の心の中にバァレスク的アンチームさと、あのどぎつい馬鹿らしさは誰れにでも娯しめる一つの形式として永遠性のあるものである事は確かだ。だか

らバァレスク小屋も目立たない裏町や屋根裏の中に、何時も存在し民衆の心を明るく軽くし、オヘソの皮をヨらせる為にある事が本来の姿だ。それが戦後、裸といふ見世物が大きく浮き上つて来て、裸だけが見世物の全部の如くなつて了い、それを余り早く全部見せて了つた為に、ケツの穴まで見せない事には見せるものが失くなつて了つた様な現状だ。唯の脚や裸を見世物にするのでなく、ややストリップ・ティーズらしいアクトを見せるヒロセ元美が現れて、一つのジャンルを示したが、今日の人はいくらヒロセが巧みに扇を使つて股を隠して見せたところで、サリイ・ランドにはなれない。巧いとは思つても早やそれだけのものにしか過ぎない。次々と新しいアイデアでもない限り先は知れている。唯、彼女がトップダンサーであるといふ事に動きはなくても、観客はそんな事はどうでもいいのだ。ジプシイ・ローズ・リイの近況を思い、つくづくその感が深い。それより下手でもドキンとさせるものを見せて呉れる処へ飛びつくのだ。それがバァレスクといふものであり、そこのお客様と名の付くものなのだ。

バァレスク・プロデューサーの商魂もひとえにそこにあるのだ。ストリップ・ティーズはアメリカのバァレスクでも最重要なナムバーではあるが、これだけでバァレスクが成立つと思つたら大間違いだ。スケッチのアイデアの新奇さと歌の面白さ痛快さは、如何にも

流行の尖端を諷刺する。芸にまで高められたアクトの小気味よさ等で人気を湧かすのだ。つまり日本のバァレスク・プロデューサーが一番心外なのは、芸といふものを持たない演技者と、踊りの出来ない踊り子と、ストリップ・アクトの出来ないティザアを素材にして何か新しい事をしなければならない現状なのだ。女は唯、ヘソを出します、オッパイを出します、そのオッパイは大きいです、と云ふだけではつまらない。

ここにバァレスク不振の一番大きな本質的問題がある。日本にもヒロセ元美が五人、メリー松原が十人位居て、エノケンの様なコメディアンと淡谷のり子や笠置位のパアスナリテイのあるバァレスク歌手が居たら必ず面白い舞台を見せる事が出来得るのだが、それは決して贅沢でも何でもない。まアそれ位の演技者が演技者と言えるのだ。僕は何時もエノケンの芝居に色気があつたら不滅のものだと思ふんだけど。（ボビイ・クラークのセックス・コメディを思ひ出し乍ら確信をもつてそう考える）エノケンが数十人の美女に取り囲まれ歌い踊り、バァレスク・ギャグをふんだんに振りまいて生々と演技したら、何も東京の劇場が片つ端から映画館になつてゆく事もあるまいに。有楽座や帝劇は、バァレスク的見世物を上演しては、いけない規則も歴史もありはしない。ピュリッツア賞に輝く南太平洋はマジエスティクで上演されているし、主演のメリー・マーティンは生粋のレヴュウ・ガ

ールだ。ハッピイ・タイムはプリムスで、ロンドン・ニューヨークを股に懸けモースト・エレガン、ソング&ダンスガールと言はれている僕の大好きなガートルード・ローレンスはノエルカワードも言つてる様に最もバァレスク的ソフイステイケーションを身につけた女だ。バァレスク的空気と云ふものは、歌にしろ踊りにしろ一番層の広い民衆のハートに直接理屈抜きで共感を与える種類のものだ。勿論芸術すらこれの高められたものに他ならない。人間生活の夢と現実と、空想と、慾望の入り交つた原始的な気取らない直感的なアクトがバァレスク的見世物と言えるのだろう。現在アメリカのミュージカル・コメディがこれの最も洗練されたものであり、ビリー・ローズのショウ・ビジネスもこれに入り、バァレスク的要素を非常に深く根にもつ、近代綜合の舞台芸術の粋である。

再び日本のバァレスクえ戻つて、現在の不振とあきられた原因を結論的に言えば、もつと豊かな演技力を綜合して、一瞬々々の演技に生彩を与え先づ面白くさせる事を先決問題とし、女も己れの美しさを再反省し、彼女らしい（といふ点が大切だが）芸を身に付ける事だ。とに角、全体にわたつての未熟さがあきられる最大の原因だと僕は結論する。

（二五・八）

〝ドラマチック・ストリップ〟

ドラマティック・ストリップ・ティーズとは、大変無理なタイトルの様でもあるが、一寸他に適当な言葉が見当らず、又一番簡単にズバリと云いたいものにふれている様でもあるので、あえてそう云ふ事にした。これも日本といふ理屈ッぽい座り心地を問題にしてかかるクセの故だろう。

さて僕は度々ストリップ・ティーズとは、ダンスではなくアクトであると云い続けて来た。

何かいい衣裳とストリップのアイデアをもつ一曲も悪くはないが、それではなかなか演技力と云ふものは向上しない。やっぱり見世物として大きなスタイルをもち、相当な時間をストリップ・テイザアが主役で見せる舞台は出来ないものだろうかと、かねがね考えて来た。大変危険なものでもあり、それ程、演技力をもつ踊子は沢山居ない事を承知で、あえて、そんなものに手をつけたのも作者の野心と、又やる踊子にしてみれば張切れるシロモノであるからに他ならない。

先週の〃雨ぞ降る〃と〃牡丹燈記〃はバァレスク劇場としては、廿日間八十回といふ長期公演であり乍ら最後迄客足がおとろえなかつた。まだ一週間位ゆけると思い続演を考えたがヒロセの都合で打切る事にした。この好調は決してヒロセと松原だけの組合せの問題ではなく、彼女達がああした新しい境地えぶつつかつて行く真険さに興味をもたれたものと思はれる。現在日本で支那的濃艶を描ける女はヒロセ以外にない。僕は前々からヒロセの為に牡丹燈記を考えていた。松原はまだまだ演技力が不足で遠しの感が深い。元来彼女は素質としても踊子なんだが、併しこれも彼女としては一生懸命であり、あの雨や舞台の良き道具立てが助けてくれ、大した破調もなく音楽の効果もまあまあだつた。

こうして上演された舞台を通して彼女等を批判してみると、彼女等の生命線である可き目や肩や腰にスキが沢山あるといふ事だ。目の使ひ方にしてもあまりに曲が無さ過ぎる。誘ひの目を男に投げ懸けておいたクセに、見返えされたらソッとはずす心持ち、充分に男に自分の美しさを見させておいて頃合ひを見計い、今度はぢつと強く見返す。男が逃げても今度は決して離さんぞといふ様にぢつといつまでも見続ける。こうした二人の目と目がからみ合つて心がだんだんとけて来る。そんなはつきりした心理すら表現出来ない。稽古の時も注意し教えてみたが、つまり女としてのそうした技巧がまだまだ身について居ない

のだ。だから解つた様でも舞台え立てばキリの様にうすれて了ふ。肩から首すじのひねつた媚態、すぐ内側に乳房から胸え続く肉体の条件すら活用しようとしない。それから腰だが腰の生かし方が巧妙だつたらもつともつと女の魅力は好色をそそる原動力になる。古今東西を問はずこの女の腰に歴史は明け暮れたと云つても過言ではない。尻ががつちりと厚く盛上り併も柔かい肉を想像させ、その上、何となく無防備を思はせる様なのが最も技巧的な女の腰だ。観客の目を或ひは相手の男の目を自分の腰え引きつけられるかどうかによつて、色気はきまると云える。卑俗な言葉で男のモノをなぜる様に踊れるとも云ふ様に…。

あんまり型が良すぎて、しつかり者らしい感じを与えるのはうまくない。何となくダラリとポテポテした様な、すぐ明きそうな、くずれた気持を男に与えるのを無類な腰として僕は推す。口説きの感じにしても身体で男をとらえて了うのが一番だし、口での口説きはあまり感心しない女の部類に属する。それからもう一つ僕がヒロセに期待したのは歩き方だ。成程トレーラアは巧い。併し今度の場合、もつともつと歩き方を工夫してもらひ度かつた。例へば支那に蓮歩といふ表現があるが、力の入らないおせば倒れそうな楚々としたなよやかな歩みを慾しかつた。僕は梅蘭芳の歩みに、この蓮歩という言葉をいつも思ひ出して実にいい色つぽい歩みだと感心していた。ヒロセならこの歩みは理解出来る筈なんだが

――。彼女等が演技的に早く成長してゆけば芝居の新しい魅力になる事はうけあいだ。他の女優達には求められない肉体的好条件を具えているのだ。例えばアラビアン・ナイトをエノケンやロッパでやるとする。相手の女にヒロセを起用出来たら舞台に、むんむんする様なエロテイシズムが漂い本物になる。踊子や女がおへそも出さずドラム缶の様なヅロース（パンツという様なものとは凡そ遠い）をはき、平べつたい胸にブラジャアをして登場したんぢや芝居にはならない。園はるみ位の肉体の踊子を廿人もならばせ、良い音楽とデコールで粉飾したらと、どうして興行者は想像しないのだろう。もうかる仕事が山程有るのに外国映画に城を明渡す事しか知らないショウビジネスの当時者ばかりだ。日本の観客はそれだけ不幸とも云える。芸術的にも大胆さが足りず興行的にも儲けることを知らない。もつとアッという様な事を次々と考えるプロデューサーは出現しないものだろうか。ビリイローズが来朝した時、あれ程大騒ぎをしたのに彼の宣伝だけに止つて、氏のブロウドウエイで企画するプレゼンテーションの大きさと奇抜さを理解して一つ俺もという様な男が一人位出ても良さそうだけど、政界のボスみたいな男が興行界に一人もいないという事は良かれ、悪しかれ僕等にしてみると淋しい限りだ。話が横道にそれたが、今度もやれというので、伊吹と園の二人に二つを用意した。ユーモリスティックなのと、パッショネ

ートなのと………。これもどこまでやれるか大きな疑問だ。

でも毎回何か新しいものから新しいものへ行こうとする商売気はいい。（二五・九）

〝日本バァレスクの一年回顧の弁〟

思えば昨秋〝女の宮殿〟を上演してから早や一年になる。劇場側当時者の熱意に支えられて、僕も今度の〝女のパクパク〟まで約廿本近い本を書き演出を担当してきた。唯、日本に本当の意味のバァレスクの誕生を目ざして驀地に、他の仕事は手もつけず只管日小バァレスクの為にのみ生きて来たとも云える。廿本と一口に云ふが一回も休まず、絶えず新しいものを提供するのは容易な事ではなかつた。

それには、美術の牧敬、音楽の赤星建彦、振付の高岡繁夫、大村重高、その他照明、装置、衣裳、効果に至るまで、全スタッフがあげて協力して呉れた事は云ふまでもない。その間、劇場支配人の浜田君、一色君の献身的な、企画に対する支持と殆んど何の駄目すら出さず「自分達はバァレスクは知らないんだから」と全面的に僕に任せて呉れた寛容さが、僕の製作力を自由にさせ大胆にいろいろな試みも出来た訳だ。ショウ・ビジネス程、一つの目的に多くの心と手が暖く強く結ばれる事を要求するビジネスはない。

そしてそれも一回や二回で作者の意図や企画が力を発揮するものでない事も御承知の通

りだ。相当に永い目で見てもらわねば、スタッフの作品らしい作品も御目見得出来にくいものだ。アメリカ辺りの様に一つの作品を上演するのに、例へば、それが小さなバァレスクであろうとも、稽古と企画に非常に長い時間を使ふ事が出来れば知らず、日本では殆ど不可能な事だ。一年前と現在の作品を比較して頂ければ直ぐ御了解願えると思ふ。

踊子は自分が何時何処で誰れが作つたダンスやら衣裳やら見当もつかない代物をもつて舞台稽古にやつて来、ひどいのは初日の舞台に飛込んで来て音楽も誰れのアレンジか、編成もいいかげんな符面を持つて来て小節とテンポだけを注文してケロリとすまし、そうしたナムバアを羅列しただけで時間をうめ、全体の構成もクソもあつたものではなかつた。それが現在では、幕明きからフィナーレに致るまで一曲として作者の神経のとどかないものは無くなつた。その最近の例に〃ポポ・レディ〃のフィナーレに、ヒロセ元美がブルーの色の自前の衣裳で踊つた事があつた。併しそのブルーの色がどうしてもデコールに一枚だけが溶け込もず、新しく染めるのに苦心した事もあつた。

とにかくバァレスクといふ見世物が日本では非常に新しいジャンルである為、内外共に苦心の連続であつた。その間、警視庁に連行され、ワイセツの名目で取調べを受けたこともあつた。僕は劇場の当事者に代つて説明したり、バァレスクの在方に就いて又今後の方

向に就いて、或は芸人や踊子の訓練に就いてトレーラアや、ヴァンプ、グラインド等と云ふバァレスク・アクトのA・B・Cに致るまで手を取つて指導してきた。誰れ一人そうした技術を適確に知つている振付者も居なかつた。

昨日アメリカのロッキイ・マウンテン・マガジンの記者が僕を訪れ寄稿の為の面接をした。その時に彼が東京中の舞台を観、又、明後日大阪迄行くんだそうだが、日小の舞台を非常にほめて呉れた。そして是非この記事を本国へ送りたいからとステールの注文やらいろいろな質問がなされた。先ず彼が一番驚いたのはガールス達の年令が非常に若く大した経歴や訓練ももたず舞台に立ち、あれだけの見世物が見られる事だと云つた。女達の堀出しやバァレスクらしいツボに、はめ込む身体の表情の苦心等は、はつきり他の舞台のガールスと異つた目で観察されて呉れた事は嬉しかつた。

僕も一年間の苦心が報られた様な気がした。又所謂、日小の御常連のファンからも熱心な注意や声援が絶えずおくられている。この際心から御礼を申上げておく。特にジョーク、アンカワード氏にはいつか覆面を脱いで僕の前へ現れて慾しい人の一人だ。

バァレスクは女が若く美しくなければならない。舞台も衣裳も色彩が鮮烈で良きアイデアに化粧されて居らねばならない。音楽の演奏も然り。その全体から娯しい笑ひとエロス

と女体のスリルが桃色に漂わなければいけない。作者は女を美しく見せる為、世の男性が夢見る姿態のアラベスクをつくりあげなければならない。今後、益々バァレスク劇場の任務は重く未だ未だ発展の余地も青空も開らけている。全員が技術の向上をめざしオトナになるセンスを身につけ、見る方もやる方も面はゆい様な芸でない本当の商売になる芸をつくり、立派な商品価値ある見世物をつくる様努力する事だ。僕もプロモータアのつもりで献身を誓ひ、皆さんの御声援をお願ひして一年回顧の筆の結びとしよう。（二五・十）

〝新しいショウ〟

遂に僕の夢みるバァレスク・ショウの一大サンプルが完成した。これは一年の経験と試みと野心の果てに実つた果実の様なものだ。

劇場の地理的な条件、観客層の趣好の線、ビジネスとしての経済的な面に於ける限度、舞台や芸人の環境や条件、それにもう一つバァレスクといふものえの世の批判。これは当事者の不見識から出た身のサビではあるが、これへの是正には一番骨を折つた。こつちで慾しい芸人はバァレスクを軽蔑して出ようとしない。新人が新しいジャンルに身を打ち込むチャンスはない。ストリップ・ティーズを「裸踊り」は不潔だといふのみではいい踊子や演技者は現れない。劇場へ来る踊子をみているとおヘソを出せば余計金になるといふ理由だけが断然多く、信念も自信もないのが多い。それに全ストと称して酒席等で裸になりミセて金を取る職業がほとんどバァレスクの踊子なんだそうだから恐れ入る。そうした踊子の集団が劇場で、紳士の近づく場所ではない様に云はれる原因らしい。真面目な踊子達には可愛そうだが新聞ダネになるのが皆んな彼女達なのだそうだ。成程バァレスクはお上

品な処でも貴族趣味の隠居所でもない。たしかに紳士諸君のお忍びの行楽場所ではある。併しそれが何だと云ふのだ。女郎屋でも待合でもない。立派に何時間かの見世物を御覧に入れて、金を取り、税金を払つている公衆の娯楽場だ、大手を振つて見てもらい度い。現在上演しているショウを見て出た処を友人に見つかり恥しいと思ふ男が居るだろうか、恥しいものを見たと後悔する人が何人いるだろう。我田引水ではないが、ニヤリと笑つてホクソエム殿方が大方であろうと察する。女を見るのが生来御キライな方はいざ知らず、マトモな男が腹を立てる筈はない。そんなのは不正直者か女子供だけであろう。処が女や子供は先刻御承知でバァレスクえはお出にならない。今度のパクパク事件(言葉とレスリングの役者の行き過ぎ事件)に就いて、僕も一応の見解をのべるのが義務の様なのでここに一寸書く。例えばパクパクとかポポと云ふ新造語が、ある種の事を連想させドキッ過ぎるといふ意見らしいが、僕は愛嬌があり憎めないバァレスクらしい題名だと思ふが如何?映画や新聞小説の題名では困るがバァレスクと云ふ特種な場所なら許せるんではないかしらと考えるのは僕の弁解だろうか。勿論こんな名前や広告看板を表え堂々と出さないですむビジネスである事の方を望むのは当り前だ。あえてそんな宣伝文句に気を使はずやつてゆけるのが嬉しいのだが、種々な方法で客を引かねばやつて行けない立場を尊重して僕も賛

成してきた。だから僕は中身で、看板につられて入つたか、支払つた金が高いと思ふか満足してもらえるか、それだけにお答えしようと考えてきた。レスリングの件は役者の受けようとする考えは愛するが、（悪いことではない）受け方に愛嬌とテが無さ過ぎた。誰だつて女の股へ顔を突込んでお客様の方を向きオカシナ顔をすれば笑ふに異ひない。併しそれは芸ではない。洗練といふ事が今の役者に一番大切だと云つて四五日前に話したばかりだつたのに、注意されて了つたのは如何にも残念だつた。とにかく芸にスマートな暗示のセンスが不足だ。トコトン迄云つたり、やつて了はないと表現が出来ないらしい。芸の未熟さだ。いづれにしろバァレスクと云ふジャンルの過度期に於けるおかしやすい過失である。

フォリイ・ベルジェールをフォリイ・ブラジャア位のシャレでいける日は何時の事か。さて今度のファストアニイバァサリイとも云ふ可き興行には小手先きの細工は出来るだけ捨て、堂々と組んで「女のショウ」を作る計画をした。或は人により派出過ぎて、ピンとこないかも知れない。うす暗い照明の中で、うらぶれたニヒルのどうにもやり場のない様な空気を好む人には明る過ぎるだろう。そしてこれはこつそり趣味のバァレスクとしては本流ではない。むしろ巴里のタバランとかフォリイ・ベルジェールの様なレヴュウのやや

小型で、それにちよつぴりバァレスクの雰囲気をもたせた独得のショウだ。僕がこうしたものを計画したのは一週年のお祭りをかねて日本ではかつて一度も見られなかつたスタイルのショウを作つて大方の批判をあおぎ度かつたのだ。大人の見世物が少な過ぎる。これはバァレスクとしてはやや品が良く、アメリカ辺りのミュージカル物に比べると行儀が悪いシロモノだ。併し今後こういふ見世物は再び日本で生れるかどうか判らない。是非見て御意見を伺い度い。日小バァレスクとしては良くも悪くも一大飛躍だ。これにもつといい芸人が沢山参加したらはるかに見答えある新しい形式のショウになるんだが、残念乍ら未だ日本の芸人はそこ迄いつていない。僕は野心を捨てない。いつか空想するショウ・ビジネスの成功を確信をもつて成し遂げて御覧に入れるつもりだ。　（二五・十）

〝新年を迎えて〟

皆さん新年お目出度う御座います。

一九五一年を迎へここに日小バァレスクも第二年に突入しました。

いよいよ困難な段階に来ましたが、僕としましては又僕らしいアイディァが無くもありません。

とにかく今までの芸人や踊子の技術だけでは、何としてもやってゆけません。そこで僕は既成スタァの再教育と、未開の花を見出し養成する事の二つに全力を挙げて当って見るつもりです。

先ず毎日楽屋入りを一時間早めて、スター達にはトレーラァから始めて、出来得る最高のアクト迄一年を目ざして教育を仕直す予定ですがこれに何処まで皆んながついて来てくれるかに問題は残つて居ります。併しそんな事は僕の現在の信念からすれば何でもないことと安心しきつて居ります。皆んなもそれ以外に向上の道はないことは解りかけてきている様ですから。

さて、それから新星を続々登場させ舞台に新鮮な魅力を注入する事です。これにはやっぱり劇場付属の学校というか、研究所というか、組織的な教育機関が是非必要です。美人劇場であることが、最後の決定的の問題でせうが、先ず洗練と教育された女で舞台をうめる事が一年のホープでありませう。先づ、はなせて歌える女優をつくらねばなりません。オシの様な踊子ばかりでは血の通つた人間味にとぼしく、冷くて駄目です。もつともつと舞台にいろいろな声を生きた男や女の声を利用してみましよう。〃声もなき無言の表情〃が最後の到達点であつて、そこへ行く迄には、いろいろな声の表情がある筈です。音楽的な訓練と演劇的な訓練の二つがどうしても必要で、すでに心中指導者の顔ぶれも決定している状態です。訓練された声の効果が出るのは半年先きのことになるでせうが、僕はここに先鞭をつけ様と思つている次第です。そして観客の側でもいろいろと向上の為には協力をおしまず尽して呉れねば、目的は達せられるものではなく向上と云ふことも徒らに高きを求める意ではなく、そろぞろの状況に徹して深くなる事なのです。それには前に云ひました様に、僕としましても、心を入れて訓練致します故、彼女等の女としての向上の為に助言をしてやつて戴き度いと思ひます。

助言とは、幼稚なものから表現技術の裏付けになる様な生活意識と、芸道の探求心をあ

ふり立てる事であつて、見事な身体だけに拍手を送るだけでなく、その身体の舞台的な生活力（躍動する生命力の片鱗みたいなもの）芸術とは申しませんが、そんな雰囲気が作れる様な女になる様な舞台と企画の為にも是非拍手をしてやつて戴き度いと思ひます。それには種々と彼女等のニュアンスや持ち味だけに頼る事無く、どうしても一度や二度は飛んでもないと思える様な方向にまで突き放してやり、何かつかましてやる事です。甘えさせる事だけではどうも面白くありません。もつともつと叱らなければ駄目です。

どうか皆んなを叱つてやつて下さい。

一年間に、園（その）はるみにしてもフリーダ松木にしても島崎魔子にしてもやつと一人前になりかけて来たのです。今後の一年間が彼女等の芸のみがき年でなければならないと僕は思ふのです。

たしかに彼女等は熱心です。

併しそれと共に忙しすぎます。もつと落付のある生活をすべきであつて、自分の芸なり人の芸に見入る様な時を、反省と兼虚な気持をもつと、もつ可きで、あまりにも現在の女はウロチョロしすぎている傾向が多分にあります。先ずキャバレーやバアの出演内職を放棄すべきであつてそんな事はコーラスガールの仕事で、休養と芸道の練磨だけに劇場へ全

精力を集中させる踊子が来る可き年の新しい本当の意味のスターになるのでせう。キャバレーやバーのスター達は劇場から転落して行くでせう。そんな両道をかけられるものではありません。

千円や千五百円の金の為に自分の芸を荒ませている可愛そうな踊子達よ、劇場のお客様方の為にもつと真剣に自分達の生きる道を劇場と心得える人だけには、せめて舞台の芸の修養の為に、もつと落着いた思考の時と、きびしい訓練の時をもちませう。一人でも二人でも、僕はそんな人の出現を心待ちにして、娯しいエンタアテイメントの創造の為に協力しませう。（二六・一）

〝猥褻放談〟

バァレスクといふ場所の特種性を考慮に入れても、一応エロティシズムと猥褻の限界をはつきり再検討する時が来た様だ。

始めから猥褻を意図するものは先ずないものと仮定して「猥褻なり」とハンコを押されるのは、表現の不適当と技術の洗練が不足している事に原因する様に思はれる。ちよつとしたやり過ぎとか、下司な表現方法とか、まことにつまらん事でオチて了ふ様だ男女の愛の表現を一つのスタイルに完成したものに古典バレエの二重踊（パ・ド・デュ）がある。むせる様なパセティックなアダヂオの美しさがある。これを人はエロティックとも勿論、猥褻とも考へない。内容は接吻と抱擁の一つのスタイリゼーションにほかならない。そうすると様式化された衣裳（バレエ・コスチューム）で寸分の狂ひもない線のアラベスクで醸し出される愛や戯れの表現は、何の情感も肉感も伴はないものかと云えば決してそうではなく、表現の高さと詩情が鮮烈で、そのきびしさが身近いリアリテを感ぜしめないからだ。つまり完成されたものから発散する冷たさなのだ。冷徹のきびしさがしばしば人間の血

液の暖さを忘れしめるのだ。

こうしたジャンルと正反対に立つショウや、バァレスク・アクトに於ては、表現意図にはるかに具体的な近親感を要求する。そこに危険さが生れる。そこで僕は一つの問題を提議する。

ずばりと云へば、非常に生のままの素材を生のママころがし出す方法から何かをおいて遮るか、それでは力が弱いと云ふなら、それはそれで見せておいて、陽気な馬鹿笑ひで忘れさせる事だ。

デカメロン、新百話、パンタグリュエル、フオンテーヌのコント、或はブラントームやバルザック、ポッジヨ、カザノヴァのもの等色話の諧謔や皮肉を読んでみても、猥雑なところも確かにあるが決していやらしいとも、猥褻とも感じられない。むしろ明けつぱなしな大笑ひには快いものさへある。間違ひのおかしさや、人間のずるさ、女の浅はかな智恵、そこにはいわゆる不道徳さも不倫さもある。併し決して不快な事も腹立たしさもない。野放図で小気味よく好色艶治な女ばなしは哄笑に吹きとばされ健康そのものである。

「おかしみ」が何より楽しく風流でさへある。

バァレスクの好色性を何とかして風流の域にまでもつてゆければ何事もないのだが、そ

れには洗練とユーモアと美しさが要求される。その美しさが現在何より不足している要素だ。談猥もする人によつて猥でもあるし気が利いてもみえる。安女郎やアンチャン達のボキャブラリイから流れ出す言葉やアヤでは猥談にもならぬ。全部云はずにハハーンと納得させるところに、口にしがたい言葉を口にする時の条件がある。暗示とか裏の裏の言葉や例へ見たり聞いたりするお客様の方でも、見るカンをもつと働かして呉れたら多少やる側も楽になるだろうと考へる。

「そんな面倒くさい見世物は真平だ、裸は裸、エロはエロ、ずばりとやりねえ！」

と云はれてやつて来たのが今迄のバァレスクの在り方だつた様だ。

併し多少は変つて来ている様だ。何ボ面白い要素を求めている様にも見受けられる。

その面白さを大いに研究しなければならないと思ふ。とにかくニラマレない様なワクの中で仕遂げなければならんのだから………。

ストリップ・ティーズやダンスの場合は割合ひに簡単だ。出していけないものはきまつているし、グラインドやヴァンプ（腰の動かし方）も時間的に制限出来る。

フラッシュ（脱ぐこと）も何秒と指定出来る。

照明も裸には何色とはつきり云へる。

それらのリミットも結局は、観客の気持に必迫感を与えない為だ。直接的な興奮を感ぜしめない為だ。ではそう要求するものを片つ端からいぢめて取り去つて了つては何もなくなつて了ふぢやないかとの危惧も生れるだろうが、大丈夫御安心下さい。見世物には見世物の面白さと魅力があり、女を中心とする愉快な見世物を作ればよい。結論すれば作品らしい作品にする事だ。女の肉体、それ自体がすでにまことに目出度いミセモノなんだから、それを素材として、猥褻でない女の見世物も、もう少し洗つてすつきりさせれば必ず出来るだろうと思ふ。

どうしても僕は写実な色事でない「おかしさ」だけがこの危期を救つて呉れる大切な要素だと思ふ。腹の立たない好色艶治な色ばなしを洗練された技術で愉快に表現し、女のヌードの美しさが何もかも圧倒して了ふ様な力さえあれば、わが日本のバァレスクも万々才なのだが。　（二六・四）

〃PEEP SHOW〃

今度出発するピープ・ショウの解説を一言―。ピープ・ショウとは〃覗きからくり〃のいはれで、ずいぶん前から日本にもあり、僕達子供の頃よく街で覗いたものだ。今の紙芝居と同じ様にアメを呉れたりして、覗かせ楽入りのものもあつた、オルゴールの仕懸けやチクオンキの伴奏もあり辻の人気者だつた。

大げさなのは宝塚の場内と呼ばれる大劇場の入口の一廊に無数のピープ・ショウがあり、歌劇の開演前や幕間にこれを覗く大人や子供の群がガチャンブウブウと騒がしく、一銭玉を握つてひしめく様は珍しい、一寸ハイカラな見物だつた。中身は拡大鏡を通して見るペーパア・ストリッピングと風景画が主だつたが、ピープ・ショウの面白味は、何と云つてもペーパア・ストリッピングにあつた。

先ず銭を入れてピープ・ホールに目を当て、右手でハンドルを廻すと絵が一枚一枚まくれる仕懸けになつて居り、豊満なフランス美人がにつこりと笑つて立ち、着物を順々に脱ぐ様に絵が一コマ落しに描かれている。

PEEP SHOW

ブラウスを取りスカートを脱ぎ髪や肩へ手をやり、ウィンクをし今度は物思はせぶりにシュミーズを脱ぐ、大きなオッパイが露出するところで最後。この最後の一枚を止め様としても余勢をかつてパタンと落ち、惜しや暗くなつて了ふ。又一銭玉を入れて、今度はヨリ慎重に見る可き処は止めて眺めるつもりでも、途中はいくらかゆつくり廻しても、どうしても最後の一枚を止める事は出来ない様になつていた。チェッと舌打ちをして又別のピープ・ホールを覗く。

アメリカのブロウドウエイ四十二丁目の地下にもこれがあり、夜中でも一ぱい人がたかつていた。

これはバァレスクのストリッピングを紙でやる思いつきで仲々に楽しい覗きであつた。こうした覗きからくりが本来のピープショウであるが、ピープ（覗く）といふ言葉から来る秘密感は、スリルのあるもので、ピーパアとは、覗き見する者の意だが、探偵とかスパイの眼をもさして云ふ。そつと、と云ふひそやかな気持が深くふくまれている言葉で唯の見るではなくそつと覗くといふ方に深い独自な響きをもつ言葉だ。

それでバァレスクの事をピープ・ショウと云ふ人も居る位だ。特にこれは、我日本で当てはまる言葉じやないかしらん。見世物談義の上から云へば、バァレスクはピープ・ショ

ウなんかと一緒にされては困る。とにかく一応ショウなんだと云ひ度い処だが、今アメリカでマイケル・トッドがプロジュースしているピープ・ショウは如何にも人を食つた感じがする、バァレスクよりはるかに高いミュウジカルであり乍ら、そのセンスがバァレスク的である故だろうが、非常に下からピープ・ショウで御座いといつた処に、皮肉が感じられ喝采の原因もある様だ。勿論ショウ自体がいい加減のものでなくマイケル・トッドと云えば、タップダンスの王様と呼ばれた黒人のビル・ロビンソンを主役に、オペラ「ミカド」をホット・ミカドと称して新演出をやり、商才をみとめられた男。お芝居はセックス・コメディの創始者ボビー・クラークが担当し、美術は僕の大好きなアイリーン・シャラフ女史、堂々たるスタッフだ。その他バァレスク出の歌手やら美人踊子が沢山出演している。

朋友、牧敬が最近手に入れたプログラム・スーヴニールも仲々しやれたもので、金の表紙の一部が切つてあつてそこに裸の女の写真が見え、鍵と音符をあしらつた如何にもレヴュウのプロらしいものだ。話やら新聞雑誌で見ると大評判の大当りらしいが、うらやましい限りだ。ブロウドウエイ・バァレスクの黄金版だと思えば間違いない。センサアに引つ懸つて一部カットした場面もあるそうだが、何処の国も同じだ。これは、あちらのピープ・ショウ現代版の話。

こちらでも僕が、今度ピープ・ショウと銘打つて日本バァレスク・ショウに徹底しようと思ふ。これはお客様の「こつそり覗き見のお楽しみ」に答えて名付けたものとお考へ願い度いとは云つても格別秘密を企むものでもなく、覗きと云ふと如何にもスリルがあるがショウの方にスリルのあるものを提与したいと念願している次第だ。

フランス国の覗きは、皆さんも御存知の男女の寝台遊戯を別室から覗くのが、代表的ピープ・ショウ。覗かれる方は知らずに自分達の淋しい懐中から、愛の戦場費を支払はされ、それを又別に覗かして金をとると云ふエゲツナイ商売を思いついたフランス商魂は、見上げたものである。大がいの者なら商売人に金を払い実演といふ見世物を演じてもらい、それを覗かせ金を取るといふのが普通だろうに――――。

いづれにしてもピープ・ショウは、覗き、からくりのいはれで日本のバァレスクにも通じ、ストリッピングと多分の愛すべきインチキ性を都会風に娯む場所に変りはない。お娯しみ願ひ度い。（二六・五）

マイケル・トッドは、今日トッドAOの発案創始者でエリザベステーラーの旦那様で世界的な、大プロデューサーであることは御存知でせうがその昔ジプシー・ローズ・リーの

若き燕であり彼女に依つて、彼のショウビジネスの才能が堀り当てられた昔話を御存知の方は少いと思ふので一寸付記しておく。

〝グッド・ニュース〟

日本のバァレスクは行きづまつたとか何とか云われ乍らも、四十日間百六十回のロングランをうち客足も落ちないのは僕の云う通り大人の見世物として適当なものがないのと、女を主体とする娯楽であるからだ。

女の世界痴図のロングランで、益々その自説をゆるぎないものにした。劇場の不備から夏場の不入りをバァレスク凋落の兆とする説には僕はいつも反対して来た。劇場は道場でも教室でもない。全くサービスの夏涼しく、冬暖かな椅子の上で面白く楽しく、なお美しいものをエンジョイする処だ。あの蒸風呂の様な中で汗臭い女の肌等は、いくら好きだつて辛棒出来るものではない。僕でも真平御免だ。

折ある毎に理想に近い劇場で思う様なショウを御覧に入れ度いとこぼしたり書いたりしてきた。併し僕は資本家でもなく小屋主でもなし、その上そうした人達を説得して思う様なものを上演し、話題をつくり出す様な事もまことに下手だ。日小バァレスクの看板をあげてから丸二年、僅か三回、人にバトンを渡した儘、日小だけでその間約三十数本の作品

を上演し続け、微力乍らもバァレスク・ショウのスタイルと、ストリップティズの面白さを確乎たるものにするための努力をして来た。その道は平坦ではなかつた。種々な劇場の条件や芸人や踊子の素質の問題等もあり、幾度か投げ出そうかと思つた事もあつた。併し幸いこの度、小林一三氏が社長になり、僕の意欲的野心なり企業的夢想を何かと支持され、近き将来、と云つても近々数ケ月の中に劇場の大改造を約束されて呉れた。僕は青写真に鉛筆を入れ乍ら飛び立つ思いをした。これは僕だけの喜びではなく、観客の皆様に喜んで戴ける最大のニュースだと思つている。

在来の舞台と云う様なプロセニアム・アーチで客席と舞台を区切つている冷いシキリを去ろう。客席の真中に廻り舞台もセリもあり転換をスムーズに進ませるためのスライドを持ち、天井からも降りられる。レールで舞台の道具は滑る。照明に最大の効果をかけよう。美しいガールズが何人かあつたらその舞台を花の様に飾る事が出来るか。これは今迄のバァレスクの不潔さから逃れ脱却し、美しく魅力の溢れる、大人の桃源郷として出発する日の夢なのだ。東京名物の日小バァレスクを今度は日本の名物にし、世界の名物にまで高めよう。

日本美人の美しさを世界の隅々まで知らしめよう。その為には劇場の名前もバァレスク

の名称も変るだろう。

平素の絶大な御支援に報いるグッド・ニュースはここに、はっきりお伝え出来る事を喜び、必ずや御期待にそう事を約束しましよう。

いつ頃になつたら新しい舞台はお目見得出来るのでしよう。

誰が新しい舞台に立つのでしよう。

どんな趣向が盛られるでしよう。

もう少しお待ち下さい。

・・・・・・

グット・こんふほたぶるにしますから……。……

（二六・十）

〃バァレスク放談〃

バァレスクや、ストリップ・ティーズに就いて大人が鹿爪らしく論議するのをみるのは、日本だけの風景だ。勿論舞台裏の連中がその職業上の論議考究は当然な話であり、又風教関係の取締り官が、特種なメをもつて、女達を監視するのも、不思議ではないが、それ以外の、例えば大新聞の演芸欄に堂々と、バァレスクの見世物の批評が出ていたりするのを読むとおかしな気がする。つまり問題にしすぎるから、つまらん事迄、社会問題化する危険があるのだ。放つとくに限る。ほつといた処で、たかが人間のする事、限度は知れている。男女交接の図も、殺人も、犯罪奨励も、劇場で見せつこない。むしろそうした世界をきらう、陽気な馬鹿らしい雰囲気こそ、バァレスクの特種性であるのだ。アメリカでは新聞批評に、バァレスクの作品批評はとりあげない。リアルトに女の子のゴシップが小いさく花を咲かす位いのものだ。ロンドン児は口にするのを恥とし、こつそり楽しむ。パリではお尻の割目をプリプリさせ、G・ストリングで、数十人の踊子がジャンプもする。驚く者も居ないし、怒る奴も居ない。誰も問題にしない。活字や写真もお土産のパンフレ

ットや絵葉書に限る。日本では評論家が批評の筆をとり、当事者をふるへ上がらせる。バァレスクは女郎屋でも修身の道場でもなく、大巾な艶笑な見世物小屋だ。まだ日本ではお客様が見に行く事を、誰か知人に見られやしなかつたかと案じる位いだから、そつとしておいてやる可きだ。だからデカデカと宣伝等する必要はなく絶えず面白い見世物といい女を集めてさえおけば自然に道を尋ねても集つてくるものだ。来ないとすれば面白くないか、女に魅力がないかの何れかだ。アメリカン・バァレスクの育ての親、ミンスキイは、女の魅力の焦点を、女の腰と目においている。そのよき例はジプシイ・ローズ・リイであり、ジャックリン・ジョイスであり、サリ・ランダアだ。続々と後から出て来る新人も例にもれない。主要な見世物の土台が女である以上、批判も女の好き嫌いの趣味の問題に属する。見世物をつくる者も、如何に女を好きに見せるか、女の研究家であれば事足りる。日本の舞台の女は、自分の美しさ、男がハッとするシグサが、どこに隠れているか気づかないのが多い。お客様はそれぞれ楽しむ術を、充分に心得ている。そのツボを女達が心得れば益々楽しくなる事、請合いだ。そのツボとは例えば、女という者は誰も見ていない一人居の時にずいぶんと目出度い振りをするものだ。フンと微笑なさる方も、沢山と御座ろうが、つまりそうしたものを巧みに美しく舞台の上に再現してくれる女こそ、バァレスクの

女王でなければならない。うち見たところセントラルの女達は外見非常に初心だ。それが若い人達の魅力なのだろうが、女というものは初心な女が、案外な事をして、男を驚かす事があるが、その案外な事は決して憎くたらしくさせる事でなく、むしろ新鮮な驚きと喜びを男に与えるものである事を記憶すべきだ。

新宿の女達は、若くて恥しがりやで大変よろしい。いけない点は、お客様を、そつちのけにしている事だ。もつと美しく親しく、初心らしく、カマトトでもいい舞台の上からお客様と語りあはなければいけない。いくらきれいでも話した事もない女に興味を進めないのと同じ理由で。語るというのは言葉だけの意ではなく、目で身体でいくらも出来る筈だ。

僕も段々に新宿の女や板が身近くなつて来た。この辺でそろそろ本当の作品らしいものを、お見せしなければ申訳けない頃になつて来た。女の子や、役者が、もう少し僕のモノになる日を御猶予願つて、種々御声援お願いしたい。終りに僕が新宿で実現したい作品の夢を一言で申上げると、官覚的なオペラやバレエの美をバァレスク的センスに於て実現させる艶笑舞台なのです。　（二六・三）

"A Beauty is her Duty"

美を売りものにする、舞台の女達が、特に肉体を貴重な素材とするストリップの女達が案外身体の美しさを保持するのに無神経なのに驚く事がある。

アメリカの踊子達は、乳房の美しさを保つ為に、ブラジャアの中へ冷い布を入れたり、水でマッサアジをしたり、それは大変な気の使ひ様をしている。

オリーブ油で肌を濡らし、熱いタオルで蒸し、コールド・クリームの上質なので、マッサアジをして眠つたりするのは、当前の事の様にしている。ミルク風呂とまではゆかなくとも、せめて、それ位いな事はして慾しいものだ。

お化粧とは決して顔だけのものではない。それから髪も、もつともつと個性的なカットなり、結ひ方をして慾しい。今僕が目をつむつても、どの子は、どんな頭をしているか、ほとんど思い出す事は不可能な位だ。

大体、日本人の髪の毛は、黒一点張りの、単調さなのだから型に、余裕注意しないと、誰も彼も同じになつて損だ。

金髪や栗色、銀髪、赤毛といろいろあり、西洋の女達は皮膚の色も、いろいろあり、カラフルで非常に個性的な魅力を、つくり出す事が出来る。それに日本人は、衿足の美しさを、気にしたものだが、近頃の人はあまり口にしない様だ。

ロクにセットもしないパーマネントの当てつ放しで、実にきたない女の子が多い。

後ろの方ももつと注意してもらい度い。

舞台に立つ女達が美しくある為に、その美を磨き、美しさを保つ事は彼女等の職業的義務である事を自覚して、もつともつと美しくなつて慾しい。決してその美しさは貴女方だけのものではなく皆んなのものであることを忘れずに。そうした立派な責任を持つ、踊子や女優さん達が、ヒロポンを愛用し折角の肌をきたなくし、げつそり瘠せ、腕やモモに、黒々と注射の針の跡を見せている沢山の人達を見ると、がつかりして了う。

何と云う心ない仕打ちをするものか。

麻薬と云うものは、中毒すればする程始末におへないものなのだ。白い腕に針の跡を見ると痛ましさを通り越して情なくなる。

あんなものを始める動機も、やめられない気持も解るが断然やめる可きだ。

さて女の子達への苦言はこれ位ひにして？　もう一つ股と腋の下の美醜に就いて書かせ

てもらう。ストリップの女達は股を見せ過ぎ、腋の下を見せなすぎる。と云う次第は、股は出来るだけ隠している方が美しく、そうした気使ひが現れる程色つぽい。あんまり出しつ放しという奴は醜さが先きに立つてよくない。ちらつかせる巧さが、ティーズのスリルになる事御注意呉々も肝要。そして立つポーズも決して両足で立たずに股を隠す様な気持でいずれかの足をクロスさせる様におけば、見た目にも美しく軽さもある。

腋の下というものは、元来非常にエロテックな気持を刺戟する個所で、毛の剃りあとや、あの窪み、胸へかけてのふくらみ、あの辺りをもつと魅力的に見せる事を研究しなければいけない。大体手をあげたり上肢の使ひ方が女として甚だ幼稚だ。僕をして云はしむれば股よりこちらの方が技巧的にコレル処なんだが、ずいぶんいろいろと教えたり注意しても、下さえ見せれば、色気があると考え違ひをしている女の子が多い、腋の下は非常に好色的な目を楽しませて呉れる。あまり腕に力を入れないで、すんなり曲げて上げ、どちらかによじつた胸の辺りは、まことに魅力的だ。

美しく、覗き度がる個所を、より美しく磨き、はつきり見せずに、ちらつかせる処は巧みに隠すこと。以上を心得、肌や肉体の手入れを注意深くやる女達によつて占領されなければ、バァレスクは美しくならない。　（二六・五）

"バァレスクの芸"

大体バァレスクと云う場所は、お上品な、クラブや劇場と違い、どこまでも、安直で、庶民的な見世物小屋がその本領で、人間臭フンプンたる処でないと面白くない。

お得意のお客様はと云えば男が絶対多数で、何処の国へ行つても、バァレスクは、舞台は女、客席は男の天下と、相場のきまつたものだ。

だからバァレスクの芸というものが自然に、お色気とエロテイシズムに片寄るのは不思議でも何でもない。それはケシカランと云う事は絶対にあり得ない。娯楽と云つてもピンからキリ迄あり、戦時中の様に健全娯楽とか云つて、ハイキングや御説教もどきの映画や芝居ばかりが娯楽ではない。庶民生活の巾とは広いもので、その好みによつて、時により娯しみを調べてこそ娯楽になるが、見たくない種類のものを見ても娯しみにはならない。酒だつて高級のウヰスキイ、カクテルから、カストリ、ドブロクまである。ふところ具合と好みで選択するのが之人間の自由である。

ショウ・ビジネスもかくある可きものだ。

バァレスクの芸はエロティシズムを第一に、その表現は単刀直入に、飾らず、グイと思う処を突く様なもの、思い上つた洗練等という気取つたものは必要ない。民衆のカンにピンと応えるものでないと困る。

今もブロウドウエイの人気男、ボビイ・クラークが不敵にも、セックス・コメディと銘うつて演ずる一役を御招介してみよう。それはいうところの写実的演技の片鱗すら見せず、よくもこんな馬鹿げた、アクトを思いついたものだと感心する漫画的なそれでいて、誰れが見てもすぐ理窟でなく納得のゆく動作を、見事に創造して見せて呉れる。まことに壮快なものでさえある。

先づ彼が公園で若く美しい女に会う。何のかのと口説かれるが小心な彼は、好気心はあれど気は転倒し、女の肉体に圧倒され、唯口だけ、パクパクさせ声も出せない。女は馬鹿か脳足りん男と思い込み、わざと偉大なる乳房をふらつかせ、からかい乍ら退場する。後を見送る彼の目から残念そうな思い、前を抑える様な格好で持つている帽子が突然ピョンピョンと突上る。ハッとして右手で帽子を抑える。冷汗を拭こうと胸のハンカチへ手をやる。帽子は又しても静かに大きく前へハネ踊つている。……と云う様な訳。その動きの間と帽子の操作が気が利いていて、決してイヤ味は感じさせない。こんな馬鹿な、有り得な

い動作が、如何にも端的に、そのシチュエーションにピッタリして、バァレスク・アクトの見本と云える。

理論的に考えると……理論的に考える必要はない。哲学ではない。何処までも感覚的な、すぐ観客に反応する一種のアクト……御覧なさい。客席に湧き起る爆笑。これを猥褻とは誰も云わない。唯の馬鹿げたお笑いに過ぎない。お行儀が良いとは云えないが、立腹するスジアイのものでは決してない。ストリップ・アクトにしても、観客が脱げ、ストリップ！と騒ぎ、それでは仕方がない脱ぎますよ、と云う様な動作で、順々に脱ぎ、最後にもう何も脱ぐものはないと云つて裸で突立つ。腰に小さな星の様に光るG・ストリングが美しい花の様に咲いていていたりする。

これで観客も後味の悪いニゴリを感ぜずにすむ。もしこれが何もなく、毛がムサ苦しく出て居たり、それが剃つてあつたりしたら不愉快な気持しか残らない。こういう種類の見せ物の女もいるがそれは公衆の劇場に於てはない。ファン・ダンスにしても、何もつけて居ないと思わせ、そのまま終つてはいけない。何もつけていない様に見せるのがテクニックであるが、舞台の見世物にした時には、ネタを最後に割つて見せてこそ愛嬌にもなり、よくもあんなにジラして見せやがつたと云う安心感は健康な観客心理なのだ。

この辺の事を、よく理解してやれば、風紀問題に於ける誤解もなく、お互いに納得がゆき、猥雑の中にも明るく美しい、ユウモアの漂う楽しいバァレスクは誕生する。アメリカに於てすら浅い歴史のバァレスクを日本で正しく陽気な男達の娯楽場にするには、もつと深い研究と理解と年月を必要としよう。併し舞台の人々も観客も「気の利いた馬鹿らしさ」にもつと関心をもつ様に心懸けたら、日本のバァレスクも陽気で美しい女の都になる事疑いない。不潔と猥らな目的が隠されていると不道徳にもなる。芸術的意図を高く、そして表現は、クダけて。それがバァレスク・アクトの標識である。（二五・三）

"新しい期待"

日小バァレスクで僕の三十三本目のショウを上演する。この間二年数ケ月と云ふ月日は日本バァレスクの少年期の終りを意味する。今後どう発展するかは当時者の努力と優秀なパースナリテイの発見にまつよりないが、過去二ケ年の歩みから一応見当はつく。

裸モデルの出現からGストリングのストリップティザアまで、急速に物真似に出発しながらも、ここにある一つの日小バァレスク、いな日本バァレスクのスタイルを完成したと云つても誰も異存がない筈だ。ショウの要素、見世方等あらゆる劇場で日小のプレゼンテーションをサンプルにしている事実が、これを立証する。タイトルのつけ方、ガールスの構成に致るまで日小のイミテートに終始している。

どこの地方の小都市へ行つても、女のポポだのバァレスクだのと看板を掲げて何かそれらしい宣伝をしている。ガールス達も見様見真似、作者や振付屋も新しい発見やスタイルの創造等に目もくれず、ひたすら猿真似でその日暮らしをしている。知らず知らず墓穴を掘り、女達も荒んだ生活と麻薬に肉体の荒涼を知るや知らずや自滅に最後のプレストを奏

でている。僕が手がけたガールス達で、何人将来を約束出来る人がいるか考えると暗然たるものがある。そこで僕が新しい期待と望みをかけるのは、新鮮な白紙の娘達に新しい豊かな生活を与えて美しい夢を育てさせるにある。それにつけても思ふのは、マレーネ・デイトリツヒの生命や、ジプシイ・ローズ・リイの尽きざる美しさの秘密がどこにあるのだろうか、決定的に日本人は、肉体的な条件に於て彼等と問題にならないのか、或は生活の貧しさから早老を早めるのか、人間的な精神の力に於てか、芸だけの問題ではない様に思ふ。決して若さや新鮮さだけが舞台の中心魅力になるものではない。永い間の習練や技巧の練磨をへて高く広くなるものが芸の精神の底をなすものなのに………一応の段階に達した時には、すでに肉体的美しさはおとろへ何の為の苦労だつたか、盛りを過ぎた人生のわびしさに見るも気の毒な人達があちらこちらに居る。美しさを保持しつつ磨き上げる秘決は無いのだろうか僕はあると思ふ。

精神の美しさと、人間的な生活の豊かさ、自愛の暖い心、そうしたものが注意深く重ねられて行つたら、健康な肉体は、そう簡単には、おとろへて了ふものではない。どう考えても生活のひくさと精神の弱さが、人をぐうたらに導くものと思ふ。あといくつかのショウをもつて日小の歴史的バァレスクの幕は下りる。次に勝利を得る女の芸術のスタートと

完成は、果して誰の手中にあるだろうか。新しい世界のスターは何処に隠れて居るだろうか。興味と期待は皆さんばかりではなく、僕の胸中にも楽しく往来している。

（二六・十二）

〝日小バァレスクの休止符〟

新年お目出度う御座います。

さて、先月のプログラムに、後幾つかのショウをもつて日小バァレスクの幕を閉ぢると書いたら、「何故そんな馬鹿なことをするのか」「我々丸の内ファンの楽しみを何処へ作つて呉れるのか」と云ふ手紙を頂いた。僕も嬉しかつた。いづれ僕も何処かに作り度いと思ふ。バァレスクと云ふ言葉は始めて僕が使ひ、ボビイ・クラークの伝来のセックス・コメディと云ふ言葉も僕の口から拡がり、バァレスクはいろんな意味で僕の精魂をつくした生涯の最も楽しい年月の歴史の幾頁かだつた。忘れ難い二年半の明け暮れだつた。丸の内署でも一晩泊めてもらうし、警視庁にもお世話になつた。気負ひ立つた僕の気持からすればバァレスク発展の為の闘ひの一つだとさえ思えて、さつぱりしたものだつた。その間八十四万七千九百二十四人（12月22日現在）のお客様に見て戴いた統計になり、この数字は、恐らくニューヨークのミンスキイ・バァレスクも遠く及ばぬ数字であろうと一応自慢をさせて頂いて、改めて二ケ年間格別の御期待にもそえなかつたにも拘らず御贔負下さつた御

愛顧に対し厚く御礼申上げる次第です。僕の任務は一応終り、一月三十一日の終幕と共にあのまことにうすきたなくも懐しい赤い緞帳の彼方の世界、日小バァレスクは、幾多の語草のみ残して永久に消え去ることになつた。

何年か前にいろんな団体や会社が発展的解消と称して、つぶされたり統合されて了つたりしたことがあつたが、今度のこの日小の解散は本当の意味での発展的解消であり、日小の製作スタッフが、ストリッパーや踊子等と共に築いた礎石の上に、新しい構想が浮び上り、花咲き実る結果になつた事は主動者の一人としてまことに喜びに堪えない。新しい劇場の青写真やスケッチを見ると数年間はほぼ完璧に近い理想的小劇場として運営出来るだろう。劇場としてのサービスも舞台機構も申し分のない美しさと立派さを兼ね、ここなら世界一流の芸術家や芸人が出演しても恥しくないスケールのものになりそうだ。春三月の中ばに開場と云ふからお客様も亦楽しみが一つふえることになつたわけだ。現代の様な生き難い時代に、せめて娯楽位は充分に拡く、世界的な視野に於ける国際的なものが東京に一つ位はあつてもいいと僕は常々考えていた。それは決して高踏的なものではなく、アンチームで、目玉が黒くても青くても若くても老人でも充分にエンジョイ出来る質のものであつて慾しい。

騒々しくガサツな、キャバレーと云ふ処へ行つても、女が沢山居るだけで人は陽気な気分になり、一本三百円から五百円のビールを飲んで来る。これは決して酒を飲みに行くのではなく、つまり遊びと称し娯しみに行くのだ。大人達の娯しみといふものが如何に少く、巾がせまいかを思はざるを得ない。そう云ふ意味で日小バァレスク等も手頃な慰安所として一つの役目を果したわけだ。朝鮮戦線から帰つて、真すぐにかけつけて来る兵隊さん、女の子の写真を沢山写してやつて楽しんでいるコロネル、四国や青森から商用で上京し、リックをあづけて見物しタマゲテ帰るお上りさん、議会へ出席の為上京し団体で見物する議員さん、丸の内のオフィスから帰りにちよいちよいのぞく御常連。バァレスクのアプレ娘の様に云はれたり思はれたりして居るくせに案外気の小さい純情なストリップの女の子達、いよいよ最後となれば各自の胸にめいめいの感懐が湧くことだろう。

僕の心にも劇場の電気サインの明滅の様に或は古いカレンダーの様にもろもろの思ひが去来する。古いものと新しいものの為に乾盃しよう。どうぞ皆さんも、彼女等の最後の舞台に熱烈な拍手をおくつてやつて下さい。　（二七・一）

ジューン河戸、バアレスク上演曲目年代表

女の宮殿		昭和廿四年十月
女の摩天楼	〃	十二月
女の新春	〃	廿五年一月
女の地球儀	〃	一月（後半）
女の巨砲	〃	二月
女の宝島	〃	二月―三月
女の媚薬	〃	三月
女のポポ	〃	四月
女の曲芸	〃	四月―五月
女のキキ	〃	五月
ワンダフルΩ	〃	五月―六月
ワンダフルV		六月

女のデデ	七月
ヂャブ、ヂャブ・ポポ	七月―八月
濡れるマンボ	八月
ポポ・レディ	八月―九月
色ぼけポポ	九月―十月
女のパクパク	十月
女のカァペット	十月―十一月
女のホームイン	十一月
女のショウボート	十二月
女のプレゼント	十二月（後半）
女と毛皮	昭和廿六年一月
女とプラスティック	一月―二月
女と毛槍	二月―三月
女とスプリング	四月
女とペット	五月

ジューン河戸、バアレス上演曲目年代表

女と凸凹	六月
女の川開き	七月—八月
女のシリーシンフォニー	八月—九月
女の世界痴図	九月—十月
女のフィナーレ	十一月
女の蔵払ひ	十二月
女の門松	昭和廿七年一月

以上

東京バァレスク劇場興亡史

日小バァレスク　昭和廿四年十月―廿七年一月閉鎖
浅草ロック座　昭和廿一年八月―現在
（但シ途中ヨリ、バァレスク劇場ニ転向ス）
新宿セントラル　昭和廿四年十月―廿九年九月焼失・閉鎖
浅草フランス座　昭和廿六年十一月―現在
新宿フランス座　昭和廿七年八月―現在
（但シ卅二年十一月新宿ミュージック・ホールと改称）
池袋フランス座　昭和卅二年二月―現在
カ　ジ　ノ　座　昭和廿七年十一月―現在
国際セントラル　昭和廿五年三月―廿六年八月閉鎖
東劇バァレスク　昭和廿七年―廿九年十二月閉鎖
この他赤羽公楽、銀座コニー、美人座、公園劇場、池袋アバン等バァレスク劇場として

は興亡の歴史がみられる。世界中何処の都市へ行つても、これ程バァレスク小屋のある処はない。

数だけは世界一。

あとがき

僕は戦後約十年間ほとんど、裸の女の子のお相手をして暮してきた。その間、雑誌やショウのプログラムに書き続けてきた楽屋話や、女話、専門的な、といつても固苦しいものではないその道の見世物話をノートや、抜き書からも集め今度まとめて、一冊の本にすることにした。

本来読物を書く作者ではなく、まずい文章や、舌足らず。渋滞の綴方で、歯がゆい思ひをされる事を承知で、一本にするのは、その道だけに苦労して来た実験話や、身近に味つてきた話ばかりなので、その辺の同好の士には興趣深い点もあろうかと、あえて一冊にした次第だ。

戦後の混乱期に、日本の舞台へバァレスクなるものをつくり、ジューン河戸バァレスクとして売込んだ日劇小劇場のバァレスクを、昭和廿七年閉鎖したまでの約五年間を、日本の裸の歴史の前期として、今回はその間だけのものをまとめた。その後ミュージック・ホールになつて、ストリップ・ティーズをヌードと改め、裸の取扱ひを変へてからの五年間

を、後期として次の機会にまとめてみるつもりだ。

昭和卅二年十二月

岡田恵吉

題名の〝女のシリ・シンフォニー〟は、僕のヒットした記念すべきショウの題名をそのまま使用した。

なほ第二部のバァレスク話の中には、くどい程、意見の重複が、みられるが、バァレスクなるものを、認めさせようとして闘つた僕の矢傷の跡だと思召して御覧願ひたい。女の子達を教育する為に書いたものもずいぶんある。

引用や参考書もていねいに入れる可きだろうが、こまかく探し出せないので、このままにしておくが、機会があつたらはつきりさせたい。

なほ最近になつてアメリカで出版された、フォーリー・ベルジェール。ジーグフェルド・フォーリーズからも参考にして直した個所がある。ショウ・ビッズ。ストリップ・テイズ。ピクトリアル・ヒストリーオヴ・バァレスクなども参考にした。

素材そのものが、こまかいものなので、はつきりそのまま参考になるものは少く、あつちから少

し、こつちからちよつぴりと勉強して、自分ららしく考察をまとめたものが多い。不勉強の点はお教へを願ひ度い。

著者紹介

日劇ミュージック
ホール運営委員



著者 岡田恵吉　　発行者 高嶋雄三

昭和三三年二月一〇日 印刷・昭和三三年二月一五日 発行

印刷 祥美印刷株式会社 村上義夫　　製本 葛岡製本所

発行所 東京都豊島区長崎二ノ一四　　電話落合(95)五三三二

振替東京一六七八〇四　　株式会社 学風書院

定価 三二〇円

三宅艶子	私たちの時間	一五〇円
戸川エマ	おんなの部屋	二〇〇円
九重敏子	パリのアバタ	二〇〇円
高橋とよ	パリの並木路をゆく	二〇〇円
畔柳二美	私の秘密	一三〇円
壺井栄	美しい生き方を求めて	一二〇円
長谷川春子	恐妻塚縁起	二〇〇円
志賀暁子	われ過ぎし日に	二二〇円
樋田千穂	新橋生活四十年	二二〇円
春野鶴子	誰にも出来る運勢判断	一三〇円



学風書院刊

女のシリ・シンフォニー

岡田恵吉著

学風書院